

だ、たはごとを言つてゐるのだと、世間の人はいふかもしれない。さういひたい人があつたら、勝手に言はせておけばよいのです、——また若し實際その人たちのいふ通りであつたとしたら、それこそわたしは眞先きに悦ぶ筈です！ ああ、實際、わたしのいふことなど信じないでもよい、わたしを病的な人間と考へなすつても、それはかまはない、しかし、兎に角、私の言葉だけはよくよく記憶しておいていただきたいのです、萬一、わたしの言葉に十分の一、いや、二十分の一の眞實がふくまれてゐるとしたら、——それだけでも確かに恐るべきことに相違ないからであります！ いいですか、諸君、まあよく見て御覽なさい、わが國の青年たちが自殺してゆく現状を。ああ、しかも彼らは、『あの世に行つたら、どうなるのぢや？』などといふハムレット流の疑問は少しも持つてゐないのですよ。かかる疑問は影すらも見られないのです。彼らといへば、われわれの靈魂と、來世でわれわれを待つてゐる一切のものに關する議論を、その本性の中で特に抹殺し葬り去つて、上から砂をかけてしまつてゐるかのやうです。最後に、わが國における放縱及び肉慾の奴隷となつてゐる多くの人間どもを御覽なさい。本件の不幸なる犠牲者フォードル・パーヴロキッチなど、彼らの中の或る者たちに比べると、殆んど無垢な嬰兒にもひとしいのであります。而もわれわれはみな彼の氣持が分かるのです。つまり、『彼はわれわれの間に生きてゐたからです。』……さうです、いつかはわが國のみならず、歐羅巴においても第一流の學者たちが、露西亞の犯罪心理を研究するやうになるでせう、この問題はそれだけの價値があるのです、しかし、この研究は、もつと後になつて餘裕の出來たとき、つまり現在の悲劇的混沌が比較的背後に遠ざかつた曉に、初めて行はれるのでありませう、その時こそ、人々は私などよりは遙かに理智的に、また公

平に觀察を下すことが出来るに相違ありません。しかし、今日においては、われわれはただ驚ろいてゐるか、或ひは驚ろいてゐるやうな振りをしながら、實は却つてその光景に舌鼓をうつて、自分たちに遊惰な、犬儒的な類廢氣分を聳動させるやうな、突飛な、強烈な感覺を愛するか、或ひは幼兒のごとくその怖ろしい幻影を拂ひのけて、物凄しい光景が消えてしまふまで、頭を枕の中に埋めて、しかもその後ではすぐ快樂と遊戯の中に一切を忘れてしまふか、この三つのうちのいづれかであります。しかし、われわれもいつかは眞面目に、考へ深く生活を始めなければなりません。自分自身に對しても、社會に對すると同じやうな視線を注がなければなりません。われわれも、わが國の社會の出來事については、多少とも理解をもつ必要があるのです。少くとも理解を持たうとつとめなければならぬのです。前代のある*大文豪は、**その傑作の結末において、全露西亞を或る未知の目的に向かつて疾走する三頭馬車に喩へて、『ああ、トロイカよ、鳥のやうなるトロイカよ、誰が考へ出したのか！』と絶叫してゐる。このまつしぐらに駈けてゆく三頭馬車トロイカに出會ふと、他の國民はみんな敬意を拂つて、道をゆづるのだ、と誇らしい歡喜をもつてつけ加へてゐます。さうです、諸君、敬意を拂はうが拂ふまいが、とにかく道をゆづつてくれるのは結構です。しかし天才ならぬ私の眼から見れば、この偉大な藝術家がかういふ結論を下したのは、子供らしい無邪氣な樂天主義にとらはれたためか、それとも單に、當時の檢閲を恐れたためとしか思はれません。なぜかと言へば、もし彼の三頭馬車に、彼の主人公のサブケーキッ

チヤ、ノズドリヨフヤ、チチコフなどをつないだならば、誰を馭者に仕立ててみても、そんな馬ではらくなところへ走りつく筈はないからであります！ しかも、それは昔の馬で、今日のわが國の馬に較べると遙かに劣つてゐるのです、現代のチチコフはもつともつと洗練されてゐます。……」

ここでイッポリットの演説は拍手のために中斷された。露西亞の三頭馬車の比喩にふくまれた自由主義が聽いてゐる人たちに受けたのである。尤も、その喝采は二つ三つ洩れただけであつたので、裁判長も聴衆にたいして、『退廷を命ずる』などと嚇す必要はなかつた。ただ彌次の方をきつと睨んだに過ぎなかつた。が、イッポリットはすつかり乗氣になつてしまつた。彼は今まで一度として喝采された例しかなかったのだ！ 彼は永いあひだ傾聴されることなくして今日に至つたが、今や忽ち全露西亞に呼號する機會を得たのであつた。

「實際」と彼は言葉をつづけた、「このたび、はからずも露西亞全國に悲しむべき名聲を馳せたカラマゾフ一家は、一體、いかなるものでありませうか？ わたしはあまりに誇張し過ぎるかも知りませんが、わが國における現代の知識階級に共通な或る根本的な要素が、この家族の中に窺はれるやうな氣がします。——いふまでもなく、凡ゆる要素といふ譯でもなく、『水のしづくに映つた太陽のやうに』、顯微鏡でも見なければならぬに小さなものですが、しかもなほ、それは何かを反映してゐるものです。何かを物語つてゐるのです。このだらしなく、淫蕩的な哀れな老人、あんな惨めな最後を遂げた『一家の父』を御覽なさい。見すばらしい居候から身を起こして、思ひもよらない偶然な結婚によつて、持參金を元にして資金を握つた生れながらの貴族は、最初は智的才能をもつた——といつて

も、相當な才能をもつた小さかしいべてん師で、淺はかな追従ばかりしてゐる道化者で、わけても高利貸でしたが、年を経るに従つて、つまり、資産が殖えるにしたがつて、だんだんと氣が大きくなつて、屈従したり追従したりすることがなくなり、わづかに皮肉な憎々しい冷笑家となり、放蕩者となつてしまつたのです。あくまでも生きようとする氣持がはげしくなるにつれて、精神的な方面はすつかり影をひそめたのでした。やがてつひには、肉の快樂のほかには、この世に何物をも認めなくなつて、自分の子供たちまでも、さういふ風に躰けたのであります。彼は父としての義務觀念などは露ほども持つてゐなかつた、むしろそんなものを冷笑してゐたのです。彼は自分の小さい子供たちを、下男まかせに邸裏で育てさせて、彼らがよそへ連れて行かれたりすると、かへつて喜んだくらゐでした。彼らのことをすつかり忘れてしまつたりしました。この老人の精神的法則は——*après moi le déluge*われなきあとには洪水あるともでした。これは公民の觀念に全く背馳するものでした。社會といふものから全く離れてしまつてゐる憎むべき態度でさへありました。『世界中が焼けてしまつても、自分だけが無事なら』といふ利己心でした、彼はいい氣になつて、満足し切つて、まだ二十年でも三十年でも、かういふ風な暮らし方をしたいと渴望してゐました。彼は現在の自分の息子の金をごまかして、つまり母親の財産を息子に渡してやらすに、その金で息子の戀人を横取りしようとしたのです。さうです、わたしはペテルブルグから來られた敏腕なるフェチニコフキツ氏に、被告の辯護をゆづりたくはありません。わたしは自ら眞實を語ります。彼ゆゑに息子の心に鬱積したかすかすの不滿を、わたし自身もよく分がつてゐるのです。しかし、もう澤山です、この哀れな老人のことはもうよしませう。澤山です。彼はその報いを受けました。それにし

でも、彼が父親であり、現代的な人間の一人であつたことを想ひ起こしたいものです。彼が現代的な多くの父親の一人であると申しても、社會を欺くことにはならないでせう？　しかし、悲しいかな、現代の父親の多くはあれほど世間を馬鹿にはしてゐないとはいへ、（つまり、彼らはよりよき教育、よりよき教養を得てゐるからです。）しかも、彼らも殆んどフォードルと同じやうな處世哲學をもつてゐるのです。多分わたしは厭世主義者でせう。それでも構ひません。わたしはあなた方に許していただくといふ條件の下に、この論を始めたのです。で、前もつて約束しておきませう、あなた方はわたしを信じなくつてもよろしい、一寸も信じなさらんでもよろしい、わたしは構はず話しますから、信じなくてもよろしい。ただ、わたしのいひたいことをすつかり述べさせて下さい、そしてわたしの言葉を多少なりとも忘れないでいただきたい。ところで、今度はこの老人、この一家の主の子供たちです。その一人は現に眼の前の被告席に居ります。彼のことはいづれ、後で申しませう。後の二人について、ちよつと簡単にいつておきますが、この二人の兄弟のうち、兄の方は現代的な青年の一人です。彼は立派な教育を受け、頭もかなりしつかりしてゐますが、何ものも信じようとせず、多くのものを、この世における餘りにも多くのものを、父親とそつくり同じやうに斥けてゐるのです。我々一同は彼の説を聴きました。彼はこの町の社交界にかなりに氣うけがよい。彼は自己の意見を隠しはしない。それどころか、かへつて、全くそれどころではなく、明らかに述べてゐたのです。従つて、今わたしは彼のことを評する勇氣をも與へられた譯です。が、もとより、それは個人としてでなく、ただカラマゾフ家の一員として論するのであります。さて昨日です、この町はずれで、病氣にかかつてゐた一人の白痴が自殺しました。

この事件に密接な關係があり、もと、同家の召使をしてゐた男で、恐らく、フォードル・パーヴロキッチの私生兒かも知れませんが、それはスメルチャコフといふ男でした。彼は豫審のときヒステリックな涙を流しながら、この若いカラマゾフ、すなはちイワンが精神的にだらしないために、いかばかり彼をおどろかしたかを物語りました。『あの人の御意見によりますと、この世では何事もみんな許されてゐることになります。これからは何一つ禁じられることがない——とかうあの人は教へて下さいました。』と言ひました。この白痴は、かうした説を教へられて、そのためにすつかり發狂してしまつたらしいのです。尤も、勿論、持病の癲癇と、主人の家に突發したおそろしい騒動が、彼の精神錯亂をたすけたことはいふまでもありません。しかしです。この白痴は極めて、極めて興味のあることを一つ聞かしてくれました。それはより以上に賢明な觀察者の言としても、立派なものといへるものです。従つて、わたしもこのことを言ひ出した譯です。つまり、『三人の息子たちの中で、その性質からいつて、最もフォードルに似通つてゐるのは、あのイワンです。』と、彼はわたしにかう言ひました。わたしはこの言葉を披露して、一旦はじめた性格論をやめることに致します。これ以上つづけるのは氣がきかないことだと思ふからです。ああ、わたしはもうこれ以上、推斷をすることを望みません。この青年の未來に對して、縁起でもない鴉の鳴き眞似をしようとは思ひません。嚴然たる正義の力が、今なほ彼の若い心の中に生きてゐて、家庭的な愛の感情が、不信や犬儒主義に消されてゐないことを、われわれは今日ここでこの法廷で認めたのです。この不信や犬儒主義は、思想の眞實な苦しみの結果といふよりは、寧ろ父親から遺傳したものであります。次には三男であります。彼は兄の暗澹たる腐敗しきつた人生觀とは全

く正反對に、敬虔な氣持をもつた謙讓な青年であります。彼はいはゆる『國民精神』——すなはち、わが國の思想をもつインテリゲンチヤに屬する理論家の間で、このむづかしい名稱を與へられてゐるところのものに合一せんとしてゐます。御存じではありませうが、彼は修道院にはいつてゐました。それも、もう少しで僧侶になるところだつたのです。彼の心中には、無意識にはありませうが、早くから、あのおどとした絶望の念が現はれたやうに見えます。今日の悲惨なわが國の社會においては、犬儒主義と社會の腐敗を怖れて、罪惡といふ罪惡を歐羅巴文明によるものとするやうな誤謬に陥り、このおどおどした絶望にひかされて、彼らの所謂『生みの大地』に走る者が多いのです。即ち、幻影に脅やかされた子供が母親の胸にすがりつくやうに、彼らは生みの大地に抱かれようとしてゐるのであります。弱り果てた母親のしなびた乳房にとりついて、安らかに眠らうとしてゐるのです。たとひ、一生をむざむざと送らうとも、恐ろしい幻影だけは見たくないと渴望してゐるのです。わたしとしては、善良にして天分のあるこの青年に、ありとあらゆる幸福を望んでゐます、わたしは彼の若々しく美しい魂と、國民精神に對するその憧憬が、後に至つて、よく世間にあるやうに、精神的方面からは暗澹たる神祕主義に陥らぬやう、また公民としては、愚劣な排他的愛國主義に走らないやうに望みます。この二つの要素は、彼の兄を苦しめてゐる歐羅巴文明——犠牲なしにゐられない、かつ曲解されたる、歐羅巴文明——から生ずる早老などといふものよりは、一そう底意地のわるいものかも知れません。」

排他的愛國主義、神祕主義といふ言葉に對しては、再び二三の拍手が起こつてゐた。イッポリットはもうすつかり熱中し切つてゐた。しかし、彼の演説は少しく事件に不適切なうへに、筋道が頗る漠然と

してゐた。それにしても、憎惡の念に燃え立つてゐる肺病やみの彼は、一生にせめて一度たりとも、思ふ存分のことと言ひたくてたまらなかつたのである。その後、町の人々は、イッポリットがいつぞや、一度か二度、衆人環視の中で、イワンに議論でやり込められたのを覚えてゐて、今こそ復讐してやらうといふ卑しむべき動機から、イワンの性格論をやつたに相違ないと、そんなことを噂してゐた。が、さういふ結論が正鵠を得てゐるかどうか、わたしには分からない。いづれにもせよ、これはほんの序論であつて、やがて演説は次第に事件の本質に近づいて行つた。

「ところで、今度は現代的な家長の長子についてでありますが、」とイッポリットは言葉をつづけた。

「彼はわれわれの前で被告席に坐つて居ります。われわれの前には彼の生活と、所業と、行爲が展開されてゐます。つひに時期が來て、何もかも表面に暴露されてしまひました。自分の弟たちが『歐羅巴主義』や、『國民精神』を抱懷してゐるに反して、彼は在るがままの露西亞を代表してゐるのです——ああ、しかし、全露西亞を代表してゐるではありません。斷じてさうではありません。もし全露西亞だとしたら、それこそ飛んでもない事になります！ それにしても、そこには彼女、われわれの於魯西亞、母なる露西亞があるのです。彼女の匂ひがし、彼女の聲が聞こえます。ああ、われわれ露西亞人は氣早やです。われわれは善と惡との驚ろくべき混合です。われわれは文明とシルレルとの愛好者でありながら、しかも酒場々々を暴れ廻つては、酔つ拂ひの飲み仲間の髭を引きむしつてゐます。ああ、われわれとても立派な善良な人間になることがあります。しかし、それはただ、われわれ自身、いい氣になれて、お人よしになれる時に限るのです。さうです、われわれは高慢な理想に動かされる事さへありま

す。ただ、その理想は自ら實現されねばならぬといふ條件つきであります。われわれのところへ棚ぼた式に落ちて来るといふこと、大事なことは、無報酬で、何の代償をも拂はずに天から降つて来るといふ條件つきです。その爲に、われわれは支拂をすることは好まないが、その代り貰ふ事は大好きです。しかも、何事によらずさうなであります。まあ、われわれに與へて御覽なさい、この世において得られる限りの幸福を與へて御覽なさい（實際、得られる限りの幸福でなければなりません、決しておまけに妥協はいたしません）。何事によらず、われわれの氣持を妨げずにおいて御覽なさい、そのときこそ、われわれも立派な善人になり得ることを證明いたませう。われわれは決して貪婪ではありません。が、なるべく澤山、出来るだけ澤山の金を與へて御覽なさい。さうすれば、あなた方は、われわれがいかに鷹揚であり、いやしむべき金錢に對する輕侮の念をもつて、一夜のうちに湯水のやうに費ひ果してしまふかを御覽になるでせう。若しも、せつばつまつた時に、金をくれるものが誰もなければ、われわれはそれをちやんと手に入れて御覽に入れます。しかし、このことは後廻しにして、順序を追うてお話しすることにしませう。先づ我々の前には、見すてられた憐れな子供が居ります。それは先刻、尊敬すべき當地の市民（悲しいかな、外國の生れです！）が申された通り、『靴も履かずに裏庭で』跳ね廻つてゐたのです。もう一度くり返して申しますが、わたしは被告を辯護する點では、決して人後に落ちる者ではありません。わたしは告發者であると同時に、辯護者でもあるのです。さうです、わたしも人間です、わたしは子供の頃のことや、ふるさとの家などの最初の印象が人間の性格にどのやうに影響を與へるものかといふことをよくよく承知してゐます。ところが、その子供は今やすでに生長して、立派な青

年であり、士官であります。彼は亂暴であり、決闘を挑んだりしたために、わが豊饒なる露西亞の邊境の町へやられるのです。そこで勤務し、また放蕩をしますが、無論、大きな船は航海も大きいわけです。しかし、必要なのは資本です。先づ何はおいでも金です。そこで長いこと論争したあげく、つひに父親から最後の六千留を受け取ることに決めましてその金が届くのであります。ここで注意しなければならぬのは、彼が證文を渡したことであります。つまり、もうこれ以上、無心はしない、父親との遺産争ひはこの六千留で切りをつける、とかういふ意味の書面が残つてゐます。そのとき彼は初めて、高尚な性格と立派な教養をもつた一人のうら若い處女に會ふのです。ああ、わたしはここで詳しく繰り返すのをやめませう。これはあなた方が唯今お聞きになつたやうに、名譽と自己犠牲の問題ですから、わたしはもう敢へて申すまい。浮氣で淫亂ではあるが、眞の高潔さと、高邁な理想のまへに跪びいた青年の姿は、われわれの前に非常な同情の光りをもつて照らし出されたのであります。所が、そのすぐあとで忽ち、同じこの法廷において、メダルの裏面が現はれたのです。わたしはここでもまた臆測をつしんで、なぜさうなつたかといふやうな解剖はやめになります。この婦人は長いこと隠してゐた憤りの涙に暮れながら、彼の方が先に相手を輕侮したのだと述べました。つまり、彼女の不注意で、抑制がなく、恐らくは發作的な動作（それも高尚で、大らかではあつたが）のために輕侮したと、彼女は申しました。彼は、この處女の許婚たる彼は、誰よりも先きに嘲笑的な微笑を洩らしました。男が洩らしたこの微笑だけは、彼女にもどうしても忍ぶことが出来ませんでした。男がもう自分を裏切つたことを知りながら、——女は將來どんなことでも、男の心變りをさへも忍ばねばならないと信じて、背いたことを

知りながらも、殊更らに男に三千留の金を渡したのであります。これは許婚の心變りを助けるために渡すのだといふことを、はつきりと男に思ひ知らせたのであります。『いかが、受け取りますの、それほどあなたは皮肉屋ですの？』と彼女は試すやうな眼つきで無言で質問をしたのです。彼は相手の顔を見て、相手の肚の中をすつかり悟りながら（先刻かれ自身あなたの方の前で、ちやんと悟つてゐたと申し立てました）、平氣でその金を着服して、新しい戀人と一しよに、わづか二日で豪遊して費ひ果してしまつたのです。一體、われわれはいづれを信じたものでせうか？ 最初の風説——善行の前に跪づいて、最後の生活費を投げだすに至つた高潔な心がけを信すべきでせうか？ この世において兩極端に遭遇した場合、その中間に眞理を求めのが定石ですが、この場合は全くさういふ譯にはゆきません。最初の場合にも、彼は心から高潔であり、第二の場合にも心から下劣であつた、と言ふのが最も確かな所でせう。では、なぜでせうか？ これはわれわれ露西亞人の天性が大まかだからです。カラマゾフ式だからです——つまり、わたしはこのことをいひたかつたのです、——露西亞人の心は極端な矛盾を兩立させることが出来、二つの深淵を同時に見ることが出来るのです、——われわれの上にある天上の深淵と、われわれの下にある最も下劣な、惡臭を放つ墮落の深淵を見ることが出来るのであります。カラマゾフの一家を、親しく、つぶさに見て來た若き觀察者、すなはちラキーン氏の先きほど述べられた立派な意見を、あなた方は記憶して居られるでせう。ラキーン氏は『奔放不羈な性格を有する彼らにとつては、低級な墮落の感じが、高邁そのものの感じと等しく、必要缺くべからざるものです』と申されましたが、實際その通りなのです。全く彼らには絶えずこの不自然な混合が必要なので

あります。二つの深淵、同時に二つの深淵を窺ふ——といふことがなければ、われわれは不幸であり不満に充たされるのであります。われわれの生活は充實しないのであります。われわれは大まかです。母なる露西亞と同じやうに廣々としてゐます。われわれはさまざまなるものを内部に共存させてゐます。種々多きものと一しよに暮らしてゐるのであります！ 陪審官諸君、序でながら言つておきますが、われわれは今この三千留の問題に觸れましたが、ここでちよつと一こと先廻りさせていただきたいと思ひます。考へても御覽なさい、あのやうな性格の所有者たる彼が、あのやうな羞恥、あのやうな不名譽、あのやうな極端な屈辱を忍んで、あの時あの金を受け取つておきながら、いいですか、その日のうちに三千留の半ばを割いて、守袋のなかに縫ひ込み、あらゆる誘惑や極度の缺乏と闘ひながら、そのうち一箇月間も、頸にかけてゐたといふではありませんか！ あちこちの酒場で酔つ拂つてゐるときにも、戀敵たる自分の父親の誘惑から、戀人を救ふために是非ともなくてはならぬ金を、誰からといふあてもなしに借りようとして町を飛び出した時にも、彼は敢へてこの守袋に觸らうとはしなかつたではありませんか。あれほどまでに嫉妬してゐた老人の誘惑から戀人を救ひだすためだけでも、彼はその守袋を開けるのが當然だつたのです。戀人の傍を離れずに、ちつと番をしてゐた、彼女が最後に『わたしはあなたのものです』といつて、今の恐ろしい境遇から少しでも遠いところへ、二人で逃げてゆくやうにと頼むときを、待つてゐなければならなかつた筈です。しかるに、彼はさうしなかつたのです。彼は自分の守袋に手もつけなかつたのです。一體、いかなる理由によつて、手をつけなかつたのでありませうか？ 最初の理由なるものは、前にも申しました通り、『わたしはあなたのものです、どこへでもつれて行つて

下さい』といはれたとき、二人の落ちのびる費用として必要だといふことであります。が、この第一の理由は、被告自身の言葉によりますと、第二の理由のために力を失つてしまつたのであります。『自分がこの金を持つてゐる間は、』と彼はいつてゐます。『卑劣漢ではあつても、泥棒ではない。』なぜかといへば、いつでも自分の辱しめた女の所へ行つて、欺いて取つた金の半分をつきつけて、『さあ、この通り、僕はあるたの金を半分つかつてしまひました。これは僕が意氣地なしで、徳義心のない人間だといふ證據です。若し何なら卑劣漢といつてもいいです（わたしは被告の言葉通りにいひます）。しかも、たとひ卑劣漢ではあつても、決して泥棒ではありませんよ。なぜといつて、若し僕が泥棒のなら、この残りの半分をここへ持つてなど來ないで、最初の半分と同じやうに、自分の懐へ入れてしまつた筈です。』いつ何ときでも、かう言へるからなのです、——何と驚ろくべき説明ではありませんか！この非常に亂暴であると同時に、あんな屈辱を忍んでさへ、三千留の誘惑を斥け得なかつた弱い人間が、突然こんな堅固な克己心を發揮して、千留あまりの金に手もつけないで、頸にかけてゐたといふではありませんか！これが今われわれの解剖してゐる性格と、多少なりとも一致するでせうか？ いや、本當のドミトリイ・カラマゾフならば、たとひ、實際に金を袋の中へ縫ひ込まうと決心したにもせよ、そんな場合に、どういふやり方をするのが至當か、今あなた方にお話いたしませう。先づ第一には、誘惑が生じたとき——つまり最初半分の金をささげた新しい戀人を、再び、どうにかして慰めてやらなければならぬ破目に立ち至つた時、彼は自分の守袋を開いて、その中から、——初めに百留くらゐ取り出したこととせう、——なぜといつて、必らず半分、すなはち、千五百留かへさなければならぬ

いといふ譯はなく、千四百留でも充分だからであります。全く、いづれにしても結局は同じことになります。『僕は卑劣漢だが泥棒ではない。千四百留だけ返しに來たのだから。若しも、これが泥棒ならば、残らず自分のものにしてしまつて、一文だつて返しはすまい』といふ氣持なのです。しかし、それから暫らくすると、また袋を開けて、二度目の百留を取りだすのです、次に三度目、四度目を出すといふ場合で、ほんの一箇月の終り頃には、最後の百留を残したきりで、みんな取り出してしまふではありませんか。それに、まあ、せめてこの百留だけでも返しにゆけば、それでいい、何といつても『卑劣漢ではあるが、泥棒ではない。二千九百留は費かつたが、百留だけ返したから。泥棒ならば、それだつて返しはしない。』と、かういふでせう。ところが、つひに、一文なしになつてしまふと、今度は最後の百留に目をつけて、『百留ばかり持つてゐたところで、何にもならないぢやないか、——一そのこと、これを費つてしまはう！』と獨りごとをいつた筈です。われわれの知つてゐる、本當のドミトリイ・カラマゾフであれば、必らずさうする筈です！この守袋の話は、もう想像することも出來ないくらゐに、現實と矛盾してゐます。何ごとによらず假定の出來ないことはありませんが、こればかりは手がつけられませんが、それにしても、この問題はいづれまた歸ることにいたしませう。

イッポリットは父と子の間の財産争ひ及び家庭的關係について、すでに檢察當局に分かつてゐることを順序立てて、述べたのち、更に二三の證據によつて、もう一度、この遺産の分配問題について、誰が善くて誰が悪いなどと決めることは、全く不可能なことであるといふ結論を下し、やがて、ミーチャの頭に執念のやうにこびりついてゐた三千留の件について、醫學鑑定の問題を取りあげて行つた。

「醫師の鑑定は力めて、被告が正氣を失ひ、偏執狂であるといふ證明に力を入れてゐます。しかし、わたしは被告が確かに正氣であることを主張いたします。ところがこれが最も悪いことでもある、若しも彼が狂人であるならば、恐らく、もつと聰明な方法をとつた筈です。被告が偏執狂であるといふ説には、わたしも同意はいたしません。それにはただ一つの點においてのみです、——すなはち、父親から三千留の金を支拂つて貰へなかつたといふ被告の見解であり、これには鑑定も與へられてゐることですが、被告がこの三千留の問題について、つねに悲憤慷慨してゐたといふ事實を説明しようと思へば、彼には狂氣に陥りやすい傾向があつたといふこと以上に、恐らく、もつともつと適切な觀點を見いだすことができると思ひます。私としましては、若い醫師のワルゲンスキイ君の御意見に全く賛成です。同君によれば、被告の智的能力は今も昔も完全であり、ノルマルであるが、ただ極度に憤激し、憎惡の念に燃えてゐたに過ぎないといふ、つまりそこなのです。被告をして絶えず自己を忘れるほど激昂させる種になつてゐたのは、あの三千留といふ金高の問題ではありません。そこには彼を激昂させる特別な原因が

潜んでゐたといふことです。その原因といふのは、——つまり、嫉妬なのです！」

ここでイッポリットは、グルーシエンカにたいする被告の宿命的な情熱を説明した。彼は被告が、若い女人』の家へ出かけて行つて、『その女を殴り殺さうとした』——これは検事が被告の言葉を藉りて説明したのである、——最初の一瞬間のことから説明した。

「ところが、女を殴り殺す代りに、その足もとにひれ伏してしまつたのです。これこそ、この戀愛の始まりでありました。同時に、被告の老いたる父親もまた、その若い色眼をつかつてゐたのです。實に驚ろくべき、由々しい符合ではありませんか。なぜかといへば、二人とも以前から、その女を知つてゐたのにも拘はらず、ちやうどこの時から二人の心が燃え始め、制御することのできないカラマゾフ一流の情熱に囚はれたからであります。さて、ついさつき、われわれは彼女の告白を聞きましたが、『わたしは二人とも嘲笑してゐました』と言つて居ります。彼女は急に二人をからかつてやりたくなつたのです。最初はさうでもなかつたのですが、不意にさういふことを思ひついたのであります。乃で、早速二人を征服してしまひました。まるで金といふものを神様でもあるやうに崇め奉つてゐる老人は、自分が自分の許に訪ねてくれればやると言つて、すぐ三千留の金を用意したのですが、その後になると、もし彼女が自分の本妻になつてくれるならば、自分の名前も財産も、全部彼女の足もとに投げ出さうと言ひ出しました。これには確かな證據があります。一方、被告の方はどうかといへば、彼の悲しい運命は現在われわれが見る通りの如くであります。しかし、それがこの若い女の『遊び半分』だつたのです。この妖婦は不幸な青年に對して、彼が戀敵である父親の血にまみれた兩手を差しのべた最後の瞬間に初め

て希望をあたへたのです。つまり、彼はかかる状態にあつて捕縛されたのであります。「わたしも、わたしも一しよに懲役へやつて下さい。わたしがあの人をこんなことにしてしまつたのです。わたしが悪かつたのです！ わたしが誰よりも罪が深いのです！」被告が捕縛された瞬間、彼女はかう叫びました。衷心から悔悟してゐたのです。わたしが先刻述べた若き天才ラキーチン氏は、簡單ながら、かなりに要領のよい言葉で、この女主人公を批評しました。「彼女はいまだ年若くして、自分を誘惑し、置きざりにして行つた情人のために、あまりにも早く幻滅と欺瞞と墮落を経験した。ついで貧困と、潔癖な家族の呪ひを嘗め、あげくの果ては彼女がいまだ恩人と思つてゐる、ある裕福な老人の保護に身を委ねることとなつた。恐らく彼女の心は多くの善良さがあつたことであらうが、あまりにも早くから惱みを味はひ過ぎた。そのうちに、彼女は金銭に戀々とする打算的な性格がつくられ、社會に對する冷笑と反抗心とをもつやうになつた。」とラキーチン氏は申して居ります。かうした性格論にしたがへば、彼女が二人を嘲笑したといふことは、容易に首肯され得るのであります。この一ヶ月間といふものは、彼は自分の許嫁を裏切つたり、名譽にかけて依托された他人の金を着服し、やる方なき愛慾と道德的墮落とを味はひ更にまた絶え間のない嫉妬のために、殆んど精神は錯亂し、今にも狂はんばかりであつたのです。その嫉妬の相手は誰であつたか？ ほかでもない、現在の自分の父親に對しての嫉妬なのです！ しかも何よりもやりきれないことは、この氣狂じみた無智な老人が、その三千留の金をもつて、被告の女を籠絡し、誘惑しようとしてゐたことです。彼の眼から見れば、その金は自分の財産である、つまり、自分に譲られた母親の遺産であると思ひ、父親を責めてゐたところの金なのであります。さうです、これ

はもとより被告としては堪へ難いところですが、その點はわたしも同意します！ かういふ場合、人が偏執狂になるのは當然のことです。この場合、金は問題ではない。その金がさうした忌はしい無智な態度によつて利用され、彼の幸福を破壊したといふ點にあるのです！」

ついでイッポリットは、なぜ被告が次第に現在の父親を殺さうと考へるやうになつたかといふ問題に移り、一々その事實に據つて論證した。

「初めのうちは、彼はただ、到るところの酒場を吹聴して歩くばかりでした。まる一ヶ月もそのことを言ひ觸らしてゐたのです。ああ、絶えず彼は大ぜいの人に取巻かれて、あらゆることを人々に話すのが楽しみだつたのです。どんな惡魔的な怖ろしい考へでも、相手の見さかひもなく話すのが好きだつたのです。彼は感想を他人にぶちまけて、どうしたわけか、その連中がすぐに自分に充分の同情を寄せたり、また、あらゆる彼の苦しみと心配とに加擔したり、立場を了解して賛意を表してくれることを要求するのです。さうでないといふと、彼は狂暴の念にかられて、酒場をぶちこはさんばかりの亂暴を働くのです。(ここで參謀大尉スネギーレフの逸話がつづいた)。この一ヶ月の間、被告の言つたことに耳を傾けたものは、これは單に嚇かしや怒號だけではない、と氣付いたに相違ないのです。また實際に、かうした無我夢中の場合には、こんな嚇しは、えて實行に移り易いものです。」

ここで機事は修道院における家族の會見や、アリョーシャとの會話や、被告が食後に父親の家に闖入して、怖ろしい場面を演じたことなどを説明した。

「わたしは被告が以前から父親を殺すつもりで、周到な企みをしてゐたなどとは斷言いたしません。」

と、イッポリットはつづけた、「しかし、この考へは幾たびとなしに被告の念頭に浮かんだのであります。さうして彼はそのことについてよくよく考へたのであります。それには多くの事實もあり、證人もあります。また、彼自身の自白もあることです。陪審官諸君。」と彼は附け加へた。「實際、わたしは今日まで、被告が意識的に前もつてこの計畫を立ててゐたものと見做すことを躊躇してゐました。被告は以前から既に屢々、あの兇行の瞬間を空想してゐたものと信じますが、それはただ空想のみにとどまつて居り、その可能なることを信じてゐたのに過ぎないのであります。もとより、その時機も兇行の手段も決めてゐなかつたのであります。しかし、わたしは今日といふ今日まで、この法廷に持ち出されたあの怖ろしい證據の書類を見るまでは迷ひぬいてゐたのであります。諸君もあの若い婦人が『それは計畫です、人殺しの筋書です!』と叫んだのを聞きなすつたでせう。彼女は、あの不幸な惨めな被告が、酔ひにまかせて書いた手紙を指して、かう言つたのです。實際、この手紙はまた殺人の事實が、豫定に入つてゐたといふことを、如實に物語つてゐるではありませんか。この手紙は犯罪のまる二日前に書かれてゐます。それによつて考へますと、被告はその怖ろしい計畫を遂行するまへ二日前に、もう翌日金を手に入れることが出来なければ、『イワンが出立するとすぐ父親を殺して、赤いリボンで結んだ封筒の中にはいつてゐる』あの金を、父親の枕の下から取り出さうと決心したのであります。これは今となつては、火を見るより明かな事實なのです。どうです、『イワンが出立するとすぐ』といつてゐるからには、彼はもうすつかり熟考して、段取りもきめてゐたのです。そして擧句はどうであらうか。何もかも手紙の通りに行はれたのであります。前もつて計畫され、熟考された結果であつたことは、疑

ふ餘地もないのであります。犯罪は金を奪ふのが目的で遂行されたものであります。これは現在、あきらかに立證されてゐます。書かれてもあるし、署名されてもゐるのです。被告も自分の署名を否認してゐないのであります。或ひは酔つ拂つて書いたものだ、といふ人があるかも知れません。しかし、それは少しも罪を軽くする言譯にはならないことです。否、むしろ、素面のときに計畫してゐたことを酔つ拂つて書いたとも言ひ得るのであります。若し素面の時に計畫して置いたのでなければ、酔つてゐるときに書けるものではない筈です。では、彼はなぜ酒場なんかで自分の計畫を吹聴したのか? 豫めさうした犯罪を計畫してゐる場合、絶対に胸一つに藏ひこんでゐる筈だと言ふ人があるかも知れませんが、また、それに違ひはありません。しかし、彼がそれを吹聴してゐたのは、まだはつきりした計畫や豫定が立てられてゐない、ただ希望や衝動があつた頃なのです。それで後になると、餘り吹聴して歩かないやうになつたのであります。居酒屋『都』で、この手紙が書かれたとき、彼は酒はうんと飲みましたが、ふだんとはちがつて、ちよつと球を撞いただけで、隅の方に腰をかけたまま、話をしようとしませんでした。ただ當地のどこかの番頭を追つ拂つたことはありましたが、それとても殆んど無意識にやつたことで、一體彼はかうした酒場などへはいると、きつと何か一騒動おこさずには済まされない癖があつたのです。尤も、彼が最後の決心をすると同時に、今まで至るところで自分の計畫をあまりに吹聴して廻つたことが計畫を實行した暁、それがばれて罪をうける原因になりはしないかと懸念しなければならぬ筈でした。しかし、時すでに遅く、どうにも仕様がなない。今さら取消すといふことも出来な

い。まあ、前にも自分を救つてくれた幸運が、また今度も救つてくれるかも知れない。どうです、諸

君。彼は自分の運勢をあてにしてゐたのです！ わたしもこのことは認めるのですが、彼はさまざま手段を講じて、運命的な破滅を避けようとしたり、また血腥い結末から逃れようとするために、あらゆる限りの努力をなしたのであります。『明日、僕はいろんな人に三千留の融通を頼んでみよう』と彼獨特の口調で書いてゐます、『しかし若しも誰も貸してくれないとなつたら血を流すだけの話だ』もう一度くり返して申しますが、彼は酔つ拂つて書いた筋書の通りを、素面で實行したのであります！』

ここで、イッポリットは、ミーチャが金を工面しようとして、あれかこれかと苦心した顛末を詳細に説明した。彼はミーチャがサムソフを訪問したことや、レガーヴィのところへ旅行したことなどを、いづれも證據によりながら述べるのであつた。

「時計を賣り拂つて旅費の工面をしたあとで（しかし、彼の陳述によると、まだ千五百留の金は懐にあつたといふのです、大てい本當でせう）、町に残つてゐる愛人が、自分の留守にフォードルの許へ行くのではないかといふ、嫉妬心に苦しみ悶えながら、疲労し、飢ゑ、そのうへ冷笑されて町へ歸つて來て見ると、幸ひにも、女はどこへも行つてゐなかつたので、彼は女をその保護者たるサムソフのところへ連れてゆきました。（不思議なことには、彼はサムソフにたいして嫉妬心を抱いてゐなかつたのです、これはこの事件中もつとも注目すべき、心理學的に興味のある點です。）それから彼は裏庭の隠れ場所へ引返して、そこで、スメルヂャコフが癲癇の發作にかかつてゐることと、もう一人の召使が病氣で寝てゐることを聞いたのでした、——周圍には誰もゐないし、彼はそこで『合圖』を知つてゐたのです、——何といふ誘惑でせう！ しかもなほ、彼はそれを抑制してゐました、そしてその足でホフラ

コワ夫人のところへ出かけました。夫人といふのは一時、この町に住んでゐて、われわれの間でも非常に敬愛されてゐた婦人でした。夫人は以前から被告の身の上を同情の眼で見てゐたものですから、さつそく彼に最も抜け目のない忠告を試みました。遊蕩三昧をやめて、醜い戀愛事件を棄て、だらしのない酒場めぐりと、青春と活力の浪費を避けて、シベリヤの金鑛へ赴くやうにと忠告したのでした。『そこには、あなたのやむにやまれぬ力と、ロマンチックな性格のはけ口がある筈です。』と夫人は忠告したのでした。」

この話の結果と、被告が、グルーシエンカがサムソフのところから姿を消したことを聞いて、きつと自分に裏切りして、親父のところへ今頃は行つてゐるに違ひないと考へた瞬間、不運な男は、急に狂氣のやうになつて、云ふことを述べた後で、イッポリットは、機會といふものの恐るべき作用に言及して、演説を結んだ。「もしもそのとき女中が、その戀人が元の男と一しよに、モークロエへ行つたことを、彼に告げさへしたならば、恐らく何事も起こらなかつた筈です。ところが、女中は面喰らつてゐたものだから、ただ知らないと言ひ張るより外なかつたのです。また、被告が女中をその場で殺さなかつたのは、ただ自分を裏切つた女の方へ氣が飛んで行つてゐたからです。しかし、ここで注意ねがひたいことは、彼が狂氣のごとくなつてゐたにも拘はらず、その場にあつた青銅の杵を取り上げたことです。何のためでせう？ なぜ外の兇器に手をかけなかつたのでせう？ しかし、それは、何分にも一ヶ月も前からその計畫を熟考して、準備にかかつてゐたことでしたから、自分の眼に觸れたものはいかなる物をも兇器のつもりで取り上げた筈だからです。一ヶ月も前から彼は、この種の物件なれば、きつと

兇器として間に合ふと思つてゐたのです。で、彼は即座に、躊躇するところなしに、その物件が自分の目的に役立つに違ひないと認めたのです。して見ると、彼は、決して無意識に、何気なしに、あの運命的な杵を取上げたとは思はれないのです。やがて彼は、父親の庭へ姿を現はしました、——周圍に誰一人もゐない、一人も見えてゐる者はない、ただ暗黒と嫉妬とである。女はここへ來て居る、彼と一しよに居る、自分の戀敵と二人で居る、その腕に抱かれて居る、恐らく、今ごろはおれを笑つてゐるだらう、——かうした疑惑は、彼の息もつもらせるほどでした。しかも、それは單なる嫉妬ではなかつたのです。欺かれたことが、火を見るよりも明らかだつたのです。女は必らずやそこに來て居るのだ、あの明りの點つた部屋のカーテンのかけに居るに違ひないのです。それに、此の不幸な男は窓に忍びよつて、注意深く中を覗き込んでから、怖ろしいことが起るのを怖れて、そのまま引きさがつたと、われわれは信じられませうか。のみならず、彼は自分の性格と、その瞬間に於ける自分の精神状態とを、われわれに諒解せしめようと力めてゐるやうに見えるではありませんか。おまけに彼は合圖を知つてゐたから、その合圖によつて直ぐ家の中へ入ることが出來た筈ではありませんか。」

この點まで來ると、イッポリットは、スメルヂャコフと犯人との奇々怪々たる關係を綿密にしらべるために、話を一先づ打ち切つた。彼は、附けたりにそれを究明しようとしたのであつた。しかし、人々は彼がその嫌疑を輕視してゐると自白してゐながらも、その實は、この問題を重大視してゐるのに相違ないのだといふことを覺つた。

VIII

スメルヂャコフ論

「先づ第一に、この嫌疑はいかなる理由によつて現はれたのでありませうか？」と、イッポリットはかういふ質問から始めた。「下手人はスメルヂャコフである」と叫んだ最初の人は、被告自身であつて、それは拘引される瞬間のことでした。しかし、その時から今のこの公判の時まで、彼はスメルヂャコフの犯罪を立證するほどの事實を一つとして擧げることが出來ないでゐるばかりか、事實に對する臆ろげな暗示をさへ擧げ得ないのでした。ところが、この犯罪を主張する人は、ただ三人だけでした。すなはち被告の弟二人と、スエトロワ夫人とであります。上の方の弟は、やつと今日になつて、自分の疑ひを述べたのでありますが、そのとき彼は確かに昂奮と狂氣の發作に苦しんで居りました。しかし、前に、つまり、この二ヶ月間といふものは、われわれの知つてゐる通り、兄の犯罪と信じ切つてゐて、その考へを變更しようとしませんでした。いや、このことは後まはしにいたしませう。下の方の弟は、スメルヂャコフの有罪を認める何らの事實をも持つてゐなかつたので、ただ被告の口から聞いたことと、被告の『顔つき』とから、さうした結論に到達したのであります。ましてや、この驚ろくべき一片の證明は、

さきほど二度までも彼の口から述べられたのであります。スエトロワ夫人の方は、なほ一そう驚くべき證言をいたしました。『被告のいつたことを信じて下さい、あの人は嘘をつくやうな人ではありません』と申しました。三人の口から出たスメルチャコフに對する證據といふのは、これで全部ですが、いづれも被告の運命に深い同情を寄せて居ることは明らかです。しかも、スメルチャコフに對する嫌疑は、随分やかましく噂されても居りましたし、今なほ噂に上つて居りますが、しかし、これは信すべきものでありませうか？ 想像し得ることでありませうか？』

ここで、検事、イッポリットは、『昂奮と狂氣の發作によつて自らの生命を斷つた』スメルチャコフの性格を簡単に説明する必要があると考へた。彼は、スメルチャコフのことを、低能で、一寸した初步の教育さへも受けてゐないといひ、自己の智能以上の哲學思想に惑はされ、普く一般にひろがつてゐる奇怪な現代的責任觀念、さては義務觀念によつて脅かされたのであつて、これを實際的に、鼓吹したのは、今は亡き主人のフォードル・パーヴロキッチ——主人といふよりは寧ろ、彼は父親かも知れない、——の放埒な生活であり、理論の上では、主人の息子のイワンであつて、彼とはさまざま不可解な哲學的な會話を交換したことがあると説明した。事實、イワンはいつも、恐らく退屈しのぎのためか、または心の中に鬱積してゐる皮肉のやり場がなかつたためか、とにかく、好んでスメルチャコフにそんな話をしたのである。

「彼は最近數日間の、主人の家での精神状態を自ら私に語りました。」と、イッポリットは説明した。「そのほか、彼をよく知つてゐる人たち、例へば被告も、被告の弟も、召使のグリゴリイさへも、そのこ

とは説明してゐることです、のみならず、スメルチャコフは、癲癇の發作によつて、體を悪くしたために、『牝鶏のやうに意氣地なしになつて』ゐたのです。『あいつは私の足元へ身を投げて、足に接吻しました。』と被告がわれわれに言ひましたが、その時はまだ、さうした陳述がどれほど自分に不利であるかを自覺してゐなかつたのです。『あいつは癲癇やみの牝鶏です。』と彼は例の獨特な言葉でスメルチャコフのことを評してゐます。ところが、被告は、彼を自分の相談相手に選んで（このことは被告自身が認めてゐます）、彼を脅迫して自分のために探偵となり間者となることを承諾してゐるではありませんか。その役目のために、彼は主人に背き、紙幣入りの封筒のありかを被告に密告し、家に入ることのできる合圖を、被告に内通してゐるではありませんか。實際、彼は密告せずにはゐられなかつたのです。『あの人は、私を殺しさうです、どう見ても私を殺しさうです。』と彼は審問の時にいつて、その自分を苦しめた人が拘引されてゐる以上、今さら自分が害を受ける氣づかひがないと知りつつも、ぶるぶるとわれわれの前で身慄ひしてゐました。『あの方は、どんな時でも私を疑つてゐました。私は恐ろしさにぶるぶる慄へながら、あの方の氣を落ちつかせるために、急に凡てのことを打明けたのです。そしてらきつと、あの方は私の眞實を分かってくれて、私の生命を助けてくれるに違ひないと思つたのです。』これはみな彼自身のいつたことなのです。私はそれを筆記しておいたから、今でも覚えてゐるのです。『であの方からどなられると、すぐさま、その前に跪ぎました。』彼は生れつき非常に正直者で、この前、主人のおとした金を拾つて持つて行つた時から、主人の篤い信用を博してゐました。してみると、の哀れな男が、恩人の如く敬愛してゐる主人に背いたために、いかばかり悔恨の痛みを感じてゐたか

は想像に難くありません。最も博識なる心理學者の意見によると、ひどい癲癇の發作に襲はれる人は、概して絶えず病的な自責に陥る傾向があるさうです。彼らは自分の『悪行』に苦しみ、時としては、何らの理由なくして良心の苛責に苦しんで居ります。彼等は誇大妄想狂に陥つた如くに、往々にして色々の罪惡や犯罪を自分で工風してゐます。さうして、われわれは今ここに、さうした型の人間を一人見ます。彼も亦恐怖と脅威のために、惡事をなすやうになつたのです。

「のみならず、彼は、自分の眼の前に展開してゐる局面から、何か恐ろしいことが惹起するに違ひないといふ確固たる豫感をもつてゐました。兇變の一寸前に、イワンがモスクワへ出發した時、彼に向つてスメルヂャコフは、出發を見合はしてくるやうに懇願しました。然しその實彼は余り臆病だつたから、自分の胸に抱いてゐる恐怖を公然と言ふことが出来なかつたのです。彼は只暗示を與へるだけに止めました。けれどその暗示が相手に通じなかつたのです。しかし、ここで述べておかなければならぬのは、彼はイワンを保護者のやうに思つて、その人さへ家に居れば、何らの危害が起こらないだらうと信じ切つてゐたのです。ドミトリーの酔つ拂つた時かいた手紙の中に、『イワンが行つてしまひさへすれば、早速親父を殺してやる、』といふ文句があつたのを憶えておるのでせう。してみるとイワンの居ることが、家の中の平和と秩序の保證であると皆が思つてゐたらしいのです。

「ところで、イワンが行つてしまひました。やがて、若主人が出發して一時間たつか経たないうちにスメルヂャコフが癲癇の發作を起こしたので、これは全く自然なことです。ここでまた、言つておきたいのは、スメルヂャコフが恐怖と一種の絶望とに襲はれて、殊にこの數日といふもの、苦しい癲癇の

發作にかかりさうな氣がしてゐたのです。何しろ、この前にもよく氣持が緊張して、動搖してゐるときには必らず起こつてゐたからです。醫師も同じやうなことを言明してゐます。で、イワン・フォードロキツチの姿が中庭へ消えてしまふや否や、スメルヂャコフは自分の孤獨と、保護者を失つた境遇とを嘆きつつ、穴審へ入つて行つたのです。彼は階段を下りながら、若しも發作が起こりはしないかどうか、若し直ぐにでも起こつたらどうなるだらうと氣が氣でなかつたのです。ところが、この不安と、この懸念とが、彼の咽喉に痙攣をもたらししました。それはいつも發作の前に来ることになつてゐるんですが、そのまま、彼は穴審の中に倒れてしまつたのです。しかし、この最も自然な出來事をもつて、往々にして、人は想像を逞しうして、彼が殊更らに發作の眞似をしたのだと仄めかすかも知れないのです。けれどもそれが、わざとしたものだとすれば、直ぐその次に、その動機は何か？ といふ疑問が出て來る筈です。彼は何が故にさうしたか？ 何を當てにしたのか？ 私は醫學上のことはいひませんが、また科學は方向を誤ることがあります。一體、醫者といふものは、眞の病氣と假病とを識別し得るものではないのです。それは或は故意に發作の眞似をしたのかも知れない、しかしそれならば、どうした動機で、彼はそんな假病を使つたかと反問したいのです。若し彼が殺人を目論んでゐたものとするれば、その前に發作を起こすことは、自分から進んで一家の注意を喚び起こすことになりはしないでせうか？

「陪審官諸君、諸君も御存じのやうに、兇行の當夜フォードルの家に居つた者は五人あるのです、當のフォードルですが、彼は自殺しなかつた筈ではありませんか、それは明白なことです。第二には召使のグリゴリイですが、危うく彼も殺されるところだつたのです。第三に、グリゴリイの妻で女中のマル

フアに至つては、この女が主人を殺したと想像するのは、何のことはない、恥づべきことです。あとの二人は、被告とスメルチャコフとです。ところで、自分が殺したのではないといふ被告の申し立てを信ずるとすれば、結局スメルチャコフが犯人になるわけです、なぜならその他には誰もゐないし、嫌疑をかける人が一人もないわけやありませんか。かうした事情から、あの昨日死んだ不幸な白痴に對して、巧妙な驚くべき嫌疑がかかるやうになつたのです。もしその他に、誰か第六人目の人があつて、その人に嫌疑の影が宿つてゐるとすれば、恐らく被告は、スメルチャコフに罪を被せることを恥ぢて、この第六人目の人に罪を被せたに違ひありません、なぜならスメルチャコフに殺人の罪を被せることは、全く不合理だからです。

「諸君、われわれは心理の問題はよしませう。醫學のこともよしませう、論理的なことをさへよしませう。われわれは單に事實そのものに注意し、その事實がわれわれに何を物語るかを見ることにしませう。若しもスメルチャコフが彼を殺したとすれば、どういふ風に殺したのか？ 一人でなのか、それとも被告と共謀の上のことか？ 先づわれわれは第一の場合ですね、つまり彼が一人で殺した曉のことを考へてみませう。さて、若しも彼が殺したものだとする、それにはきつと何かの目あて、何か自分の爲にしようとする目あてがなければならぬ筈です。ところが、彼は、被告が懐いてゐたやうな憎しみとか、嫉妬とか、その他の、殺人の動機となるものをいささかも持つてゐなかつたので、當然金を目あてに人殺しをやつてのけたとよりは、考へられなくなります。主人が封筒に入れて持つてゐた三千留といふ金に眼がくれて、それを奪はうとしたことになる譯です。ところが、彼は或る他の人に向かつて、——その他の人といふのは、この問題に密接な關係のある當の被告のことですが、——金のことや合圖のことを、何もかも打ち明けて居るのです。封筒はどこにしまつてあるのか、それには何と書いてあるのか、何で縛つてあるのかを打ち明けて、わけても旦那の家へ入る時の合圖のことまで打ち明けてゐるのです。まあ、これは單に自分を陥れるために、こんなことをしたのでせうか？ それとも中へ入りこんで、あの封筒を手に入れようとする競争者を見つけ出さうとしてせうか？ 『さうだ、しかし彼は恐怖のあまりそれを打ち明けたのではないか』といふ人があるかも知れない。しかし、一體、それはどうなのでせう？ さうした大膽不敵な、残酷な仕業を思ひついて、やがてそれを實行し得るやうな人間が、世界中に自分を除いて、この世に誰一人として知る者もないほどの事實を打ち明けるといふことが有り得るものでせうか、しかも自分の口から言ひ出しさへしなければ、誰も想像し得ないやうな事實をです！ いや、たとひ彼が臆病であるにしても、さうした犯罪を思ひ立つたからには、封筒のことや合圖のことは、どんなことがあつても他人に打ち明けない筈です。なぜならそれは、自らを陥れるのと同じだからです。若しも、無理に打ち明けさせられた場合は、何か外のことを捏ね上げるか、嘘を言ふかして、眞實のことだけは言はない筈です。これに反して、若し彼が金のことを口外せず、黙つて殺人を敢行して金を奪ひ去つたとしたら、恐らく誰も、彼が泥棒をするために殺人を犯したといつて彼を咎めさせようとはしないでせう。何故なら、誰もその金を見たものはないし、それが家の中にあることを知つてゐる者もなかつたからです。だから、若し殺人を犯したところで、それはきつと何か外の動機があつたものと思はれるに相違ありません。しかしこれまでに、そんな動機が彼にあつたとは誰も認めてゐ

て、——その他の人といふのは、この問題に密接な關係のある當の被告のことですが、——金のことや合圖のことを、何もかも打ち明けて居るのです。封筒はどこにしまつてあるのか、それには何と書いてあるのか、何で縛つてあるのかを打ち明けて、わけても旦那の家へ入る時の合圖のことまで打ち明けてゐるのです。まあ、これは單に自分を陥れるために、こんなことをしたのでせうか？ それとも中へ入りこんで、あの封筒を手に入れようとする競争者を見つけ出さうとしてせうか？ 『さうだ、しかし彼は恐怖のあまりそれを打ち明けたのではないか』といふ人があるかも知れない。しかし、一體、それはどうなのでせう？ さうした大膽不敵な、残酷な仕業を思ひついて、やがてそれを實行し得るやうな人間が、世界中に自分を除いて、この世に誰一人として知る者もないほどの事實を打ち明けるといふことが有り得るものでせうか、しかも自分の口から言ひ出しさへしなければ、誰も想像し得ないやうな事實をです！ いや、たとひ彼が臆病であるにしても、さうした犯罪を思ひ立つたからには、封筒のことや合圖のことは、どんなことがあつても他人に打ち明けない筈です。なぜならそれは、自らを陥れるのと同じだからです。若しも、無理に打ち明けさせられた場合は、何か外のことを捏ね上げるか、嘘を言ふかして、眞實のことだけは言はない筈です。これに反して、若し彼が金のことを口外せず、黙つて殺人を敢行して金を奪ひ去つたとしたら、恐らく誰も、彼が泥棒をするために殺人を犯したといつて彼を咎めさせようとはしないでせう。何故なら、誰もその金を見たものはないし、それが家の中にあることを知つてゐる者もなかつたからです。だから、若し殺人を犯したところで、それはきつと何か外の動機があつたものと思はれるに相違ありません。しかしこれまでに、そんな動機が彼にあつたとは誰も認めてゐ

ませんでした、寧ろその反對に、主人からは愛され、正直なことで信用されてゐたのを人々はよく知つてゐたから、言ふまでもなく嫌疑がかかるにしても彼は最後でなければならぬ筈です。先づ第一に、人々は、さうした動機を持つてゐるさうな人、さうした動機を持つてゐることを宣言した人、それを公然と言ひふらした人に嫌疑をかけるべきです。つまり殺された人の息子ドミトリー・フォードロキツチを疑はねばならないことになるのです。たとひ、殺人を犯して金を奪つたのがスメルチャコフであつても、第一息子がその罪を被せられるべきです、その方が無論スメルチャコフにとつてはふさはしいのです、それでもわれわれは、彼が殺人を謀つて、金のことや、封筒のことや、合圖のことを、息子のドミトリーに打ち明けたと信じなければならぬでせうか？ それは理窟に合つてゐるでせうか？ それに相違ないでせうか？

「スメルチャコフの企らんだ殺人の日が来た時、彼は伴りの發作で階下に倒れてしまひましたが、——それは何のためでせう？ 先づ第一に、グリゴリーが自分の治療をするつもりだつたのを止して、誰も家の番をするものがなかつたため、自分が門番として居残つたこと、第二には、主人が、自分の番をするものが誰もなくなつたため、息子のやつて來ることに恐れをなして、一層自分を警戒し用心してゐたことになります。そこで、最も重要なことは、發作のために身の自由を失つた彼スメルチャコフは、いつも他の者と離れて寝る臺所（無論平生から此所へ自由に出入してゐた）から、離れの端の方にあるグリゴリーの部屋へ移されたことである。いつも彼は衝立で仕切りをしてグリゴリー夫婦の寢床から三歩ばかりのところへ寝かせられてゐたのです。これは癲癇の發作が起つた時、主人と、親切なマルファ

との考へで、いつからともなく、さうされることになつてゐたのです。で、その衝立の蔭に横になつてゐるとすれば、絶へず伴りの發作を續けるために、唸りつづけて、そのために夜通し他の者の眠る邪魔をしてゐた筈です。（これはグリゴリー夫婦も證明してゐます。）かうした事實を綜合して見ると、彼は突然床から起き出て、その主人を殺したと信ずることは、果して當を得てゐるでせうか！

「然し、かう言ふ人があるかも知れない、即ち彼が故意に贗病を使つたのは、自分が嫌疑を免れるためであつて、金のことと合圖のことを被告に打明けたのは、被告を唆かして殺人罪を犯かせ、そして殺した上で金を持つてその場を立去る時、その物音で人々は眼を覺してしまふ、そこでスメルチャコフは起き上つて、其の場へ出かけて行つたのだ、と。では、何の爲に其處へ出掛けて行つたのでせう？ 二度も主人を殺して、既に盗まれてしまつた金を持出すつもりだつたのでせうか？ 諸君、諸君はお笑ひになるでせう、私ともかうした想像を逞しくするのを恥辱に思ひます。しかし、諸君は信じないかも知れないが、これは被告の陳述をそのまま言つてゐるのです。彼が家を出て行つたあとで、スメルチャコフは、グリゴリーを擲り倒して悲鳴をあげさせ、その隙に乗じて、家へ飛び込んで主人を殺し、金を盗んだのだと被告は言つて居ります！ スメルチャコフが前以てこんな事まで考へ及ぼしてゐるわけはないといふやうなことは、そこで穿鑿するのを止ませう、又彼が、あの瘳猛な、憤怒に燃えた息子が何氣なしにやつて來て、例の合圖を知つてゐながら、恐る恐る窓を覗き込み、そのまま獲物をスメルチャコフの爲に残して立去つたといふやうなことも論議したくありません。陪審官諸君、私は眞面目にお訊ね致したい、一體スメルチャコフが殺人を敢行したのは、いつのこととせう？ その時間を示して

下さい、でなければ、諸君は彼に罪を被せることは不可能です。

「ところで、癲癇の発作は、どうも眞實らしいのです、病人は叫び聲を聞きなり急に我に歸つて飛び出しました。ぢや——それからどうなつたでせう？　彼は周囲を見廻して、『何故主人を殺しに行かないか？』と獨言しました。しかしその瞬間まで彼は、無意識の状態で、床についてゐたのですから、そこに起こつたことを知るわけがないぢやありませんか？　しかし、空想を逞しうするにも限度といふものがあります。

『全くさうだ、しかし若し彼等が共謀してゐたとしたら？　二人で殺して金を分配したとしたら——その時はどうなるでせう』と、惻口な人々はいふかも知れません。實際それは重大な疑問です！　そしてそれを證據だてる事實も充分あります。一人は殺す方の役目を引受けて大騒ぎをしてゐるのに、一方の共犯者は、癲癇の眞似をして寝てゐる、これは明らかに皆の者に疑惑を起こさせ、主人にもグリゴリイにも警戒の眼を見張らしめることになるではありませんか。二人の共謀者が、如何なる動機からそのやうな狂氣じみた計畫をしたかを調べることは、確かに興味あることでなければなりません。

「しかし恐らくこれは、スメルチャコフの方から主謀したことでなく、反動的に納得させられたまでのことです。多分スメルチャコフは威嚇されて、殺人を反対しないといふ同意を與へたに違ひありません。そして、救ひを求めず反抗もしないで、主人を殺させたといふ非難を受けることを豫め知りつつ、ドミトリイが兇行を演じてゐる間、偽りの発作を起こして、その場を逃れさせて貰つたのかも知れません——『御勝手にお殺しなさるが宜しい。わたしのかまつた事ぢやありません』と言つて。けれ

ども、スメルチャコフが発作を起したら、家の中が大混雜を呈するのは解りきつてゐるから、ドミトリイは決してそんな計畫に同意する筈がありません。しかし私はその點を主張するのを控へませう。假りに、彼が同意したとしても、矢張りドミトリイは兇行者で教唆者であることにちがひはなく、スメルチャコフは單に受身の共犯者で、共犯者といふよりも單に恐怖の爲に自分の意志に反して納得したまでのことです。

「としたら、われわれはどう考へたらよいものでせうか？　被告はあるとき拘引されるや否や、凡ての責任をスメルチャコフにきせました、共犯者としての罪のみならず、殺人の罪まで被せて居るのです。『彼奴は一人でやつたのです、彼奴が殺したのです、彼奴が金を取つたのです。彼奴の一人の仕事です。』といつてゐるのです。早速お互に罪の被せ合ひをするなんて、不思議な共犯者もあつたものです！　カラマゾフの冒険にも程があります！　殺人を敢行したあとで、共犯者が寝てゐるのを見ておきながら、彼はその病人に罪を塗りつけるのです。スメルチャコフは大いに憤慨して、自己防衛上から、眞實のことを告白したのは無理のないことです。おそらく彼は、裁判所が早速自分の犯罪の程度を見届けたものと思つたに違ひありません、そして、無論罰を受けるにしても眞の犯人より遙かに軽い罰だらうと思つた筈です。然し彼は、その場合に、一切のことを告白したかといふに、それはしませんでした。被告は、どこまでも彼に罪のあることを主張して、彼は一人で犯罪を犯したのだといつて居ります。が當のスメルチャコフは共謀の事實をさへ、少しも承認しようとしませんのです。

「そればかりでなく、スメルチャコフは、審問の時、紙幣の封筒のことや、合圖のことを被告に教へた

のは自分だと言つたり、自分といふ人間が無かつたら、被告はそんなことを少しも知らなかつたらうな
どと、臆面なく陳述しました。若し假りに、彼が共謀者であつたとすれば、審問の際かうしたことを陳
述する法がありませうか？ 寧ろ反對に、それを隠蔽したり、事實を曲げたり、小さく言つたりすべき
筈です。ところが、彼は少しも事實を捏造したり、小さく言つたりしませんでした。共謀者と認められ
る惧れのない無辜の人でない以上は、彼のやうな態度に出ることは到底出来ません。そして自分の病氣
と兇變とのために苦しい發作を起こして、彼は昨日首を縊つて死んでしまひました。彼の遺書には獨特
の口調で、『私は他人に罪を塗りつけないために、自分の意志と嗜好とに依つて自殺します、』と書いて
あります。『私は殺しました、カラマゾフではありません、』と附け加へたところで、彼にとつては同じ
ことなのに、さうは附け加へて居りません。良心の苛責のために自殺しながら、自分の罪を告白するこ
とが出来なかつたのでせうか？

「さてその次にどうでせう？ 三千留の紙幣は先刻法廷へ持込まれました。證人の陳述に依ると、そ
れは今そのテーブルの上にあつた封筒入りと同一のもので、昨日スメルヂャコフから受取つたものだ
さうです。然し今私は、あの悲惨な光景を想ひ起こして述べる必要を認めませんが、只一二の極く瑣
細な、誰が見ても極くつまらない、恐らくは見落しさうな點についての論評を加へたいと思ひます。先
づ第一に、スメルヂャコフはその金を返へして、良心の苛責の爲に昨日自殺したのです。自分の罪をイ
ワンに告白したのは、ほんの昨日のことだと後者は陳述してゐますが、若しそれが眞實だとすれば、ど
う考へてもイワンが、それを今日まで口外しないで居るわけはありません。若しイワンに向かつて罪を

告白したものとすれば、何故彼は最後の遺書の中へ眞實のことを全部書き加へておかなかつたかと、私
は再び尋ねたい、何故なら、その翌日無辜の被告が、恐ろしい拷問に面接しなければならぬといふこ
とを彼は知つてゐたに違ひないからです。

「その金だけでは、何等の立證にはなりません。一週間程以前、ふとしたことから、私自身と今二人
この裁判所の者が、かういふ事實を知つたのです。それはイワンが、五分利附きの五千留券二枚——す
なはち合計一萬——を縣廳所在地へ送つて兩替へさした事實があるのです。私がこんなことを指摘した
からといつて、何も誰が金を持つて悪むといふ意味ではないのです、又その紙幣がフョードルの封筒
にあつたのと同じものだといふ證據にもなりません。

「イワン・カラマゾフは、昨日そんな重要な消息を眞の犯人から聞いてゐながら、少しも周章た色
を見せませんでした。何故彼は直ちにそのことを報告しなかつたのでせう？ 何故翌朝まで少しも口外
しなかつたのでせう？ 私には略々その理由が想像出来ます。彼は一週間前から、健康を損ねてゐ
て、醫師や親友などに向かつて、自分が妄想に悩まされて、死んだ人の亡靈を見たと話してゐたさうで
す。彼が今日腦膜炎で倒れたる徴候が、その時からちやんと見えてゐたのです。さうした場合に、彼は
突然スメルヂャコフの自殺した事を聞いて、『彼奴がたうとう死んでしまつた。彼奴に罪を被せて兄を助
けてやらう。自分は金を持つてゐる、此の紙幣束を一つ出して、スメルヂャコフが死ぬ時に此れを自分
に渡したのだと言つてやればいいのだ』と、急に思ひ付いたのです。恐らく諸君は、そんな不名譽な事
があるものかとおつしやるでせう、兄を救ふ爲とはいへ、死者に罪を被せるのは恥づべきだとおつしや

るでせう、御尤もです。しかも假りに、無意識に死者を誹謗したものとすればどうでせう？ 若しまた、下男の死んだことを突然聞いて、すつかり気が顛倒してしまつて、實際さうに違ひないと思ひ込んだものとすればどうでせう？ 諸君は先刻の光景を御覽になつたでせう、あの證人の様子を御覽になつたでせう？

彼は立つて陳述してをりましたが、心は何處にあつたでせう？

「次に、此の書類です、兇行の二日前に被告の書いた手紙です。これは實に立派な殺人の豫定書です。今更われわれに、他の豫定書を探し廻る必要は少しもありません。殺人は、此のプログラムの通りに着實行されたのです、その手紙の筆者によつてなされたのです。左様、陪審官諸君、それは何等の故障なしに進行したのです！ 彼は、自分の情婦が家の中に父親と一緒にゐると確信したけれども、その窓の所から恐る恐る臆病さうに逃げ出したりしませんでした。否、此れは實に馬鹿げた、眞赤な嘘です！ 早速躍り込んで殺したのです。憎い戀敵を見るなり、かつとなつて、憤怒の餘り彼を殺したものと思はれます。然し、青銅の杵で一撃の下に彼を殺して、充分その邊を探して、結局女のゐないことを確かめることが出来たが、それでもまだ枕の下へ手を入れて、金の入つた封筒を取出すことを忘れなかつたのです。その上包の破れが、現在此處にテーブルの上に置かれてあるわけです。」

「私は今、恐らく諸君が非常に特殊な場合だと認めるやうな事實を述べませう。で、若し彼が老巧な殺人犯人であるとか、只金を取るために殺人を犯したといふのなら、破けた封筒をあんな風に、死骸の直ぐ傍の床の上に散らかしておく筈がないぢやありませんか。又かりにスメルヂャコフだつたとすれ

ば、只その封筒のまま持逃げしてしまふはずです。何故なら、彼はその封筒の中に紙幣が入つてゐることを確かに知つてゐたし——實際それは彼の居る前で封筒に納められて、封印されたのであつた——又それを持つて逃げたところで、誰も永久にそれを盗んだことを知る筈がなかつたからです。諸君、敢て私は諸君にお訊きするが、果してスメルヂャコフは、そのやうな手段を取つたのでせうか？ 封筒を床の上に散らかして行つたりしたのでせうか？

「否、これは氣の狂つた殺人者の行爲です、泥棒でもなし、又これまでに一度も泥棒を働いたことのない殺人者の行爲です、枕の下の紙幣を取り上げたところで、それは泥棒が盗むのとちがつて、何だか泥棒に盗まれた自分の金を、その泥棒から取り返へすやうな風だつたのです。何故といふのに、これは、あの金に就いて、ドミトリーの頭に狂氣の如くに襲つて來た思想だつたのです。で、彼は今までに一度も見つたことのない此の封筒に跳びつきさま、その中に金が入つてゐるかどうかを確かめるために引裂いたのです、そして床の上に棄てた破れ封筒が自分に對する有力な證據物件の一つになる事も忘れて、その金をポケットに入れて逃走したのです。凡てそれはカラマゾフの行爲です、スメルヂャコフではありません、彼はそんなことを考へたことも、想像したこともないのです。どうしてそんなことがあり得るでせう？ 彼は逃走しました。その時背後で召使ひの叫び聲を聞きました。老人は彼を捕へて放しませんでしたから、青銅の杵で、その場に打ち倒されたのです。」

「被告はその時哀れみを催して來て、跳び下りてその顔を覗き込みました。彼の陳述に依ると、その憐愍と同情とに動かされて、何か手當の施しやうがないものかと思つて跳び下りたのださうです。諸君

は是れを信じますか？ 決してさうぢやないのです。彼が飛び下りたのは、ただ此の犯罪の唯一の證人の生死を確かめるためだつたのです。その他の感情も動機も不自然たるを免れないのです。ここで注意せねばならないのは、彼の面倒をも顧みずグリゴリーの顔をハンカチで拭いても、もう死んだものと思ひ込み、夢中になつて、血にまみれたまま情婦の家へ駆けたのです。此の場合、何故彼は、血にまみれてゐることも氣がつかず、又それが早速發覺することも考へなかつたのでせうか？ 然し、被告の陳述では、その時自分が血まみれになつて居ることに氣がつかなかつたさうです。或は、さうかも知れませんが、充分にあり得ることです、さうした犯罪の瞬間に於て、よくみることです。或る點で惡魔的な奸智をしめしながら、他の點では全くそれ等を閑却してゐるものです。ところで、その瞬間に彼の考へでおこつたことが只一つあつたのです——女が何處に居るだらう？ といふことだけを考へてゐたのです。女の居る所を早く知りたくなつて、その足で彼女の所へ駆けつけたのです、ところが——女が最初の戀人に會ひにモークホエへ出立した——といふ思ひがけない驚くべき報道を耳にしたのです。

IX

全速力で心理解剖。 駛り行くトロイカ。 檢事論告の結末。

檢事イッポリットは論告をここまで進めると明らかに、嚴密な歴史的敘述法を採つた。それはあらゆる神經過敏な辯論家に好まれる方法であつて、彼らはそれに依つて自分の奔放な情火を抑制するため、殊更らに嚴格に作られた枠を求めるのである。彼はブルーシエンカの『まぎれもない元の戀人』に言及して、この問題について、二三、獨特な興味ある思想を述べた。

「これまで男といふ男に狂氣のごとき嫉妬を感じてゐたカラマゾフが、この『まぎれもない元の戀人』にぶつかると、急に意氣沮喪して、すっかり活氣がなくなつてしまつたのではありませんか。更に不思議なのは、彼はこの思ひがけない戀敵によつてもたらされる新しい危険を、前には殆んど氣にかけてゐなかつたことです。いつも彼はその危険を、遠き將來のことのやうに思つてゐたのであります。何しろ、カラマゾフはつねに現在に生きてゐる男だからです。恐らく彼はその男を架空の人物のやうに思つてゐたのかも知れないのです。しかし、彼の傷ついた心は、女がこの新しい競争者を隠して自分を裏切つてゐるのだといふことをすぐに悟りました。なぜならその男は彼女にとつては決して架空の人物ではなくして、むしろ彼女の生活の唯一の希望だつたからです。彼はこのことを悟るや否や、自分の方で諦らめてしまつたのです。」といひ、更にいふのであつた、「陪審官諸君、私は被告の性格におけるこの意外な特性について一言なきを得ないのであります。彼は突然思ひ出したやうに、正義に對する抑へ難い願望と、女性に對する尊敬と、愛に對する女性の権利の承認を表はします。しかもそれが皆、彼女が女の爲に父親の血で手を汚したあの瞬間だつたのです！ 彼の流した血は復讐の叫びであつたことは確かです、何故なら彼はこの世における靈魂と生命とを亡ぼした後、直ぐ自分自身にむかつて、彼女にとつ

て自分が何物であつたらうか、現在は何物であり得るか、自分は自分の靈魂よりも愛してゐる女ではないかと自問しないではゐられなかつたのです、そして一度裏切つた女の許へ、新しい愛と誠實な言葉と、生活の改造と幸福とを携へて、罪を悔いて歸つて来たところの、以前の戀人と自分とを比較せずにはゐられなかつたのです。で、不幸な男である彼は、今彼女にむかつて何物を與へ何物を提供することが出来ませう？

「カラマゾフはこれ等のことをすべて感じました。彼はあらゆる自分の行路がこの犯罪のために閉ざれたことを知つたのです、自分が罪の宣告を受ける人間であつて、最早自分の前には生活のない人間であることを覺つたのです！ この考へは彼を押し潰しました。そこで彼は、早速狂氣染みた計略に突進したのですが、それはカラマゾフ的な性格の人々には、恐ろしい境遇からのがれるための唯一の道として現はれるものなのです。その逃げ道は自殺です。彼は友人のペルホーチンの所へ入質してある拳銃を取りに駆付けましたが、その途中で、駆けながら、ポケットから金を取出したのです。それが態々父親の血で手を汚して取つた金だつたのです。おお、その時の彼は、是れ迄よりは更に金が必要だつたのです。カラマゾフは死ぬ所でした、今少しで自殺する所だつたのです、それは人々の記憶に新たなこととせうと思ひます！ まことや彼は詩人であつた、彼は自己の全生命を兩端から消費したのでした。『女の許へ、女の許へ！ おお、そこへ行つて自分は大量宴を催さう、そんなことは曾て無かつた、それは屹度永く人々の記憶に残つて語り傳へられるであらう！ 粗野な歡樂のさけびと、大膽なデブシイの歌と踊りとに取圍まれた中で、自分はコップを捧げて、自分の敬愛する女とその新しい幸福とのために

飲まう！ そして、次に自分はその場で、彼女の足元で、さうだ、彼女の前に頭を投げ出して自分を處罰しよう！ したら彼女は時々ミーチャ・カラマゾフを想ひ出して、ミーチャに愛されてゐたことを覺り、ミーチャのために同情するだらう！』

「ここにわれわれは、カラマゾフ家の飽く無き愛の結末と、ロマンティックな絶望と感傷癖とを見ます、だがそこには何だか別の或物があるのです。陪審官諸君、何かしら靈魂の中でさげんでゐるもの、心の中で絶えず戦慄して居るもの、死ぬ程も彼の胸を苦しめて居る或る物があるのです——その或物とは良心です、陪審官諸君、その審判です、その恐ろしい苛責です！ 拳銃がすべてを解決するでせう、拳銃は唯一の逃げ道です！ 然しその彼方には——私はその瞬間にカラマゾフが、『その彼方に何があるか』と空想したかどうかとも知らないし、カラマゾフがハムレットの様に『その彼方に何があるか』を空想することが出来たか否かも知らない。しかし、陪審官諸君、彼らの國には幾多のハムレットがあつても、われわれはただカラマゾフを有するばかりです！」

ここでイッポリットは、ミーチャの手配りを微細な點まで描出して、ペルホーチンの家での光景や、店で馭者と一緒にあつた時の有様を述べた。彼は又證人等の陳述した證明から、多くの言葉と行爲とを用いたので、その光景は一般傍聽人に對しておさるべき印象を與へることになつた。事實が全部明るみへ出された時、この苦しい、絶望に瀕してゐる男の罪過が公然たるものとしてあらはれた。

「今更彼が豫防手段を講じた所で何の役に立ちませう？ 二度か三度彼は、自白しようとしてそれを暗示しましたが、結局あれだけしか言ひ出せなかつたのです。（かう言つて彼は、證人らの證言を引用

した。彼は、自分をのせて走つてゐる駈者に向かつて、『お前は人殺しをのせてゐるんだが、承知だらうね!』と叫んだ事さへあるのです。しかしすつかり言つてしまふ事は出来なかつたのです。彼はなるべく早くモークロエへついて、そこで自分の事件を完結させねばならなかつたのです。しかし何がこの不幸な青年を待ち受けてゐたでせう? 彼がモークロエへついてすぐ知つた事は、自分の克己難いと思つてゐる戀敵は案外強敵ではなかりさうなものと、彼らの新しい幸福のために催さうとした祝宴が餘り悦ばれず、又期待されてゐなかつたことでした。しかし、陪審官諸君、かうした事實はすでに陪審の時から良く御承知のはずです。カラマゾフはその戀敵を完全に征服することが出来たのです、そして彼の靈魂は全く新生面に展開して行つたのです。それはおそろく最もおそろべき局面であつて、その中を彼の靈魂が潛つて來、又今後も潛るだらうと思はれます。

「しかし私はかう斷言して憚らないと思ひます、陪審官諸君、と検事は續けた。「あの慘虐な天性と犯罪的な心とは如何なる地上的な審判よりも完全に彼に復讐を實行したわけだ、と。のみならず、地上的な審判と刑罰とは、たしかに自然の刑罰を輕減するのみならず、實際さうした場合の犯罪者にとつては、是非なくてはならない絶望の救ひなのです。彼が彼女から愛されてゐることを知り、そのために彼女は最初の戀人を棄てたことを知り、しかも彼女が彼れミーチャに對して新生活をすすめ、幸福を約束してゐることを知つたその時の、カラマゾフの恐怖と精神的苦悶とが如何ばかりであるか、私には想像することも出来ません——しかもその時は?——すべてが終りを告げて、すでにもう手の施しやうも無くなつてゐた時なのです!」

「USで私は、一つの重要な點をここでのべようと思ふ。それは當時の被告の立場に對して一道の光明を齎らすものなのです。この婦人、つまり彼の戀人といふものは、最後の瞬間に至るまで、つまり拘引されるその瞬間まで、彼にとつては到底得られない、熱烈に欲して居りながら得ることの出来ない存在だつたのです。所で、何故彼はその時自殺しなかつたのでせう、何故そのとき自分の計畫を放棄して拳銃のある所なんかも忘れて了つたりしたのでせうか? それは熱烈な愛の要求と、それを満足させようとする希望とが彼を強制したためなのです。饗宴の席で、初めから終りまで彼は、自分の崇拜する女の傍に付き切りでゐたが、その席で彼女の姿は今までよりも遙かにチャーミングであり魅力がありました——彼はその傍を離れようともせず、自分を卑下して始終畏懼してゐたのです。

「彼の情熱は稍暫しの間、拘引の恐ろしさのみならず良心の苛責をさへ壓服してゐました。然しそれはほんの一瞬間でした、ほんの刹那だけでした。私は犯人の精神状態を略々想像することが出来ますが、彼の心は色々な力によつて無慘にも虐げられてゐたのです——第一は酒と、音響と感激、踊の音と唄の甲高い聲、それから酒で眞赤になつて、自分を見て唄つたり、踊つたり笑つたりしてゐる彼女のためでした! 第二には、最後の運命がまだ遠いところにある、少くとも、翌る朝までは拘引されるやうなことはあるまい、と言ふ暗黙の希望があつたためです。して見ると、まだ四五時間はある、それだけあれば充分だ、充分だ! —と思つたのです。人間といふものは、僅かの時間の中に随分多くのことを考へることの出来る者です。恐らく彼は、罪人が絞首臺へ連れて行かれる時に感じる様なことを感じたに違ひないと私は思ひます。彼らは長い長い街を通つて、何千と言ふ人々の間を行かねばならないので

す。それから又別な街へ曲つて行かねばならないのです。しかもその街の向ふの端には恐ろしい刑場が待ち受けてゐるのです！ 思ふにこの死刑囚は、その旅の初めに當つて、見窄らしい囚人馬車の中で、自分の前途にはまだ無限の生命がある様に感ずるはずに違ひありません。家々は次第に遠ざかり、馬車は前方へ進んで行く——ああ、それはなんでもない、次の街へ曲るまではまだまだ遠い、彼は尙ほ大膽に眼を左右に向ける、そして冷酷な視線を自分にそいでゐる幾千の群集を見らう、然も尙ほ彼は、自分もこの群集と同じ人間だといふ氣持を棄てないでゐる。しかし遂々次の街への曲り角まで来る。おお、それは何でもない、何でもないので、彼の前には立派な街がつづいてゐる。多くの家並は背後へ過ぎた、それでも彼は、まだこの先き澤山の家が残つてゐると思つてゐる。かうして最後の地點まで行くのです、絞首臺そのものの所まで行くのです。

「その時のカラマゾフは、おそろくかうしたことを考へたと私は思ひます。『まだその時間が到來しないのだ、』彼は考へたに違ひありません。『まだ逃げ道を捜す餘裕はあるだらう、おおさうだ、まだ言ひ抜ける方法が充分講じられる、それにしても、今、今——彼女はあんなに美しいではないか！』と。

「彼の頭の中は混乱と恐怖とにみちてゐたのですが、態々その金の半額を取りのけてどこかへ隠したのです、さうでなければ、彼が父親の枕の下から取つて來たばかりの三千留の半分の行方が説明出來なくなるぢやありませんか。彼は今迄モークロエへ行つたのは一度きりではなかつたのです、二日も續けて大散財をやつたこともあるので、廊下や離れの部屋が幾つもある古い大きな家のことによく知り抜いてゐるのです。察するところあの金の半分はその家へ隠したらしいのです、拘引の少し前頃、どこかの

間隙か、床の下か、どこか隅つこの邊か、屋根裏かへ隠したらしいのです。何の目的で？ と諸君はお訊きになるでせう。それは斯うです、そのとき無論、大騒動の近くもち上ることが分つてゐたのです！ しかしまだ彼はどう言ふ風にそれに面接していいかも考へてなかつたし、又考へる時間もなかつたのです、頭の中は混亂して、心は女の方へ飛んで行つてゐたのです。然し金は——金は兎も角も必要だつたのです！ 金さへ持つて居れば、人間は常に人間です。おそろく諸君は、こんな瞬間にその様な慮りをするのは不自然だと考へになるでせう？ 然し彼は自分で證明してゐるのです——一ヶ月以前、あの危急と興奮との瞬間に、金を半分だけ取り出して、それを小さい袋の中に縫ひ込んだと云つてゐるのです。たとひそれが實際でないとしても、それはカラマゾフにとつては、あまり珍しい考へでもないのです、彼がさう考へたと云ふことはすぐ證明がつくのですから。のみならず豫審のとき彼は、千五百留を袋の中に入れたと主張したのは、（實際ありもしない）小さい袋をその瞬間の思ひ附きで空想したに過ぎないのです。何しろ彼は二時間前にその金を分けて、翌る朝までその半분을、自分が持つてゐさへしなければいいといふので、萬一の用意にモークロエへ隠して行かねばならなかつたのです。陪審官諸公、全く兩極端です、カラマゾフは兩極端を、しかも同時に考へることが出来るのです。

「われわれはその家の中を搜索しましたが、遂々金は發見出來ませんでした。恐らくまだその場にゐるか、翌日どこかへ消え失せたか、又今頃は被告の手の中にあるかも知れないのです。それは兎も角として、彼は彼女の直ぐ傍に、彼女の前に跪びてゐたのです、彼女はそのとき寢臺の上に寢轉んでゐましたが、彼はその方へ腕を伸してゐたものですから、全く何も彼も忘れて了つて、拘引に來た人の足音

も耳に入らなかつた位でした。彼はまだ辯解の言葉を少しも考へ付いてゐませんでした。彼は不意に捕まつて、運命を掌握してゐる裁判官の眼の先へ突立ちました。

「陪審官諸君、われわれが本務を遂行するに當つて、一人の人間に面接することを恐れたり、その人間のために身慄ひさへする様なことが屢々あるではありませんか？ それは動物的な恐怖を感じた場合よくあることです。囚人が自分の最後を自覺してゐながら、尙も藻掻いたり、藻掻かうと思つたりする時とか、又は自己保存の本能が急に彼の中に起つて、物問ひたげな苦しさを眼を上げて諸君を研究したり、諸君の顔や諸君の思想を考察したりして、諸君が何れの側を注意するか知らんと氣に掛けながら、その瞬間に幾千とも知れぬ計畫が、碎かれた胸の中で一時に閃めくけれども、矢張りそれを口に出すことを恐れ、話すことを恐れてゐると云つた様な、こんな瞬間に良くあることです！ 此の靈の淨罪、此の動物的な自己保存の願ひ、これらの人間の靈の虐げられてゐる瞬間と云ふものは、實に恐るべきものであつて、時としては法律家でさへも囚人に對して恐怖と同情とを抱かせられることがあるのです。而もわれわれは、あの時に、これらのことをすべて目撃したのです。

「最初彼は電氣に打たれた様に驚いて、恐怖のあまり自分を裏切るやうな言葉を洩しました。『血だ！ 俺はその罪を負ふのが當然だ！』など、口走りしましたが、直ぐ自分を制しました。彼はまだ自分の言ふべきことを用意してゐなかつたのです、どんな答辯をすべきかも組立ててゐなかつたのです。ただ『親父の死んだことに何らの罪がありません。』と否定するだけの用意があつただけでした。それが彼にとつては唯一の垣だつたのです、彼はその後方に一種の防柵を設けようと思つてゐたのです、最初の危険

な叫びのすぐあとから彼は、召使のグリゴリーの死んだことにだけは自分に罪があるといふことを表白しました。『あの血を流したのは私の罪です、然し私の父を殺したのは誰です、皆さん、誰が父を殺したのですか？ 私で無いとすれば、誰が一體殺したのでせうか？』どうです諸君、われわれの方から訊かうと思つてゐたことを反對に向ふから訊くのですもの！ 『私で無いとすれば』なんて云ふのは早計に失してゐるぢやありませんか——動物の狡猾さです、さうしたことはカラマジフの正直な所です、性急な特質です！ 『私が殺したのではありません、私が殺したとは思はないで下さい、私は殺したいと思つてゐただけです。皆さん、私は殺したいと思つただけです。』と彼は大急ぎで陳述しました、『然し私には罪はありません、殺したのは私ではありません。』彼はわれわれに對して、自分が殺したいと思つてゐたと告白してゐますが、これで見ると何だか彼は、自分が此の通り正直な男だから、自分が殺したので無いといふことを信じて呉れるに違ひないと言ふ意味らしいです。おお、こんな場合には、囚人は往々恐ろしく狭量になつて、人に瞞され易くなるものです。

「そこで一人の法律家は、急に思ひ付いたかのやうに、最も簡単な質問を彼に發しました。『ぢや彼を殺したのは、スメルチャコフではなかつたか？』と。すると案の定彼は、われわれが彼を嫌疑者として唐突に拘引したと云ふので非常に怒り出しましたが、もつともその時はまだ方法も考へてゐなかつたし、スメルチャコフの名前を引張り出すのに最も自然な機會にも達してゐなかつたのです。で彼はいつもの通り直ぐ、他の極端へ突進して、今度は、スメルチャコフが人殺しをする筈がないとか、逆も人殺しなんか出来る男ぢやないとか主張し出したのでした。しかしそれは信じてはなりません、ただそれは

彼の奸計です。彼はスメルチャコフといふ考へを本當に捨てたのではなかつたのです。むしろ反對にそれを今一度前へ押出さうと思つたのです。何故なら實際彼は、スメルチャコフの外に誰も前へ押出す者が無かつたからです、今この計畫を實行することが自分の不利だから、後に實行しようと思つたのです。おそらく彼は、翌日か、で無くとも三四日経つてから彼の名を持出して、『どうです、私はあなた方より以上にスメルチャコフを疑つてゐたのです。あなた方も憶つておいでのことと思ひますが、今になつてやつと私は自信が出來ました。父を殺したのは彼奴です。彼奴の仕事に相違ありません！』と呼ぶ機會の來るのを待つてゐたのです。それで現在では陰鬱な苛立たしい否定に陥つてゐるのです。しかし憤怒と悲りとに元氣づけられて、彼はひそかに父親の家の窓を覗き込んだことや、そつとその場を立去つたといふ様なことに就いて、實に辻褃の合はない、不合理な陳述をしました。折悪しく彼は、グリゴリーの陳述したいろいろの事情を少しも知らなかつたのです。

「われわれは彼の身體を探索しましたが、その探索が彼を怒らせました。しかし元氣づけたのは言ふまでもありません。ところが彼の身體には三千留と云ふ金が見付からずに、ただその半分だけあつたのです。そして無論この憤怒の沈黙の際、初めて彼は袋なるものを思ひ付いたのです。言ふまでもなく彼はその話が不確かであることを自覺してゐたのです。そしてそれを一層實感味ある小説に作り上げるために、もつと有りさうな話にしようとなつて努力しました。かうした場合に於て、取調べに従事してゐる裁判官の、第一の本務、第一の仕事は、罪人に何らの準備をさせないことと、咄嗟に問を發することです。さうすれば屹度彼は、率直と不合理と矛盾とに充ちた考へを吐くに違ひありません。犯人はただ、

咄嗟の、或る新事實の思ひがけぬ消息や、事件の中の重要な部分や、これまでに思ひも寄らなかつた又豫想することの出來なかつたことを、自然に言ひ出るやうになるのです。われわれはさうした事實は前からちやんと握つてゐたのです——扉が開いてゐて、被告がそこから逃げて行つたといふ事が、グリゴリーによつて立證されてゐるのです。被告はその扉のことは全然忘れてゐて、グリゴリーがその扉を見ただらうかといふ懸念さへ抱きませんでした。

「實際その効果は驚くべきものです。彼は飛び上るなりわれわれに斯う喚きました、『ではスメルチャコフが殺したのです、スメルチャコフだつたのです！』かう言つて彼は、用意してあつた辯護の武器を發射したのです、そしてそれを出來得る限り眞實らしい形式で表現しました。何故ならスメルチャコフが兇行を犯したのは、彼がグリゴリーを擲り倒して逃走したすぐ後のことだつたからです。そこで吾々は彼に向かつてグリゴリーが扉が開いてゐるのを見たのは、まだ倒れない前のことで、また彼が寢室から出て來る時、衝立の後ろでスメルチャコフの聲がしてゐたと云つてゐたのを話すと、——カラマゾフはすつかりその面の皮を剝がれて了ひました。私の尊敬してゐる聰明なニコライと云ふ同僚が、そのとき被告の顔を見てゐる中に、自然と涙ぐんで來たと、其後私に語りました。そして被告は事實を證明するために、あの評判の小さい袋のことを、大急ぎでわれわれに説明しましたが——それは假りにさうとして、先づ私の語らうとする小説を聞いて下さい！

「陪審官諸君、私は先に、此の小説を單に荒唐無稽と考へるばかりでなく、やがて暴露されるやうな、最もあり得べからざる空想の所産であると諸君に話しました。もしそれよりも荒唐無稽な物語を賭で考

案しようとしても、到底それ以上にありさうもない話を見出すことは出来ずまい。さうした物語の第一の缺陷は、得意然たる稗史小説家を混亂に引入れて、その微細な事件で困らして了ふ點にあるのです。しかもその中には實に人生が豊富に藏されてゐるにも拘らず、不幸な無自覺な作家らが、とるに足らない些事なりとして閑却してゐるのです。おお、彼らはさうした些事にまで注意をむける餘裕がないのです。彼等の心は偉大な空想の上に全體としての想像の上に集中されてゐるために、誰一人としてその些事をとり上げるものがないのです！ しかしかれらの捕へられるのは其れなのです。被告は訊かれる、『貴方は、その小さい袋の材料をどこから手に入れましたか、又誰に作つて貰ひましたか？』『私が拵へたのです。』『ぢやどこからこの亞麻を手に入れたのです？』其處で被告は非常に腹を立てて了ふ。彼はさうした訊問を受けるのが恥辱であると考へたのである、實際彼はよく怒るやうに生まれついてゐるのです！ 彼等は皆さう云ふ風です。『わたし自身の襦袢から引裂いたのです。』『では今からその襦袢衣を見せて頂きませう、引裂いたあとのあるのを。』そこで陪審官諸君、若しわれわれが眞に其の破れた襦袢衣を見出したのだつたら（それが事實だつたら當然抽出の箱の中かトランクのなかにある筈です）それが愈々事實なのです。彼の陳述を有利にする資料になる筈です！ しかし彼はそれを想ひ出すことが出来ないのです。『私は忘れてしまひました、もしかすると襦袢衣から取つたのではなくて、おかみさんの帽子から縫上げたのかも知れません。』『どんな帽子ですか？』『おかみさんの、古い木綿の布片が其邊に轉がつてゐたのかも知れません。』『では確かにその事實は貴方の記憶にあるのですね？』『いいえはつきりしません。』かう言つて恐ろしく腹を立ててしまふんです。一體記憶してゐない法がありません。

うか！ 人間といふものは、一生のうち一番恐ろしい瞬間——例へば處刑場へ連れ出されるやうな場合には、往々にしてかうした微細な事を思ひ出すものです。彼は何もかも忘れてしまつて、ただ途中で自分を掠めて過ぎた緑色の屋根とか、十字架にとまつてゐる小鳥とかを記憶にとどめてゐるでせう。彼はその小さい袋を、家人に秘密に拵へたのです。そして誰かが入つて来て、自分が針を持つて居る所を見付けられるかも知れないと思つて恐ろしさに苦しんだことを憶えてゐなければならぬのです。一寸した物音にも直ぐ衝立の蔭へ身を潜めたことを回想しなければならぬ筈です。（彼の部屋には衝立があつたのです。）

「ところで、陪審官諸君、私は何のためにこんなことを話して居るのでせう、こんな些細な、詰らない事實ばかりを？」不意にイッポリット・キリローギッチは叫んだ。ほかでもありません、それは被告が今尙ほあの無實な事柄を主張して居るからです。彼は、あの二ヶ月まへの運命的な夜以來、何事も説明しないのです。これまでの空想的な陳述に對して、何一つ明瞭な事實を附加へようとしません。尤もそんなことはとるに足らないことです。『皆さんは私の名譽にかけて、それを信じなければならぬ。』と彼は言ひます、おお、われわれは喜んで信じます、心から其れを信じます、立派な彼の言葉のみを以ても、信じます！ われわれは人間の血に渴えた豺でせうか？ 一つでもいいから被告の利益になるやうな事實を提供して下さい、そしたら私は悦ぶのです。しかしそれは實在の確固たる事實でなければなりません、被告の弟が、其の表情から察した結論とか、被告が暗闇のなかで胸を叩いたのは、袋を暗示したのだと云ふやうなことは何の益にもたたないのです、新事實さへあれば満足です。われわれ

は先んじてわれわれの主張を却下します、早速却下します。が、今は正義の聲は高く聞こえます。われわれは主張を曲げたくはありません、何物をも却下したくはありません。」

イッポリット・キリローギッチは愈々論告の結尾に入つて行つた。彼は何だか熱病にかかつたやうであつた。しかし、あの復讐のための血のことを話した。あの卑しい盗みの動機によつて、その息子が流した人殺しの血の話をして、彼は事實の、悲劇的な明白な部分を指摘した。

「たとひ諸君が、敏腕にして有名なる辯護士の口から如何なることを聞かうとも、」イッポリット・キリローギッチはなほも附加へずにはゐられなかつた。「如何なる雄辯で以て諸君の感情に訴へ、諸君の感情を動かさうとも、今や諸君が正義の殿堂に居られる事を決して忘れてはなりません。諸君はわれわれが正義の擁護者であり、聖なる露西亞と、其の法典と、其の家族との擁護者であり、又凡ゆる聖なるものの擁護者であることを記憶せられよ！ 然り、諸君は今ここで露西亞を代表してゐるのです、諸君の判決はこの堂内のみならず、普ねく露西亞中に反響するであらう、そして全露西亞は、彼女の擁護者として、又彼女の審判者として、諸君の言葉に傾聴し、諸君の審判によつて勇気づけられもし、又落膽もするでせう。願はくは露西亞と其の期待とを裏切らざらんことを！ わが運命のトロイカは脇目も振らずに駛走してゐますが、恐らくそれは破滅に向ひつつあるのです、そして遠い昔から全露西亞の人は哀訴するやうな腕をさしのべて、其の狂氣の如く暴進する進路に向かつて停止を叫んでゐるのではありませんか。もしも他の國民がこのトロイカに道を譲るとすれば、それは決して尊敬からではなくて往々詩人が喜んで信ずる如く單に恐怖心からです。恐怖心からか、もしくは憎悪の念からです。彼等は

道を譲るのはいい、然しいつかは道を譲らなくなつて、この駛走する幻影のまへに堅固な障壁を作る時がくるかも知れないのです、彼ら自身の保全と、開化と、文明とのために、我が不羈奔放に狂氣の如き突進を阻止する時がくるかも知れないのです。既にわれわれは西歐に當つて警鐘の響を聞きました、今やそれが鳴り渡り始めたのです。願はくは彼らを唆かさざらんことを！ 願はくばまた、息子の實父殺しを是認するやうな判決を下して彼等の憎悪を彌が上にも高上せしめざらんことを！」

イッポリット・キリローギッチは極度に感激してゐたけれども、この美辭的な咏嘆で以つて論告を緊張せしめた、——しかも其の効果は特筆すべきものであつた。彼が論告を終ると、慌しく法廷から出て行つて、私が先に述べたやうに、次の部屋で昏倒しさうになつたからである。法廷には誰一人拍手するものも無かつたが、眞面目な人々は満足の色を表はしてゐた。婦人達は餘り満足してゐるやうに見えるなかつたけれども、彼の雄辯に對しては敬意を表してゐた。ただ彼女らは裁判の判決に就いては餘り満足もしなかつたが、次にでるフェチュニコギッチに全部の信頼を掛けてゐた。「愈々あの人が出て辯護しなへすれば、無論勝利を博するだらう。」

人々はミーチャを見た。彼は検事の論告の間、ちつと齒を喰ひしばつて、両手をしかと握り乍ら、黙つて俯向き加減に坐つてゐた。唯ほんの時々頭を擡げて傾聴することがあるぐらゐであつた。とくにグルーシエンカの話される時にさうであつた。彼女に關するラキーチンの意見を検事が引用した時輕蔑と怒りの微笑が顔に漂つた、そして彼は人に聞こえるぐらゐの聲で「ベルナルめが！」とつぶやいた。また、イッポリットが、モークロエで彼を訊問して苦めたことを述べた時、ミーチャは頭をもたげて

非常な好奇心をもつて傾聴してゐた。論告のある點にふれた時彼は今にも跳び上つて叫びださうに見えたが、強ひて自分をおさへ、ただ輕蔑的に肩を聳やかしたただけであつた。あとで人々は、論告の結末のことや、モークロエで検事が被告を訊問した手腕などを噂しあつて、イッポリットを冷笑してゐた。

「あの人は自分の聰明さを自慢せずにはゐられないのだ。」と彼等は話し合つた。

休憩が宣せられた、しかしそれは十五分か、精々二十分の極く僅かな間であつた。傍聴席では會話や叫びが騒がしく起こつた。私は其の中でいくらか憶えてゐるのがある。

「重みのある論告だ、」とある一團のなかの紳士は勿體振つた口調でいつた。

「餘り心理學に入り過ぎたやうだ、」とほかの聲が答へた。

「然し全くあの通りだ、絶對の心理だ！」

「さうさ、ああしたことにかけては兎に角第一流だ。」

「あの人は、すつかりの合計をしたのです。」

「さうです、われわれをも合計して了ひました、」と他の聲が合槌をうつた、「論告の初めに、吾々も全くフォードル・パーヴロキッチと同じだと、あの人がいつたのを御存じでせう。」

「終りにも言つたぢやありませんか、しかしあれは皆謔語ですよ。」

「餘り漠然すぎますからね。」

「少し有頂天になりすぎた嫌ひがありますね。」

「あれは不公平です、不公平です。」

「然し、兎も角立派な手際だ。ながいこと待つてゐたんだ、やつといひたいことをいつたのだ、はッ、はッ！」

「被告の辯護士はどんなことをいふでせうな？」

又他の一團から、かうした會話が聞こえた。

「あんな風では、とてもペテルブルグの人を壓服する力がありませんよ。『諸君の感情に訴へて』とかいつたのをおぼえてるでせう？」

「左様、あれはあの人の弱點なのです。」

「あまりあせり過ぎたんです。」

「しかし神経家ですからな。」

「吾々は面白可笑しく話してゐるが、今頃被告はどんな氣持がしてゐるでせうね？」

「實際、ミーチャの氣持はどんなでせう？」

第三の群れでは、――

「あの肥つた方の女はなんといふんです、長い柄の屈鏡をもつて、端の方に腰かけてゐるのは？」

「將軍の奥さんです、離婚した女なんです、私はよく知つてゐますよ。」

「柄のついた眼鏡を持つてゐるのはそのためなんですね。」

「あまり感心出来ませんね。」

「いえどうしまして、ほんとに氣障なちつぽけな女なんです。」

「その二尺程むかふがはに小さな綺麗な女がゐるぢやありませんか、あの女の方が美人ですね」

「突然モークロエでうまくとらへたといふんですね、さうでせう、ね？」

「え、全く手際よく捕つたのです。検事は其の話を、人々の家で幾度話したか知れないさうですからね！」

「今でも吹聴せずにはゐられないのです。あれは自惚れといふものです。」

「あの人は不平家ですから、ひつ、ひつ！」

「さうです、何しろ怒りつぽい方ですから。のみならずあまり修辭が多くて、言葉も冗漫でしたよ。」

「さうです、われわれをおどかさずばかり考へてゐるんです。始終おどかさうとしてゐるんです。」

あのトロイカのことをおぼえてゐるでせう？ それにまあどうです、『外國にはハムレットがあるが、

我國にはカラマゾフがあるばかりだ！』などと。ほんとにうまいつたものですよ」

「自由主義者と妥協するためなんです。あの人は自由主義者をおそれてゐますからね。」

「さうです、のみならず辯護士をおそれてゐるのです。」

「全くです、しかしフェチュコーキッチはどんなことをいふでせう！」

「どんなことをいふにしても、百姓達をだますやうなことは決してないでせう。」

「貴方はさう思ひませんか？」

第四の群で――

「トロイカのこととはなかなか立派に喋りました。他の國民のことをいつたところなども。」

「他の國民がとても我慢してゐないといつたのなどは眞理です。」

「とおつしやると？」

「いや、先週のことですが、英吉利の議會で一人の議員がたち上つて無政府主義の問題を論じました、此の野蠻國民を教化せんとせば、今が絶好の干渉の機會ではないかと訊問したさうですが、イッポリットはその議員のことを考へてゐるんですよ、それにちがひないのです。先週も彼はそのことを口外してゐましたからね。」

「然し容易な仕事ぢやありませんよ。」

「容易な仕事ぢやないとおつしやるんですか？ どうしてですか？」

「だつて吾々はクロンスタットを閉塞して、彼らに穀物を供給しなくなると、どこから彼らはそれが得られるんです？」

「亞米利加からです、今でも亞米利加から供給されてゐるぢやありませんか？」

「馬鹿な！」

しかし呼鈴が鳴つたので、一同は自分の席へ駆付けた。フェチュコーキッチは演壇に現はれた。

辯護士の辯論

雄辯家の最初の言葉が響き互ると、あたりはしんと静まり返つた。傍聴人の視線は一せいに彼の上に引きつけられた。彼は自信のある口調で、非常に素直に論じ始めたが、いささかも慢心してゐるところがなかつた。彼は雄辯を揮はうとか、感傷的な言葉や主情的な句を弄ばうとはせず、さながら親密な同情深い友人の間で話してゐるかのやうに見えた。その聲は美しく、響きがあつて、そのうへ同情がこもつてゐた。聲そのものの中に、非常に純粹な、率直な或るものが含まれてゐた。しかし人々は、この辯舌家が、急に感傷的な本質を發揮して『ただならぬ力で心を刺す』やうになるかも知れないといふことはり決して長い文句を使つたりせず、實際すつと正確だつた。しかしただ一つ婦人たちを不快がらせた點があつた。それは彼が始終前屈みになつてゐることであつた。殊に辯論の初め頃などは正確にお辭儀してゐるといふ程でもないが、今にも聴衆の方へ駆出しさうな身構へで、長い背骨を中ほどから二つに折つてゐた。そして何だかその中程に蝶番でもあつて直角になるまで屈むことが出来るもののやうであつた。

つた。

彼は辯論の初め頃はむしろ聯絡もなく秩序もなしに色々の事實をきれぎれに取扱つてゐたやうであつたが、終り頃になるとそれらの事實が纏つたものになつてゐた。彼の辯論は二つの部分にわかつことが出来るやうである。前半は告發に對する批評的反駁から成立つてゐたが、時として意地悪い皮肉を混ぜてゐた。しかし後半になると急に彼は調子を一變した、そして、身のこなしをかへて急に主情的になつた。聴衆はそれを待ちこがれてゐたかのやうに、慄へながら昂奮してゐた。

彼は要點に突進した、そして自分がベテルブルグで幾度も舞臺を踏んでゐるが、むろん地方の町々へも被告の辯論に赴いたことは今が初めてでないこと、しかもそれらの被告はみな無罪であつたことを斷言するし、少くとも自分はさうした信念をもつてゐるんだといふやうなことから彼は口をきつた。『今回の事件も全くその通りです、』と彼は叫んだ。『新聞を見た抑々もの初めから、わたしは被告に有利なある力強いものにうたれました。なによりもわたしの好奇心を動かしたのは、往々法律の適用の上にある一つの事實だつたのです、しかし今回の事件ほど極端な、また特殊な形式は殆んどまだとわたしは思ひます。わたしは此の特殊性を辯護の終りに至つて明示するのが當然ですが、一番最初にそれをしようと思ひます。何故なら自分の技倆を秘したり、材料ををしんだりしないで、直接の行動に入るのがわたしの缺點だからです。わたしの立場からすればこれは無謀かも知れませんが、むしろそれだけ眞摯なのです。わたしはかういふ信念を抱いてゐます。すなはち被告に對する證言の鎖は山ほどあるが、個々について調べると批評するにたる事實が一つもないといふことなのです。わたしは新聞紙上で、今回の

事件に接近すればする程、この考へを確かにすることが出来ました、そしてわたしは、被告の近親者からの要求に接して、辯論に従事することになつたのです。わたしはこの地へ急行しました。この地へくると、わたしは全く確信を得てしまいました。この怖るべき事實の鎖を断ちきつて、個々の立證がいづれも證據不充分で空想的なものにすぎないことを立證するのが、この事件に對するわたしの仕事なのです。』

かういつてフェチュコーキッチは急に聲を高めた。

「陪審員諸君、わたしは當地へ初めてまゐりました。わたしは豫備觀念を少しももつてゐません。被告は散漫放佚な性格の人物です。彼はわたしを侮辱しませんでした。しかし彼はこの町の幾百の人々を侮辱したかも知れません、そのために多くの人々は以前から彼を偏頗な眼で見つてゐたと思ひます。無論わたしは、當地方の人々の道徳的情操が、彼に對して激昂してゐたのは正當だと思つてゐます。被告の感情は、實際不羈奔放です。しかし彼はこの地の社會で認容されてゐたんです。才能ある吾が友人たる検事の家庭にさへ好感をもつて迎へられてゐたのです。(Nota bene 《注意》この時、聴衆の中に二三の笑聲が起つた。すぐ制止されたけれども、皆の耳にはとまつた。われわれは皆、検事が本心をまげてまでミーチャを認容してゐたのは、單に彼の妻君がミーチャに對して一種の興味を持つてゐたためだといふことを知つてゐた——検事夫人と言ふのは非常に品性の高い道徳的な人であるが、氣が變り易くて、我儘で、特に瑣細なことで自分の良人に反對するのが好きしかつた、無論しかし、ミーチャはほんのまれにしか訪ねたことがなかつた。) かしながら、わたしをして斷言せしむるならば、」フェチュコー

キッチは續けた、「わたしの反對者は獨立した見解と正しい性格とをもつてゐるにもかかはらず、わが不運な被告に對して何か誤解してゐられるやうであります。おお、それは實に當然のことです、この不運な人が、さうした誤解をもつて見られるのは當然のことです。辱かしめられた徳義心、傷けられた趣味性といふものはしばしば冷酷なものです。われわれは今——才能ある検事の論告によつて、被告の性格と行爲の明確なる解剖を聴き、またこの事件に對する検事の批評的態度の峻烈なのを知りました。ことに彼が微細な心理解剖に入つてをりましたが、もしも被告に對して、極くわづかな意識と惡意ある先入主とをいだいてゐたならば、おそらくそこまでは入れなかつたに違ひないと思ひます。しかしそこには、かかる問題を取扱ふに當つて、最も惡意ある意識的な不公平な態度よりも更に悪い致命的なものが現はれてゐます。もしわれわれは藝術的衝動とか、創作的欲求とか、いはば小説とかに我れを忘れるやうなことがあると、それは更によくないことです。殊に神がわれわれに、心理的洞察力を賦與した場合、殊更さうです。わたしがまだ當地へ出發しない前、ペテルブルグで或る忠告を受けました、そしてわたし自身も、當地へ來たら才能ある反對者に面接するだらうと思つてゐたのです、而もその反對者の心理的洞察とその緻密さが、近年わが法曹界では著しき名聲をばくしてゐるといふことも知つてゐました。しかし幾ら心理學が深刻であつても、所詮兩刃の小刀のやうなものです。(傍聽席に笑聲起る。) むろん諸君はこの譬へを許してくださいませう。わたしは雄辯を誇ることが出来ないのです。しかしわたしは、検事の論告の中から一例を擧げてみませう。庭の暗闇の中へ逃走した被告が、扉に攀ぢのぼつた時、召使に捕まりました、そこで青銅の杵で擲り倒しました。それから又、庭へ飛び下りて、その男の

傍で五分間も費やして、召使の死を確かめようとしたのです。被告がそのとき憐愍の情から老いたるグリゴリーの傍へ駆けつけたと陳述してゐるのにもかかはらず、検事はその陳述をどうしても信じようとなさらないのです。『いや、そんな場合に、さうした感情がありうるものではない、それは不自然である。彼は自分の唯一の證人の生死を確かめるために駆けつけたのにすぎないのだ、これが彼が犯人である證據である、その他の理由で引返して行く筈がないではないか、』と検事が云つてをられます。まさしく、心理學にちがひありません。しかしわれわれは同一方法をとつて、それを他の方面よりこの問題に適用してみる時に、幾分かもつともなことを發見するでせう。殺人者が證據人の生死を疑つて、それを確かめるために飛び下りたといふことになつてゐますが、彼が死んだ父親の書齋へ、驚くべき證據物件、すなはち三千ルーブルの金が入つてゐるといふことを明記した封筒の破れたのを遺棄して行つたといふことが、検事自らの論告によつて明らかなる事實となつてゐるのです。『もしその封筒を持つたまま逃げさへすれば、世界中の話もての封筒のことやその中に紙幣の入つてゐたことを知るものがなく、いはんやその金を被告が盗んだといふことも分からずに済んだはずである、』これは検事自身の言葉ですが、一面から見るとそれは、被告が全注意力をかいでゐた證據になるのです、頭が混亂してしまつて、恐怖のあまり、手掛りとなるべきものを床の上に遺棄して逃亡したやうな者が、僅か二分間たつてから又他の者を一人殺したとすれば、そんな最も冷酷な豫想が果していただけるかどうか疑ひなきを得ないではありませんか、一步を譲つてこれに同意するとしても、それは單に微細な心理解剖にすぎないと、わたしは考へます。或る場合に於ては高架索の驚の如く慘忍炯眼になるが、また次ぎの瞬間には

土鼠の如く小心に盲目になるかも知れないのです。若しわたしを人を殺したとして、その時自分に對する唯一の證據人の生死を確かめるために引き返すほど慘忍冷酷な打算をもつてゐたとすれば、その場合でまた他の證人に見つかるやうな危険を冒して五分間もこの犠牲者をかへりみてゐる理由がどこにありませうか、何のためにハンカチを汚して、後日自分の不利な證據となるやうに、頭の血を拭ふでせう、若し彼がそれほど冷静であり、打算的であるならば、その同じ杵で召使の頭を思ふ存分叩きつけてゐる筈ぢやありませんか、そして一思ひに殺して、證人に關するすべての懸念から自分を救ひだした筈ぢやありませんか、尙ほまた彼はその證人が生きてゐるかどうかを見るために引返したけれども、往來の眞中へ外の證據を忘れて行つてゐます、つまり二人の女のところから取つて來た青銅の杵を置き去りにしてゐますが、後で彼らがそれを自分の物だとみとめさへすれば、結局、彼が彼らのところからとつてきたのだといふことが明瞭になる。ところでそれが何だか往來へ置かれたか、慌ててゐたか不注意かのために取り落としたかの觀があります、事實はさうではなくて、彼はその兇器を投棄したのであります、何故となれば、グリゴリーの倒れてゐる場所から十五歩も距つたところで發見されたぢやありませんか。しからば何故彼はそんな事をしたでありませうか、それはほかでもないのです、つまり彼は一人の人間を、年寄りの召使を殺したのが悲しくなつたからなのです。でその杵を、殺人の兇器として呪ひながら投棄したのです。さうにちがひないのです。でなければあんなに遠くへ投棄する理由がないぢやありませんか、だから若し彼が一人の男を殺したことを悲しんだり憐れんだりすることが出來たとすれば、それは結局彼が父の殺害について無罪であることを證據立てることになります。若し彼が犯人であると

すれば、もう一人の犠牲者を憐れんで飛び下りるはずがありません。むしろ別な感情をもつたはずですが、おそらく彼の考へは自分を救ふといふことに集中されたはずです。到底人を憐れんだりする餘裕が無かつたといふことは火をみるよりも明らかです。むしろ正反對に、犠牲者の番をして五分間も費すかはりに、その頭蓋骨を打ち砕いたはずです。同情とか憐愍とかの氣持をおこす餘地があつたとすれば、彼の良心がその時まで健全であつたからです。ここにわれわれは別の心理を見出すのです。陪審官諸君、わたしが故意にこの方法を採用したのは、それによつて如何なるものでも立證しうることを示す爲めだつたのです。しかもそれは利用する人の如何によつてどうにでもなるのです。心理學といふものは如何に眞摯な人をも全く知らず知らずのうちに小説的の方へみちびくものです。諸君、わたしのいつてゐるのは心理學の弊害についてです。」

檢事を無視した賛同と哄笑の聲が、再び法廷内に湧き起こつた。自分はこの辯論を詳細に繰り返すことをよして、ただ二三の條項、主要な點だけを抄録することにしよう。

XI

金はなかつた。強盜沙汰もなかつた。

辯護士の辯論において、一同を驚ろかせた一つの要點がある。彼はあの運命の三千留と云ふ金の存在を全然否定した、そして、ひいては強盜の事實もある筈がないと言ふのであつた。

「陪審官諸君、」彼は始めた、「おそらく初めての、何らの偏見を抱いてゐない觀察者は、今回の事件の特異な點、即ち強盜犯について、又そこに果して盜まれる様なものが存在したかについて、全く證據があがらないでゐることを驚ろくに違ひないのです。われわれは三千留の金が盜まれたことを聞いてゐるが、一體その金が實際あつたかどうかといふことは誰も知らないのです。考へて御覽なさい、如何にわれわれはその金の話を聞かされたとして、誰一人それを見た者がありませんか？ それを見た人、それが封筒に入つてゐたと陳述する者は、ただ一人下男のスメルチャコフあるのみです。彼は兇變の前に、その金のことを、被告と、被告の弟のイワンに話したことがあります。スエトロフ夫人もそのことを聞いた一人です。しかしこの三人の中で實際その紙幣を見たものは一人もないのです、スメルチャコフ以外には一人も見つた者がありません。ここで疑問が起こつて來ます。假りにその金の存在したのは事實だとして、スメルチャコフがそれを見たとなれば、最後に見たのは何時だつたのでせう？ もし主人がその紙幣を寢床の下から取り出して、彼に黙つてそれを金庫に戻したとすればどうでせう？ スメルチャコフの陳述によればその紙幣は蒲團の下に入れてあつたといふぢやありませんか、して見れば被告はそこから盜み出さなければならぬ筈ですが、寢床は全く皺一つ寄つてゐなかつたのです、このことは調書の中に叮嚀に記録されてをります。一體被告が寢床を亂さないでその紙幣を見出すことが出來たでせうか？ また、殊さら亞麻で拵へられた美しい、汚點一つ無い夜具を、血に染つた手で汚さ

ずに済んだでせうか？ しかし或はかう訊ねる人があるかも知れない。床の上の封筒はどうだ？ と。成る程わたしはその封筒について、一二語を費やす必要があるのです。わたしは先刻、卓絶した才能ある検事自身の言葉を耳にして、多少驚ろきなきを得なかつたのです——検事自らは、かう云ふ事實を認めてをられるのです——すなはちあの封筒さへなかつたら、床の上へそれが棄てられてなかつたら、世界中誰にもそんな封筒の存在したことを知るものもなければ、況んやその中に紙幣が入つてゐたことを知る者が無いのだ、だから、ひいては、被告がそれを盗んだことも知れる筈はなかつたのだと仰しやるのです。そこで検事の認定では、この紙片一つが被告の強盗罪を認める唯一の證據であつて、『それがなければ、盗みのことも金のことも誰にもわからなかつた』ことになるのです。けれどもその封筒が床に落ちてゐたといふやうな一小事實が、果してその中に金のあつたことや、その金が盗まれたといふことを證據だてるに足るでせうか？ だが一體、彼が最後にそれを見たのは何時だつたか？ わたしは敢てその點を訊ねたいのです。わたしがスメルチャコフと話しましたが、彼が兇變の二日前にその紙幣を見たとなつたに話しました。さうなると、あの老いたるフォードルが、家に錠をおろして、ヒステリーのやうになつて苛々した氣持で戀女を持つてゐた時、退屈凌ぎにその封筒を引き裂いて、紙幣を取出したのぢやなからうか、といふやうな想像もつくわけです。『封筒なんか何の役にも立たぬ、』と、彼は獨語したに違ひありません、『あれは金のあることを信じないだらう、しかも一束にした虹模様の紙幣を眼の前につきつけてやつたらきつと、口の中に水を湧かすだらう。』かう思ひながら封筒を裂いて金を取り出し、自分が所有者だからまさか證據に残る心配が無からうと思つて、その封筒を床の上に抛げ棄て

たのです。諸君どうです、これ以上確からしい理論、これ程確からしい事實が他にあるでせうか？ 何故是れが問題にならないでせうか？ 然しもしかうしたことがあつたとすれば、強盜罪の求刑は地に落ちてしまふでせう。金がないのに、どうして盗みが有り得るでせう。床の上に封筒の落ちてゐた事が、その中に金のあつた證據になるとすれば、わたしはそれを反駁してかう言ふ——封筒が床の上にあつたのは、その所有者が中から金を出してしまつたからだ、と。しかしここで、フォードルがそれを取り出したものとすれば、その金がどうなつたのか、警官が家宅搜索をした時見當らなかつたのではないか？ といふ人があるかも知れない。第一にその金の一部分が金庫の中に發見されてゐるし、第二に彼は、その朝か又は前晩にそれを取り出して、別な方へ使ひ、くれてやるか送つてやるかしたかも知れないのです。或は又、自分の考へや、行動の豫定を全然變更しておき乍ら、そのことを前以てスメルチャコフに話したりする必要を認めなかつたのかも知れないのです。もしかうした言明がいささかでも許されるならば、被告が強盜の目的で殺人を犯したとか、實際強盜をしたに違ひないなどと言つて責めなくともいい筈ぢやありませんか？ これが既に小説の範圍に侵入してゐるのです。もし何が盗まれたと言明する以上は、その品物を公表するか、少くともその存在がむろん立證されなければなりません。しかし誰一人その紙幣を目撃した者はないのです。最近ベテルブルグに起つた犯罪ですが、八百屋を商賣にしてゐる、十八歳のまだほんの子供のやうな若い男が、斧を携へて白晝公然と或る兩替店を襲ひ、驚くべき典型的な大膽さを以つて店主を慘殺して、千五百留といふ金を奪ひ去りました。五時間後その男は捕縛されましたが、只十五留使つてあるだけで残り完全には持つてゐました。のみならず兇行後店へ歸つ

て来た店員が、盗まれた正確な金額のみならず、その内譯が紙幣で何程、貨幣で何程といふことまで警察に申し出ましたが、その通りの紙幣と貨幣とが犯人の手許で発見されました。そこで殺人犯の男は、何もかも全部すららと自白しました。陪審員諸君！ わたしが證據と呼ぶのはかうしたことを言ふのです。その事件においてわたしは、その金を知り、その金にふれましたから、決してその金の存在を否認しようとは思ひません。今回の事件はこれを同一に論ずることが出来ませうか？ しかもそれは人間が生きるか死ぬかの問題ではありませんか？ さやう、ここで又わたしは反問されるかも知れない、被告はあの晩、大散財をして金を盡したにも拘らず、まだ千五百留を持つてゐたといふのぢやないか、その金はどこで手に入れたのだ？ と。けれどもただ千五百留だけ見つかつて、他の半額がどこにも見つからなかつたといふ事實は、結局それが例の金でなかつた證據になるのです、決して封筒に入つてゐた金ぢやないのです。確實な時間の推定によつても被告があつた女中たちのところからベルホーチンの家へ一直線に駈けつけて、自分の家へも立ち寄り、又どこへも寄り道しなかつたといふことが、豫審のとき立派に證明されてゐるのです。して見ると彼は始終人混みの中にゐたことになるからその三千留を半分に分けるとか、その半分の何處かの町へ隠匿するとかいふやうなことは到底できるものではないのです。かうした點から見れば、その金がモークロエのどこかの隙間へ匿されてゐるのに違ひないと主張されるのです、諸君、ではウドルフ城の天主閣に匿されてゐるといつても同じぢやありませんか？ この假定は、實際に於て、あまりに空想的であり、あまりに傳奇的ではないでせうか？ もしこの假定さへ打ち毀してしまひさへすれば、強盜の罪は全く風とともに消滅してしまふのです、何

故なら、あの場合、他の半分の千五百留がどうなつたか判明しないぢやありませんか？ 被告がどこへも立ち寄らなかつたことが明かになつたとすれば、一體どんな奇蹟でその金が姿を消したのでせうか？ それにわれわれは、さうした小説で人間の生命を滅ぼさうとしてゐるのです！ しかしかうした疑問を發する人があるかも知れない。彼はその千五百留をどこから手に入れたか言明し得なかつたのではないか？ のみならずその前夜、彼は一文も金を持つてゐなかつたといふことは周知の事實ではないか？ と。嗚呼、しからば誰が知つてゐるでせう？ 被告は金の出所について、明瞭な、確固たる陳述をしてゐるぢやありませんか、陪審官諸君、もし諸君がそれをお聴きになるならば、その陳述よりも確からしいものが、他にないことを諒解されるでせうし、又それが被告の氣質と精神とに最もよく一致してゐることを發見されるでせう。檢事は御自分の小説に酔つてをられるのです。許嫁の女からあれほど侮辱的に突き付けられた三千留の金を黙つて受取るやうな意思薄弱な男が、その半分の別にとつてそれを縫ひ込んでおくといふやうなことはあり得ない、たとひ縫ひ込んだとしても、一日おきにはそれをあけて百留づつ取り出しては、順次一ヶ月の間にはそれを使つてしまつた筈だとかう言はれました。しかしもしそのことが全く別な風に現はれて来たらどうでせう？ 諸君が、小説を作つてゐるのだつたらどうでせう？ 又それが全く別種の人間として現はれてゐたらどうでせう？ 正に諸君は全く別な人間を作り上げてしまつたのです！ 或は諸君の中にかう訊ねる人があるかも知れない、被告が兇行の一ヶ月前、許嫁から受けとつた三千留の金を全部一日に使つてしまつた證據人があるではないか、だからその金を半分に分けるといふやうなことはあり得ない、と。しからばその證據人といふのは誰ですか？ その人た

ちの立證の價値は既に法廷で決つてゐるではありませんか、のみならず、他人の持つてゐる麴麵は大きく見えるものです、しかもその證人たちの中で、現に金を算へた人が一人も無いぢやありませんか。ただ眼で見て判斷しただけのことです。マクシモフの如きは、被告が二萬留も握つてゐたと陳述してゐるぢやありませんか。陪審官諸君、心理學は所詮兩刃の武器だといふことがおわかりになつたでせう。希はくばわたしに別な刃を試めさせて下さい、そしてその結果を證明させて下さい。

「兇行の一ヶ月前に、被告はカテリーナ・イワーノヴナから三千留といふ金の郵送を託されました。しかしこれが、また問題です、果してそれが、先刻述べた如く、甚だしき侮辱と卑下の態度で託されたものでせうか？ 本件に關する若い婦人の最初の陳述は、それと異なつてゐたのであります。全然異なつてゐたのであります。二回目の陳述においてわれわれは初めて憎悪と復讐の聲を耳にしたのです、永いあひだ秘められてゐた憎悪の叫びを聞いたのに過ぎないのです。で證人が最初の立證に當つて誤つた陳述をしたといふ事實は、二度目の立證も亦同じく誤つた陳述に違ひないと斷定する權利をわれわれに與へることになるのです。檢事はこの物語に觸れようとも思はず、又敢て觸れたくない（これは檢事の言葉です）に違ひない。それならそれでいいでせう、わたしもまたそれに觸れずにおきますが、しかしながら若し精神の清廉高潔な、例へばこの尊敬すべき令嬢の如き婦人にして、若しも急に被告を滅ぼさうとする明らかな動機から、法廷に於て自分の最初の陳述を變更しようとするところから推せば、その陳述が公平に冷靜になされたものでないことは火を見るよりも明らかであると斷言して憚りません。怨恨を懷く婦人は往々にして物を針小棒大に言ふものだとしてはいけないでせうか？ さやう彼女が

金を被告に渡す場合の侮辱も、輕蔑も確かに誇張されてゐたのです。しかしながら彼女がその金を差出す時、おそらく被告が受け取れるやうな態度に出たに違ひないのです、被告の如き吞氣な人間にとつては尙更さうだつたに違ひないのです、殊に被告は、その當時、近々父親から三千留といふ金を受け取る權利をもつてゐたのですから、それは被告にとつては無分別な考へでしたが、言はばそれは彼としては餘儀ない無分別な欲望だつたのです。つまり彼はそのため、父から金の貰へることや、その金を受け取つたらいつでも、自分が託された金を郵送して、負債を償却することが出来ると思つてゐたのです。しかし檢事は、その日に受け取つた金の半分を別に取つて、小さい袋に縫ひ込んだといふことを極力否認してゐます。被告はそんな性格の人ぢやない、到底そんな氣持になれる人ではないことをわれわれに言つてをられます。けれども自分の口から、カラマゾフは同時に兩極端を眺めることが出来ること叫んだぢやありませんか。實際カラマゾフは兩極端の間を浮動する二面の性格を持つてゐます、たとひ放埒な享樂に對して猛烈な欲求を起してゐるやうな時でも、もし他面において、何物かが彼を動かすならば、容易に彼はその欲求を思ひ止まることが出来るのです。で、一面といふのは愛でした——彼の胸に燃え上がった新しい愛でした。被告はその愛のために金が必要だつたのです。おお、彼が戀人を享樂するよりもより一層、金の方が必要だつたのです。もし女が、『あたしはあなたのもので、フョードルさんなど問題にしてゐません』と彼に言つたならば、彼は早速女を連れ出すために金が必要だつたのです。遊興よりも之が遙かに重要だつたのです。カラマゾフはそれを悟らなかつたのでせうか？ 否、彼が苦悶してゐたのは全くこの不安のためです——して見れば彼が金を分割して、それを萬一の場合のた

めに匿し持つてゐたと言ふことは疑ふ餘地がないぢやありませんか？ しかし時が過ぎて行つた。フォードルは被告の期待してゐた三千留を渡さうとしないで、却つて被告の愛してゐる婦人を口説き落とすためにその金を使はうとしてゐると云ふやうな噂になつて來ました。『若しフォードルがその金を寄越さなかつたら、自分はカテリーナの前で盗人の地位に立たなければならぬのだ。』彼は考へたのです。彼は、是非カテリーナの所へ行つて、絶えず頸にかけて持つてゐた千五百留を彼女の前へ差し出して、『僕は悪黨です、しかし盗人ではありません。』と言はずにをられなくなつたのです。ここにおいてわれわれは、なぜ彼がその金を虎の子のやうに大切にしておいたか、又なぜ彼はその小袋を開かうとしなかつたか、なぜ千五百留宛使つたかに就て、二重の理由を發見することが出來ます。なぜ諸君は被告の名譽心を否認なさるので？ 實際彼は名譽を重んずる人だつたのです、しかしそれは時宜を誤つたためしに誤解を受けたのです、しかし名譽心のあることは事實です、それが情熱の域に達してゐます、彼は充分それを立證してゐるではありませんか？

「しかし事柄が愈々紛糾して來たのです。嫉妬の悶えは極度に達して來て、例の二つの問題が彼の逆上した頭腦を一層苦しめたのです。『もしカテリーナに返してしまつたら、グルーシエンカと逃走する方法はなくなるぢやないか？』もし彼が猛烈に酒を呷つて、一ヶ月の間大散財をして料理屋を暴らし廻つてゐたとすれば、それは彼の苦しさで過勞とが到底堪へない域に到達してをつたからに相違ありません。この二つの問題は、實際彼を絶望の域に陥れるほど峻烈なものだつたのである。彼は到頭自分の弟を遣はしてその三千留を請求させに行きながら、その返事も待たないで自分で跳込んで行き、はては多

くの人の前で父親を叩きつけました。さうなるともう誰からも金を手に入れる見込みが立たなくなりました。父親にしても、殴られてから金を渡す筈がなかつたのです。

「その日の晩方でしたか、彼は自分で胸を叩きました、丁度胸の、小さい袋の入つてゐる上の所を叩きながら、自分には悪黨にならなくとも濟む方法があるが、所詮自分は悪黨の儘でゐる積りだと弟に誓ひました。それは彼が、その方法を講じようといふ氣持もなく、又さうした性格もさうした意志も持つてゐないと言ふことを感じたからです。なぜに、なぜに検事は、あれ程自然にあれ程自信を以て、又あれ程眞摯に眞面目になされたアレクセイ・カラマゾフの立證も、信じようとなさらないのでせう？ 又なぜ反對に、金がどこかの隙間か、ウドルフォの城の天主閣かに隠されてゐるといふことを無理に私に信じさせようとなさるのでせう？

「その同じ晩、弟と話した後で被告はあの運命の手紙を書いたのであつた。その手紙こそは被告を強盜犯人と見做す上において、重要な最も偉大な證據ではないか！ 『兎に角皆の人に頼み込んでみよう、もし手に入れることが出來なかつたら、イワンが出發したら早速親父を殺して、蒲團の下のあの薔薇色のリボンの附いた封筒を取り出すまでだ』これは殺人に就いての完全な順序書ではないか、犯人は確かに彼に違ひないのだ、『全く彼がその手紙の通りを實行したのだ、』と検事は主張されます。

「しかし第一それは、酔拂つた者が、しかも非常に苛々して書いた手紙です。第二に彼は、その封筒のことを、二度目にスメルヂャコフから聞いて書いたもので、自分ではその封筒を見たことがなかつたのです。第三に、彼が實際それを書いたに違ひないが、その通り實行したといふことは何うしてわかるの

です？ 果して被告が蒲團の下から封筒を盗み出したでせうか、果して金を見出したでせうか、又果して實際その金が存在したでせうか？ 被告が駈けて行つたのは果して金を取るためだつたでせうか？ 彼が大急ぎで駈出したのは金を盗むためではなくて、女を捜すためだつたのです、彼を侮辱した婦人を捜すためだつたのです。決してプログラムを實行するためではなかつたのです、手紙に書いたことを實行するためではなかつたのです、つまり前以て考へてゐた盗みのことではなくて、突然自發的に嫉妬心が燃えて來て駈出したのです。さうだ、しかしその家へ行つて殺人を犯した時、同時に金も取つたのだと言ふ人があるかも知れない、ではつまり彼は父親を殺したのでせうか？ 強盜の罪に問ふことは、あくまで私は反對します。彼が盗んだといふ事實が詳細に證明されるに非ずんば、彼を強盜罪に問ふことは不可能です。それは自明の理ではありませんか？ しかれば彼は父親を殺しただけで、盗みをしなかつたでせうか？ ただ殺しただけでせうか？ それが證明されてゐるでせうか？ それとも又一つの小説ではないでせうか！

XII

それに人殺しもなかつた

「陪審官諸君、これは人間の生命に關することでありますから、須らく慎重に御考慮あらんことを切望いたします。われわれは起訴者が最後まで、すなはち今日公判が開かれるまで、被告が完全な豫定の計畫に基づいて犯行を遂げたものかどうかを決定するのに躊躇してゐたと證言されたのを聽きました。つまり『酔ひに乗じて』書かれたこの運命的な手紙が今日法廷に提出されるまで逡巡してゐたと言はれました。『書いてある通りに遂行されたのだ！』と言はれますが、わたくしは飽くまで、被告はただ女を捜すために駈け出したのだ、女のありかを突きとめるために女のところへ駈け出したのに過ぎないと主張いたします。これはもはや議論の餘地がないのです。もし彼女が家にさへゐたなら、彼はどこへも駈け出さずに、彼女の傍にゐ残つたでせうし、むしろ手紙で約束したやうなことは實行しなかつたでせう。彼は突然、何の考へもなしに駈け出したので、『酔ひに乗じて』書いた手紙のことなどは全然、思ひ出しもしなかつたに違ひないと思ひます。『だが、杵を掴んで行つたぢやないか』と言ひますが、何故それほどの杵の上に大袈裟な心理解剖を試みなければならぬのでせう——何故あの杵を彼が絶好の兇器と思つたとか、それを兇器として取り上げたとか、何とかかとか言つて、彼をその杵に結びつけなければならぬのでせう？ この點について、わたしの頭には極く平凡な考へが浮んで來るのです。若しあの杵が眼に觸れるところにさへなかつたら、被告があれを取りあげたといふ棚に置いてあつたのではなくて、戸棚の奥へでも押しこんであつたのならどうでせう？ おそらく被告の眼には觸れなかつたでせうし、従つて彼は兇器を持たずに空手で駈け出したに違ひありません。さうすれば誰をも殺さなかつたでせう。然らばこの杵をどうして謀殺豫定の證據と見ることが出來ませうか？

「さうだ、然し彼は父を殺すといふことを料理屋で吹聴したではないか、そして二日前、つまり酔つ拂つた手紙を書いた晩にはすつかり溫和しくなつて、ただ料理屋で店員と口論しただけではないか、實際、カラマゾフは喧嘩せずにはゐられないんだから、といふ人があるかも知れない。だが私はかう答へる、彼は若し手紙に書いたやうな殺人を計畫してゐたとすれば、おそらく店員と喧嘩することも避けただであらうし又おそらくは料理屋へ出掛けるのも見合はしただらう、なぜならさうした犯罪を企らんでゐるやうな人間は、常に静寂を求め人目を避けて、見られたり聞かれたりしないやうに身を隠すものだからです。打算上からではなくて、本能的にさうするのです。陪審官諸君、心理解剖の法則は、兩刃の武器です、われわれも亦それを使ふことが出来るのです。一ヶ月のあひだ方々の料理屋で吹聴したといふ點について見るに、われわれは屢々、子供らが、そんなことを叫ぶのを聞くことがあるが、それと同じなのです、また酔つ拂ひ共が居酒屋から出て『手前殺してやらうか』と怒鳴るやうなことがよくあるぢやありませんか？ でも彼らは誰をも殺さないのです。してみるとこの運命の手紙も——單に酔つた者の癡癡ではないでせうか？ 喧嘩好きが居酒屋の外で、『殺すぞ！ 手前共、殺してやるぞ！』と怒鳴るやうなものぢやないでせうか？ なぜさうぢやないのでせう、なぜさう云へないのでせう？ いかなる理由でわれわれはあの手紙を『運命的』だと呼ばねばならないのでせう、實に論ずるに足らないものではありませんか？ 單に、父親が慘殺されて發見されたといふ理由と、被告が庭から逃走する時、兇器を握つてゐたのを證人が目撃したといふ理由と、その證人が彼のために叩き倒されたといふ理由とで、萬事、彼が手紙の中の計畫通り實行したのだ、だから手紙は、決して『取るに足らぬもの』ではな

くて、『運命的』であると、かういはれるのです。

「ああ有難い哉！ われわれはやつと、『彼は庭にをつたから殺人を犯したのだ、』といふ事實の點に到達しました。この『彼がをつた、だから彼は殺したに違ひない』といふ數語の中に求刑の凡ての條項が含まれてゐるのです。彼はそこをつた、だから彼が下手人でなければならぬ。しからば若し、彼がそこをつても、殺したことに相違あつたら何うでせう？ ああ、わたしは立證の鎖——暗合——が實に諷示的であることを認めます。しかし乍らそれらの事實を個々別々に、その聯絡を度外視して考察して下さい。一例を擧ぐれば、検事はなぜ、被告が父の窓から逃走したと陳述してゐるのを否認なさるのでせう？ 検事は又得意さうな皮肉を以て、殺人者の頭に突然浮んだあの尊敬すべき『殊勝な』感情を一笑に附してゐたではありませんか。しかしながらもし、子としての敬意でないまでも、一種それに似た宗教的な畏敬の念があつたとしたらどうでせうか？ 『わたしの母はあの時わたしのために祈つてゐたに違ひない、』と、被告は豫審の時陳述してゐるのです、そのために彼は、スエトロワ夫人が父のところにもないことを確かめるや否や駆け出して行きました。『然し彼は、窓から見たといふことを立證出来ないではないか？』と検事は反問されます。だがなぜ彼は出来ないものでせう？ なぜでせう？ 被告の合圖で窓は開けられた筈です。恐らくフォードルは二言三言、物をいつたに違ひないので、彼女の來てゐないことを被告に知らすために何か怒鳴つたに違ひないのでせう。なぜわれわれは凡てのことを、想像通りに、想像しようと思つた通りに臆断しなければならぬのでせうか？ 現實の中には、最も微妙な空想にもれるやうな事實が幾千となく起つてゐるに違ひないので。

「それはさうだ、だがグリゴリイは扉の開いてゐたのを見たではないか、だから被告はたしかに家中へ入つたに違ひない、して見ると父を殺したのは彼だ、』といふかも知れない。さて陪審官諸君、その扉が問題です。……御承知の通り、その扉について、ただ一人の證人の陳述があるばかりで、しかもその證人はその當時あんな状態だつたのです、が……しかしながら、扉が開いてゐたと假定するがよろしい。被告が自己防衛のために、嘘を吐いてそれを否認してゐると假定するのでもいいでせう、被告の立場としては自然なことですから。また彼が家中へ入つて行つたとするのでもいいでせう——だが一體それが何になるのです？ 彼がそこをつたといふことが、彼を犯人と認定する理由になるでせうか？ おそらく彼は家中へ躍り込んで、あちこちの部屋を駆け回り廻つたかも知れません。父親をおしのけたかも知れません、又父親を擲つたかも知れません。しかし彼はスエトロワ夫人の來てゐないことをたしかめるや否や、彼女のゐなかつたことと、自分が父親を殺さなかつたことを思つて、悦びながら駆け出した筈です。それは全く、彼が父を殺さうといふ誘惑からのがれ得たからです。彼が強い良心を持つてゐて、父を殺さなかつたことに無上の悦びを覺えたからです。つまり彼は純眞な感情を持つことが出來たのです、同情と憐愍の情を持つことが出來たのです、で彼は激昂のあまりグリゴリイを叩き倒したものの、一分間の後にはそれを助ける氣になつて扉を飛び降りたのです。

「検事は又、驚くべき雄辯を以て、モーグロエでの被告のおそろしい精神状態をわれわれに述べられました。つまり當時、被告は、一方では新生命を齎らさうとする戀愛に面接してゐながら、背後には血みどろになつた父の死骸をひかへて、しかも、その死骸の彼方には最後の審判の日がせまつてゐるため

に、その戀愛が彼には不可能になるといつた立場にあつたのです。所で検事は彼の戀愛を是認して、それを御自分の法則で説明し彼の酔つ拂つてゐた状態や、刑場へ連れて行かれる囚人のことや、その刑場がまだ遠いところにある、云々の點まで言及してゐられます。然し再びわたしは訊ねたい、検事殿は新らしい人物を創造なさつたのではないでせうか？、若し彼の手が實際、父親の血に染つてゐたものとするれば、さうした瞬間に被告は戀愛のことや刑罰を遁れるための詐欺手段やを考へることが出來る程、無智冷酷な人間でせうか？ 否、否、さうぢやありません！ 彼は彼女に愛されてゐることが出來る程、新らしい幸福を約束しながら彼を手元へ呼んでゐることを確かめるや否や、ああ！ そのときもしも彼は父親の殺害を良心に恥ぢたとすれば、自分の心に、自殺の衝動を二重にも三重にも感じて、おそらく自殺を決行した筈だと、わたしは抗辯します。ああ！ 否、彼は拳銃がどこにあるかを忘れる筈はありません！ わたしは被告を能く知り抜いてゐます。検事は被告の中に慘忍にして石の如き冷酷さを認めてゐますが、それは確に彼の性格に符合致しません。彼は自殺し兼ねないので、それは確かです。彼が自殺しなかつたのは、『母親の祈りが彼を救つた』からです。彼の血については全く罪がなかつたのです。あの夜彼は、老いたるグリゴリイ一人のために悶え悲しみました、そして老人が蘇生してくれ

るやうに、自分の打擲が致命傷でなしに済むやうに、又そのために自分も苦しまないで済むやうに、神に祈りました。なぜこのやうに事實を解釋することが許されないのでせう？ 被告が嘘を吐いてゐるといふ確固たる證據があるのでせうか？

「しかし又かう問ひ返されるかも知れませんが、『現在父親の死骸があるではないか！ 若し彼が殺さず

に逃走したのなら、一體誰が下手人なのだ？」と。ああ、わたしは繰り返していふが、ここに求刑のすべての論證があるらしいのです。彼でないとするれば一體誰が殺したのだ？ 彼に代るべき者が一人もないぢやないか？ といふ點にあるらしいのです。

「陪審官諸君、果してそれは事實でせうか？ 彼以外に一人も無いといふことは、動かすべからざる眞實でせうか？ 検事が、あの晩家をつたすべての人間を一々數へてゐられたのをわれわれは聞きました。全體で五人をつたのです、そのうちの三人は全く責任がなかつたといふことはわたしも承認します——それは被害者自身と、老いたるグリゴリイと、その妻とです。で、後には報告とスメルチャコフとが残ることになります、検事は全く戲曲的にかう叫ばれるのです——つまり被告がスメルチャコフの名を挙げたのは他に選ぶ人間がなかつたからである、六人目の人間があつたら、六人目の人影の幻影でもあつたら、早速彼は恥づかしくなつて、スメルチャコフに罪を被せることを見合はして、その六人目の人に罪を被せたに違ひないと仰しやるのです。しかしながら陪審官諸君、なぜわたしはそれと全く此反對の結論をくだすことが出来ないものでせう？ ここに二人の人間——被告とスメルチャコフとが在ります。私は敢へて申しますが、検事は單に、外に罪を問ふ者がないから被告を責めてゐられるのではないでせうか？ 又、スメルチャコフをばすべての嫌疑から斷然、除外なされたから、外に一人もなくなつたのではないでせうか？

「實際、スメルチャコフに罪を被せてゐるのはただ、被告と、その二人の兄弟と、スエトロワ夫人とだけです。けれども、まだそれ以外に彼の罪を挙げようとする者が幾人かあるのです。そこには一つの疑

惑、一つの嫌疑に對する漠然とした、風評が立つてゐます、漠然とした流言と、期待の念とがあるので。最後にわれわれは、無論、斷定を下し得ないにしても、事實の關係を證明する非常に暗示的なものを持つてゐるのです。第一われわれは、兇行當日のあの癲癇の發作を知つてゐます。検事はそれをなぜか眞正の癲癇であると極力辯護してゐられる様です。第二に、裁判の前夜スメルチャコフが突然自殺したことです。それから今日の法廷で被告の次の弟が陳述した實に驚くべき立證です。彼は兄の罪を信じてゐたにもかかはらず、今日になつてから突然紙幣束を提出して、スメルチャコフが犯人であると宣言しました。おお、わたしはイワンが腦の炎症に罹つてゐることや、その陳述が、實際、妄想の中で計畫されたもので、死者に罪をぬりつけて自分の兄を救はうとした絶望的な努力であつたといふ、裁判官や検事の斷定に全然、同感するものです。しかしながらスメルチャコフの名が再び挙げられた所に神秘的な暗示が漂うてゐるのです。そこにはまだ説明されてゐない不備な或るものがあるのです。おそらくそれは他日説明されるでせう。しかし今はそれに立ち入らずにおいて、後で述べることにしませう。

「裁判官は訊問再開を宣せられました、わたしは今暫らくの間、先刻、検事が緻密に巧妙に描き出されたスメルチャコフの性格論について聊か言葉を費しておきたいと思ひます。わたしは検事の才能には敬意を表しますが、その論旨には同意を表することが出来ません。わたしはスメルチャコフを訪ね、彼に直接會つて談話を交換したことがあります、わたしは、その時全く別種の印象を彼からうけました。成る程、彼が虚弱な健康をもつてゐたのは事實です。しかしながら性格においても、精神においても、決して検事が述べられた如く薄弱な人ではありません。わたしは彼のなかに、検事が主張してゐら

れるやうな臆病さの痕跡を少しも發見しませんでした。そこには單純さもありませんでした。わたしはむしろその反對に、無邪氣の假面の下に隠された極端な猜疑心と、著しく廣汎な智識とを彼のなかに發見しました。檢事が彼を低能兒の如く言はれますが、それは餘りに輕卒です。わたしは彼から非常に明確な印象を與へられました。わたしは、彼がおそろしく野心家で、復讐心が強くて、極端に嫉妬深くて、實に呪ふべき人間であるといふ確信を懷きながら彼と別れたのでした。わたしはその時二三の質問を發しましたが、彼は自分の親子關係を殘念がりながら、それを恥ぢてをりました、そして『臭いリザエータ』の息子であることを思ひ出したときは、さすがに齒を喰ひしばらばかりにしました。彼はまた自分が子供のとき可愛がつてもらつた召使のグリゴリイ夫妻をさへ輕蔑してをりました。彼は露西亞の國を呪つたり嘲笑したりして、自分は佛蘭西へ行つて佛蘭西人に歸化するんだといふ様なことを空想してをりました。その實さてとなると何うも良い方法が見付からないとか言つてをりましたが、兎に角、彼は自分以外には一つも愛するものがないらしいのです、そして察する所、おそろしい自尊心が高いやうです。彼の文明觀なるものは、美服をまといつて、綺麗な胸當のシャツを着て、磨きたてた靴を穿くことに限定されてをりました。自分がフォードルの私生兒であるといふことから、(それには證據があるのですが)自分の境遇を、主人の正當の息子達と比較して、非常に慨嘆してをりました。彼らはすべてのものをもちますが、彼は何も持たないのです。彼らはあらゆる權利を持ち、又遺産を持つてゐるのに、彼は一料理番に過ぎないので。彼はフォードルが紙幣を封筒に入れるときに手傳ひをしたとわたしに語つてをりました。この金の用途——おそらく彼の地位をきづくに充分なその金——こそは、彼にとつては

呪ひの種だつたに違ひありません。のみならず彼は、それが手の切れるやうな虹色の紙幣ばかりで三千留あつたのを見てゐるのです。(わたしはそのことをわざわざ彼に確かめるのです。) おお、そんな大金を、野心満々たる嫉妬心の強い人間に不意に見せることはさけるべきです! 實際、彼は、そんな大金を、人が持つてをるのを見たのは、その時が初めなのです。虹色の紙幣を眼のあたり見たことが、彼の空想の上に一種病的な印象を齎らしたに違ひありません、しかしもつともそれは、すぐには結果に現はれなかつたのです。英才ある檢事はスメルチャコフの問罪についての論證と假設をおそろしく微細に批判した上で、彼が、如何なる動機から癲癇を伴つたかといふ疑問をわれわれに向けられました。しかし、彼は癲癇を伴つたかも知れませんが、全く自然に發作を惹起したのかも知れませんが、けれどもそれがすぐに、全く自然に過ぎ去つて、病人が、元の如く恢復したかも知れないのです、全く恢復しないまでも、意識だけでも恢復したかも知れないのです、癲癇の場合にそれはよくあることですから。

「また檢事は、スメルチャコフがいつ殺人を敢行したかとお訊ねになります。その時間を示すことは實に容易なことです。彼は、老いたるグリゴリイが聲を限りに『親殺し!』と叫んだ瞬間に深い眠りから覺めたのかも知れないのです。(なぜなら彼は専ら眠りこけてゐたので——癲癇の發作の後には深い眠りが続くものだからです。) 暗黒と靜寂の中のこの叫び聲は多分スメルチャコフの眠りを覺ましたのです、その時はもう彼の眠りもあまり深くはなかつたのです。若しかすると一時間も前から自然に眼を醒してゐたかも知れないのです。

「寢床から匍ひ出しながら彼は、殆んど無意識に起き上つて、一體、何事が起つたのかを見るために、

當てもなくその聲の方へ行つたのです。彼の頭はまだ發作のために朦朧として、意識も半睡眠にありま
した。しかし彼はとり敢へず庭へ出て、明りのついた窓際へ近付きましたがそこで彼は主人からおそろ
しいことを聞いたのです。主人は無論彼の來たのを悦び迎へたに違ひありません。彼の頭はすぐ活動を
始めました。そして恐怖に慄へてゐる主人から事件の顛末を聞いてゐるうちに、混亂した彼の頭の中で
一つの思想が漸次具體的の形をとつてきたのです——おそろしいが、しかし魅力のある、絶対に論理的
な思想なのです。それは、主人を殺して三千留を奪ひ、あらゆる罪を若主人に塗らうといふ考へな
す。發覺のおそれが全然ないと確信すると同時に、金に對し獲物に對するおそろしい欲求が彼を襲つた
のです。おお！ かうした突然の、抑へ難い衝動と云ふものは、恰好の機會さへあればしばしば起るも
のです。殊にその時まで何ら殺人の觀念を抱いてゐなかつたやうな兇行犯人に於ては猶更です。して見
るとスメルチャコフは家の中へ入つて自分の計畫を實行したに違ひありません。しからば兇器は何か？
言ふまでもなく、庭の石を拾つてきたのです。では何のために、どうした目的で？ それは、その三千
留が自分の身を立てるに充分だつたからです。ああしかし、私は矛盾したことを云つてゐるのではあり
ません——金は實際あつたに違ひないのでから。そして多分スメルチャコフだけが、その金の在所を
知つてゐたのです、何處へ主人が藏つてあるかを知つてゐたのです。しかしその金の包み——破れた封
筒は、床の上にあつたではないか？

「先刻検事が微細な理論を説明されましたが、それに依ると、カラマゾフのやうに不馴れた盗人にか
ぎつて封筒を床の上に乗てるものだ、スメルチャコフだと自分の證據になるやうなものは一切残して行

かない筈だといふのです、わたしはそれを聞いたとき、何だか非常に聞駈れたことを聞いたやうな氣が
したのです、といふのは、實際私は二日前に、何うもカラマゾフのやりさうなことだといふそのままの
議論と臆説とをスメルチャコフの口から聞いてゐるのです。本當になさらないでせうが、その時私はそ
れを聞くと驚かすにはゐられませんでした。たしかに彼は正直を裝つてゐるのだ、その考へを私自身か
ら出た考へのやうに思はさうと焦慮してゐるのだと、私には思はれたのです。彼は遠廻しにそれを暗示
してゐるやうに見えました。もしかすると豫審のときにもその同じ考へを遠廻しに暗示して、英才なる
検事を暗示にかけてしまつたのではないでせうか？

「『ではグリゴリーの妻はどうだ、あの老婆は？ 彼女は夜通し、病人が傍らで呻いてゐたのを聞いた
筈だ』と反問されるかも知れません。さうです、呻き聲を聞いたでせう、しかしその立證は全然とるに
足らないものです。私は或る婦人を知つてをりますが、その婦人は、庭で犬が鳴くため夜通し眼を醒し
てゐたと不平をいひました。しかしその哀れな獸が、たとひ吠えるにしても、一晩に一度か二度な
です。それは決して不自然ではありません。人間といふものは眠つてゐる最中に呻き聲を聞いて突然眼を
覺ますやうなことがあります、眼の醒めたことを苦しみながらすぐに又眠りに落ちるものです。二時
間も経つと再び呻き聲が耳について眼を醒ますがすぐに又眠り込んでしまふ。又二時間も経つと同じこ
とが繰り返される——つまり一晩に三度なのです。所が翌る朝その人が眼を醒して、どう不平言ふかと
いふと、誰かが夜通し呻き通したつたので、ちつとも眠れなかつたと、かういふのです。で、彼の場
合もこれと同じぢやないでせうか。その間に二時間も眠つたことは忘れて了つて、ただ眼の醒めてゐた時

のことはかりを想ひ出すのです、そのため何だか夜通し眠れなかつたかの如く感じたのです。

「しからばなぜ、なぜスメルチャコフは遺書のなかにそのことを告白してゐないか？　なぜ彼の良心は一方においての彼を鼓舞し、両方で鼓舞しなかつたか？　と検事は反問されます。しかし私を以て言はしむれば良心は悔恨を暗示するけれども、自殺そのものはただ絶望を豫想するのみで、少しも悔恨を感ずるものではないと言ひたいのです。絶望と悔恨とは全然別種のもので、絶望は復讐と反抗とであり、自殺は自分自身の上に手を下して、自分が一生涯嫉妬してゐた人々に對する憎惡を示すものであります。

「陪審官諸君、願はくば裁判の失敗に注目されんことを！　以上私が述べたところに、何か不審な點がありませんか？　何卒誤りの點があれば指摘して下さい、不可能と不合理とを發見して下さい。そしてもしも私の提議の中にいささかなりとも眞實の片影があるなら、又いささかなりとも確からしさの影が宿つてゐるなら、願はくば彼に罪の宣告をしないで下さい。しかもそれはただ影に過ぎないのでせうか？　わたしは全然その神聖を誓ひます、わたしの述べた殺人の意義なるものは、全然わたしの信じてゐるものです。わたしを惱まし、わたしを憤慨せしめるものは、被告の罪を問はんがために積みあげられた無数の事實です、しかもその中には一つとして信ずるに足る事實、心服するに足る事實がないのです。にも拘らずこの不運な青年は、それら事實の堆積によつて身を亡ぼされようとしてゐます。さうです、その積上げられた事實は恐るべきです。血、指から滴り落ちてゐる血、血みどろの襯衣、闇の夜の『親殺し！』といふ悲鳴、頭を打割られて倒れた老人。それから又、言葉と、陳述と、身振りと、叫び

聲との堆積！　おお！　その感應力は偉大です、それは人の考へを偏せしめる力があります、しかしながら、陪審官諸君、それは果して諸君の考へを偏せしめることが出来るでせうか？　諸君は絶対の、贊否の權能を附與されてゐるのです、その權能が大なれば大なるほど、責任もまた恐るべきものであることを忘れることは出来ません。

「わたしは今まで述べ來つた内で一言たりとも撤回しようとは思ひません、しかしながら、或る場合を假定してわたしは、此の不運な被告が父親の血で手を汚したといふ検事の論告に同意します。繰り返していひますが、これはほんの假設に過ぎないのです。わたしは一瞬間たりとも被告の無罪を疑つたことはありませんから、しかし兎も角わが被告に親殺しの罪があると假定しませう。假りにさうした所で、わたしの言はねばならないことを聞いて頂かねばなりません。諸君に言はねばならない或る事が残つてゐるのです、なぜなら諸君の胸と心には非常な争ひがあるやうな氣がするからです。……陪審官諸君、私が諸君の胸と心に訴へたりしたことを許して下さい、しかしわたしは終始誠實であり正直でありたいと思ふものです。願はくば諸君とともに眞卒ならんことを！」

このとき、可成り強い拍手によつて演説が中絶せられた。實際この最後の言葉は非常に眞卒な調子で述べられたので、一同の者は彼が實際何か云はうとしてゐるらしいことを感じ、しかも彼の言はうとしてゐることが非常に重大なものに違ひないことを感じた。しかしその拍手を耳にした裁判長は、高聲で以てもしさうしたことが再び繰返されると退廷を命じる旨を警告した。すべての物音は消え失せた。フエチニコキツチはこれまでとは全く別な感情に溢れた調子で再び口を開いた。

思想の姦通者

「事實の堆積のみが被告を滅亡させるものではありません、陪審官諸君、」と、彼は聲を高めた、「さうです、被告を眞に死地に陥れるのはただ一つの事實のみです——父親なる老人の死體です。これが普通の殺人事件であつて御覽なさい、諸君はすべての證據を集合體としてではなく、部分的に吟味した上、それが取るにも足らぬ不完全な、空想的なものであるといふ見地からこの起訴を却下されたこととせう。でなくとも、少くともさうした先入見に依つて一個の人間を破滅させることを躊躇されたこととせう。實に悲しいかな！ 彼はさうした先入見を懐かれるべく恰好に出来た人間だつたのです。しかもこれは普通の殺人事件ではなくて、實父殺しです！ そのことが大きな働きをして、かうした取るにも足らぬ不完全な證據も取るに足らぬものではなくなり、公平無私な人の心にさへ、さまで不完全な證據ではなくつたのです。どうしてこんな被告を無罪にすることが出来よう？ どうして親を殺した者が罰せられずに済まされよう？——かうすべての人が殆んど無意識に、殆んど本能的に疑問を胸に懷きま

す。

「さうです、父親の血を流すことは實に恐ろしいことです——我れを生み、我れを愛し我れの爲めには生命も惜しまなかつた父です、子供の時分から今日まで、我が病める時には嘆き悲しみ、我が幸福のために生涯の間苦しみ抜き、我が悦びと我が成功を頼みに生きてゐた父ではありませんか。さうした父親を殺すといふことは逆も想像も及ばないことです。陪審官諸君、父親とは何でせう——實父とは？ 此の偉大な言葉にはどんな意味が含まれてゐるでせう？ 此の稱呼には如何に偉大なる思想が含まれてゐるでせう？ われわれは今、眞の父親とは何であるか、又それが如何なる義務があるかといふことを部分的に説明しました。しかしながら、今回の事件、即ちわれわれが現在専ら處理の任に當つて、その問題で心を痛めてゐる目下の事件においてフォイドルなる父は、われわれが今述べた父の概念に該當しないのです。それは不運です。しかし多くの父親は皆不運です。われわれはこの不運を今少し押詰めて研究して見ようではありませんか。陪審官諸君、われわれは重要な決定を下さねばならないからといって、決して萎縮する必要はないのです。幸ひにわが賢明なる検事の言はれた如く、如何なる思想に對しても子供や小心の婦人のやうに萎縮してはならないといふのが、われわれの特別の義務です。

「しかしながら私の尊敬する反對論者は、その熱烈な論告の中で（彼は私が口を開かない前から反對論者でしたが）數回かう叫びだした、『ああ、自分は、ペテルブルグから來た辯護士に被告の辯護を委任しようとは思はない。自分は求刑もすれば、同時に辯護もするのである、』と。彼は幾度もそれを繰り返へして述べましたが、その實かうした事實をいひ落としてをられるのです、即ちもしこの恐ろしい

被告が、まだほんの子供として、父の家をつた頭、ただ一人の深切な人から一度封の胡桃を貰つたことを二十三年間も感謝してゐたものとすれば、どうしてそんな人間が、『穿く靴もなく、辛うじて一つの釦にぶら下がつてゐるやうなズボンを着いて、』父の家の裏庭を駈廻つたことのあるのを忘れる筈がありませんか？——もつともこれは温情なヘルツェンシュトゥベ博士の言葉を借りたのです。

「おお、陪審官諸君、何故われわれはこの不運をこれ以上追求しなければならぬのでせう？ すでにこの周知の事實を何故繰り返へさねばならぬのでせう？ 哀れな被告はここに於いて、父の家で何を目撃したでせうか、何故又彼は冷酷な利己主義者、人非人として描かれるのでせうか！ 彼は放佚です、彼は粗暴で我儘です——その事はわれわれが先刻から審理して来たことです——しかしながら誰が彼の生活に責任をおふべきでせう？ 彼は秀れた性質や、恩に感ずる明敏な心情を持つてゐるにも拘らず、あれ程不都合に養育してしまつたのは誰の罪でせう？ 彼を適當な方向へ導いたものがあるでせうか？ 彼は學問によつて啓發されたでせうか！ その幼年時代において彼は少しでも誰かに愛されたことがあるでせうか？ 我が被告は、全く野獸のやうに神の加護のもとに放任されてゐたのです。彼はおそらく、永年別れてゐた父親に會ふことを渴望してゐたでせう。又彼は幾千度となく自分の幼年時代を回想して、無邪氣な夢に襲つて来た呪ふべき幻影を拂ひのけたこととせう、そして又全心をもつて彼の父を抱擁し彼の父を許さうと祈つたに違ひないのです！ 然も彼を待つてゐたものは何でせう？ 彼の見せられたものは唯皮肉な嘲笑と猜疑と、金に關する爭論だつたのです。彼は只酒の上の嫌な話と悪意ある訓話とを聞いたただけでした、そして最後に彼は、父が自分の金を横取りしてそれで以て自分の戀人

を手に入れようとしてゐるのを見たのです。おお、陪審官諸君、實に冷酷な呪ふべき話ではありませんか！ しかのみならず老人はいつも我が息子の不敬と冷酷とを呪ひ乍ら、息子のことを社會に誹謗したり、彼を惡罵したり、中傷したり、負債を持出したりして、彼を結局牢屋へ打込まうとしたのです。

「陪審官諸君、我が被告のやうに表面上は狂暴で不羈放縱な人間は往々、殆んど大抵の場合、非常に温順な心を持つてゐるものです、只彼らはそれを表面に現はさないだけです。笑はないで下さい、私の考へを笑はないで下さい！ 聰明な檢事は先刻、我が被告がシルレルを愛し——崇高と美とを愛するこゝとに對して冷酷にも嘲笑されました。もし私であつたら決して嘲笑しなかつたでせう。さうです、さうした性情——おお、それ程しばしば、それ程冷酷に誤解される此の性情について辯護することを許して下さい——さうした性情は往々にして温順と、善良と、正義とを渴望するものです、彼ら自らと、彼らの不規則と彼らの狂暴とは、全く正反對のものを渴望するものです——彼らは意識せずしてそれを渴望してゐるのです。表面上非常に情熱的で狂暴である彼らは、例へば婦人を愛するにしても全く精神的な高潔な愛を以てすることが出来るのです。再び私を笑はないで下さい、さうした性情の中には、かうした事が屢々あるのです。ただ彼らは激情を匿すことが出来ないのです、——時としては非常に野卑な感情をさへ匿くすることが出来ないのです、だからそれが能く目立つて注意を惹くのです、人間の内部のこととはわからずじまふのです。彼らの激情なるものは瞬く内に消散してしまひます。しかしながらこの一見賤しい野卑な人間が、高尚なすぐれた人物の前に立つと、忽ち新生活を求め、自己の更生を求め、よりよくなることをねがひ、優秀な高尚な人間にならうと望み、「崇高と美」とに憧れるやうになる

のです、もつともかうしたいひ方は嘲笑を招くかも知れません。

「私は先刻、被告の婚約問題にふれたくない旨を述べました。しかしながら半句だけ申しませう。われわれが先刻聞いたのは立證ではなくて、ただ精神を取亂した復讐心に燃えた女の叫び聲に過ぎないのです、彼女にはそんな資格がないのです——おお、そんな資格どころぢやないのです！——裏切つたといつて彼を責めたりする資格が無いのです、彼女の方から彼を裏切つたのです！ 今少し彼女に反省の餘裕があつたら、恐らくあんな立證はしなかつた筈です。おお、決して彼女の言葉を信じてはいけません！ 決してさうぢやありません、我が被告は彼女のいふが如く決して人非人ぢやないのです！

「『人類の愛人』は磔刑の間際においてかう言つてをります。『われは善き羊飼なり。善き羊飼は羊の群のために自分の生をすつべし、そは一つの生の失はれざらんがためなり。』願はくばわれわれの中かから一個の生命の失はれざらんことを！

「先刻私は、『父』なる言葉の意義を問ひ、それが偉大な言葉であり高價な稱呼であると斷言しました。しかし諸君、人は誠意を以て言葉を使用しなければなりません、で私は正しい名稱によつてすべてのものを呼びたいと思ひます。實際カラマゾフ老人の如きは、父であつて父と呼ぶことは出来ません、さう呼ばれる資格のないものです。資格のない父親に對する子としての愛は不合理であると同時に不可能です。愛は『無』から創造されることは出来ません、神のみは無から何物かを創造することが出来るのです。

「『父たちよ、汝らの子供を怒らすこと勿れ』と、胸に溢るる愛を以て使徒が書いてをります。私が此

の聖語を引用するのは我が被告のためではなくて、世の普ねく父たちのためにするのです。では父たちに説教する権利を誰が私に附與したのでせうか？ それは誰でもありません。只私は一個の市民として訴へるまでです——Vivos voco!（證言するのです）われわれはこの地上に永く生を享けるものではないありません、しかるにわれわれは多くの悪行をなし、多くの悪しき言葉を口にしてゐます。だからわれわれは皆相ともによき言葉を言ふ適當な機會を捉へる必要があるのです。私の努力してゐるのもそのことです、この法廷へ來てゐるのもその機會を利用しようとする意思に外ならないのです。最高の權力者から附與された此の演壇は決して無意味ではありません——露西亞全土がわれわれの聲に耳を聳だててゐるのです！ 私はただに、現在ここにをられる父たちのために言つてゐるのではなく、私はあらゆる父たちに向つて、『父たちよ、決して汝らの子供を怒らすこと勿れと、』絶叫します。さうです、われわれは先づ基督の教訓を實行しようではありませんか。その時にして初めてわれわれの子供らにそれを期待することが出来るのです。しからざればわれわれは父ではなくてわれわれの子供らの敵です、又彼らはわれわれの子供ではなくて、われわれの敵です、しかも彼らをわれわれの敵にしたのはわれわれ自身です。『吾曹人を量らば、その如く又量らるべし』——これは私の言葉ではなくて聖書の訓へです、他人を量れば、隨つて己れも量られるのです。われわれが量つた通りに彼らが量つたとして、どうしてわれわれは子供らを責めることが出来ませうか！

「これは最近のことですが、芬蘭で、或る女中が子供を生み落として匿してゐるといふ嫌疑をうけました。彼女は警戒されてをりましたが、屋根裏の一隅の煉瓦の下から、誰も知らなかつた一つの箱が發

見されました。所が蓋を取つて見ると、彼女の殺した嬰兒の屍體がその中から發見されたのです。而もその同じ箱の中から別な子供の髑髏が二つも發見されましたが、彼女の自白に依ると、それは彼女が以前生むとすぐ殺した子供のつたさうです。

「陪審官諸君、彼女はその子供らの母親でせうか？ 成る程彼女はそれらの子供を生みました。果して彼女はそれに對して母親でせうか？ 誰か彼女に母親なる神聖な名を與へることが出来ませう？ 諸君、われわれは大膽にならうではありませんか？ もつと無作法にならうではありませんか？ 今の場合さうなるのがわれわれの義務です。オストロフスキイの脚本の中で、モスクワの女たちが或種の言葉の響きを恐れる所がありますが、われわれは決してそんな風に或る言葉や思想を恐れてはなりません。否われわれは、最近數年間の進歩が如何にわれわれにさへ感じられたかを考察して單に子供を生むことだけでは父でない、子供を生み、子供を生むことによつて義務を果たす者こそ父であると斷言すべきではありませんか。」

「おお、無論『父』なる言葉には別な意味、別な解釋があります、即ちそれが人非人であらうが、子供らの敵であらうが、單に自分を生んだことだけでも、同じく父であるといふ主張なのです。しかしこれは神秘的な意義ともいふべきもので、到底私の智力では解釋出来ないものです、ただそれは信仰によつてのみ受容られるのです、更に適切にいへば信仰の上に立つて受容られるのです。それと同じやうなことで色々私に諒解出来ないことがあります、宗教は常に私をしてそれを信ぜしめようとしてをります。しかしながらさうした場合において、われわれはそれを實際生活の埒外においておけばいいの

です。實際生活の範囲内では、それ自からの権利があると同時に、われわれは大きな義務と服従とを課せられるのです。この範囲内においてももしわれわれが博愛主義者にならうと欲し——基督教主義者とならうと欲するならば、實際われわれは鎔爐の分析を通過して來た所の、又理性と體驗とによつて是正された所の、確固たる信念によつて行動しなければならぬと同時に、その義務があるのです。一言にしていへば合理的に行動しなければならぬのです、夢想や妄想の中で行動してゐる様ではならぬのです、さうすればおそらくわれわれは他人に害を及ぼすこともなければ、又人を酷遇して滅ぼすやうなこともないのです。その時こそ眞の基督教信者としての行動が出来るのです、常に神秘的なるに止まらず、合理的でもあり博愛的でもあり得るのです。……」

此の言葉とともに、法廷のそこから猛烈な拍手が起つた、しかしフェチニコキツチは、演説を中絶することなしに最後まで続けさせてくれることを哀願するかのやうに手を振つた。廷内は直ぐ元の靜肅にもどつた。能辯家は更に語を進めた。

「諸君、われわれの子供らが、成長して理解力が出來た曉において、かうした疑問に逢着せず済むと思へるでせうか？ 否、到底彼らには避けがたきことです、われわれは彼らに對して不可能な束縛を強ひることは出来ません。無價値な父親を見ては、知らず識らず若い者の頭に至難な疑が浮ぶものです、それが自分の同僚の優れた父親と自分の父とを比較した場合に殊にさうです。所でこの疑問に對する常套的な答辯はどうかといふと、『あれはお前を生んだ人だ、お前はあの人の肉であり血であるのだ、だからお前はあの人を愛さなくてはならない、』といふことです。しかし青年は反省します、『所で父は

俺を生んだとき、果して俺を愛したらうか？」斯う疑ひながら一層迷つて行くのです。「一體、俺の爲めに俺を生んでくれたのだらうか？ その瞬間には、多分酒に刺戟せられて情慾を起した瞬間には、おれのこと知らなければ俺の男女別さへ知らなかつたのだ、只おれに酒亂癖だけを遺傳したのだ……父親はそれだけのことをおれのためにしてくれたのだ……それになぜおれは親父を愛さなければならぬのだ、只俺を生んだだけなのだ、その後一度もおれを愛したことがないではないか？」と。

「おお、これらの疑問はおそらく粗暴で冷酷なものとして諸君の頭に響くかも知れませんが、しかしながら決して不可能な制裁を青年の心に期待してはなりません。『扉より追ひ出だしたる天性は窓より入り来るべし、』です。特にわれわれは言葉をおそれてはなりません、只管理性と人道の命ずる所に従つて問題を解決しなければならぬのです、神秘思想に盲従してはいけません。しからばそれはどう解決すべきでせうか？ それはかうすればよいのです。その息子を父親の前に立たせて、『お父さん、何故僕はお父さんを愛さなければならぬのですか、教へて下さい。何故あなたを愛さなければならぬのか聞かして下さい』と問はせるのです。若し、その父が息子に答へることが出来、正當な理由を聞かせることが出来るならば、われわれは初めて眞の、正しい父としての關係を認めることになるのです。それは決して神秘的な偏見の上に立つてゐるものではなくて、合理的な道德的な、全然人道主義的な基礎の上に立つてゐるのです。所でもしもそれが答辯出来ない父親であつたならば、それこそ家族關係の最後です。彼は息子に對しては父でないのです、又息子は彼を他人と思惟し、敵とさへ思惟する權利を持つことになるのです。陪審官諸君われわれの審判席は正しき思想と健全な思想との學校でなければな

りません。

（ここでわが能辯家は、制止し難い殆んど狂熱的な拍手によつて遮ぎられた。無論傍聽人全體といへないまでも、その過半数は拍手したのであつた。父たち母たちは現實に拍手した。婦人席になつてゐる機敷からは金切聲や喚き聲が聞え、中にはハンカチを振廻すものもあつた。裁判長は夢中になつて鈴を鳴らし始めた。明らかに彼は傍聽人の態度に激怒させられたのであるが、前に嚇かしたやうに退場を命ずることだけは敢へてしなかつた。裁判官達の後方の特別席にゐた高位の人々や、胸に勳章をつけた老人たちまでが、この能辯家を喝采してハンカチを振廻した。そのために騒ぎが落ちついた時、裁判長はただ斷乎たる態度で退場を命ずる旨の嚇かし文句を繰り返すだけに止めた。フェチュコーキツチはやがて感激と勝利の色とを浮かべながら演説を續けた。）

「陪審官諸君、諸君は恐らく記憶してゐられるでせう、息子が塀を乗り越えて、自分の敵であり、虐待者であり、自分を生んだ人である老人の眼の前に立つたあの恐るべき夜のことを、それは今日幾度も繰返された筈ですから。私は飽くまでも所信を貫きますが、彼が父の家へ駈付けたのは金のためでなかつたのです。私が前に述べた通り、強盜罪を科することは不合理と云はなければなりません。又家の中へ亂入したのは父を殺すためではなかつたのです、おお確かにさうぢやなかつたのです！ 若しも前からさうした計畫を胸に持つてゐたとすれば、前以て兇器を身に着けてゐなければならぬ筈です。本能的に青銅の杵を取り上げたものの、何故さうしたのか自分でも知らなかつたのです。彼が窓を叩いて、父を嚇したと假定しませう、又さうして家の中へ入つて行つたと假定しませう——もつとも私は先に言つ

た通りさうした風説を一瞬間でも信ずることが出来ませんが、假りにさうとして、一瞬間だけさう假定
しませう。諸君、それが若しも彼の父親ではなくて、普通の敵であつたとしても、おそらく彼は部屋部
屋を走り廻つて、女の來てゐないことを確めた以上は、自分の戀敵に少しも害を加へないで、其儘慌て
て其處を立去つたに違ひないと云ふことは、私はすべての聖なるもの名において諸君に誓つてもいい
のです。彼は父親を擲つたかも知れませんが、おそらく突飛ばしたかも知れませんが、しかしそれ以上には
出なかつたのです。なぜなら彼はそれ以上のことをする考へもなかつたし、又時間の餘裕もなかつたの
です。彼の望みはただ彼女の居所を突留めることだつたのです。然し父親は、父親は！ 幼年時代から
彼の憎惡の的であつた父親、彼の敵であり虐待者であつた父親、而も今は不自然な戀敵である父親、そ
の父親の姿を一目見れば充分だつたのです！ 無意識に、抑へ難き力を以て、憎惡の怒が彼を襲つて
來て、彼の現性を曇らせてしまひました。それはすべて瞬く内に押寄せて來たのです！ それは狂氣と
精神錯亂との衝動であると同時に、永遠の法則に對する自然な、不可抗な、無意識な復讐の衝動だつた
のです。（自然の中のことと變りはなかつたのです。）

「しかも被告は、さうした場合にでも殺害しようとはしませんでした——私はそのことを主張します、
私は大きな聲でそのことを叫びます——否、彼はただ込み上げて來る憎惡の念に驅られて杵を振り上げ
たままでです。殺害するつもりでもなければ、殺したことに氣がつかなかつたのです。もしこの運命の
杵が彼の手の中になかつたならば、ただおそらく父を擲り倒しただけで、殺害はしなかつた筈です。だ
からその場を逃げ出した時、彼は老人を殺したかどうかを知らなかつたのです。さうした殺人は殺人で

はありません。さうした殺人は親殺しではありません。否、さうした父の殺人は、親殺しと云ふことは
出来ません。さうした殺人は、ただ偏見によつてのみ親殺しの中へ入れられるのです。

「しかしかう言つたからとて、その殺人が實際あつたかどうか、私は心の底から幾度も諸君に訴へたい
のです。陪審官諸君、もしわれわれが彼を有罪と判決して處罪するならば、彼は自分で獨語するでせ
う、『この人達は俺の養育と、俺の教育と俺の運命を拓くために何一つしてくれなかったことがないのだ、お
れをよりよくし、おれを人間らしくするために何一つしてくれなかつたではないか。この人達はおれに
食ふものも飲むものもくれなかつた、監禁された裸一貫のおれを一度も見舞つてくれなかつた、そして
今又俺を懲役にやらうとするのだ。お互様だ、俺は今何一つ彼らに負うてゐない、永久に誰からも負は
ないのだ。彼らも悪人なら俺も悪人になつてやらう。彼らが慘酷なら俺も慘酷になつてやらう。』と。
陪審官諸君、彼はこんなことも言ふに違ひないのです。私は誓つて云ひますが、彼に罪の宣告をするな
らば、結局は彼を悦ばすことになるだけです。彼の良心を輕蔑するならば、きつと彼は自分の流した血
を呪つて、それを苦にしなくなるのです。それと同時に諸君は、彼の中にある新しい人間にならうとす
る可能性を滅ぼしてしまふでせう、なぜなら彼は一生の間、不徳と盲目の中に終始することになるか
らです。

「それでも諸君は、想像もつかぬ恐ろしい刑罰を以て、慘酷非道に彼を罰しようと思ひますか、又そ
れと同時に彼を救ひ、彼の靈を眼覺さうと思ひますか？ もしさうだつたら、諸君の慈悲心で彼を
蔽ひなさい！ そしたら諸君は、いかに彼が慄へてゐるか、いかに恐怖に打たれてゐるかを見ることも

聞くことも出来ないでせう。『どうしたらおれはこの慈悲を蒙ることが出来るだらう？ どうしたらおれはこんな大きな愛をうけることが出来るだらう？ おれはそれをうける資格があるだらうか？』彼はきつとかう叫ぶでせう。

「おお陪審官諸君、私は知つてゐます。私にはわかりませんが、あの心、あの粗暴ではあるがしかし恩に感ずる心を！ その心はきつと諸君の慈悲の前に跪拜するでせう。それは偉大な愛の行ひに渴えてゐるのです、それは融けて空に昇るでせう、世間には往々自分の限界中で全世界を呪うてゐる人間があります。さうした人間の靈を慈悲で霑ほして御覽なさい、又さうした人間に愛を見せて御覽なさい、きつとそれは過去を呪ふ様になるでせう、なぜならその中には多くの善良な感情が潜んでゐるからです。さうした心が芽を吹きさへすれば、屹度神の慈悲深いことや、人間の善良さと正しさとを見るに違ひありません。彼は怖ろしさに身を慄はせるでせう。又、悔恨の念に襲はれると同時に、眼の前へおかれた幾多の義務に壓へつけられるでせう。その時『お互様だ、』と言はないで、『自分はすべての人々の眼の前に立つ罪人である、誰よりも劣つた人間である。』と言ふに違ひありません。彼は良心の苛責と辛い優しい苦惱の涙を流しながらかう叫ぶでせう、『他の人達は皆自分よりは善良なのだ、それに自分を滅ぼさうとはしないで、自分を救つてくれようとするではないか！』と。おお此の慈悲深い行爲は、諸君にとつては實に易々たるものです、なぜなら眞の立證らしいものは一つもなくして、『しかし、彼は罪人である、』と宣告することは、諸君にとつてはあまりに恐るべき事實だからです。

「十人の罪ある者を許すは、一人の罪なき者を罰するよりも勝れり！ 諸君、諸君は過去の世紀の我

が光榮ある歴史より發するこの威嚴ある聲を聞知してゐられるでせう？ わが露西亞の法廷は單に刑罰を定めるばかりでなく、同時に罪人を救済するものだといふことは、今更私の如きつまらない人間が、諸君に向つて喋々するまでもないことです！ 他の諸國民には刑罰と註文のことを考へしめればよいのです。われはひたすら、精神と意義とを固執すればいいのです——失はれた者の救済と改善とに終始すべきです。もしこれが事實であるならば、もし露西亞とその裁判とがかうしたものであるならば、この國は揚々たる意氣を以つて進むに違ひありません！ すべての各國民が憎惡の念を以て道を讓つてゐる狂へるトロイカでわれわれを嚇かさうとしても駄目です。疾走するトロイカではなくて、莊嚴なる露西亞の戦車が肅々と動きながら目的に向つて堂々と進んで行くのです。わが被告の運命は諸君の手に握られてゐるのです。露西亞の正義の運命も諸君の手中にあるのです。諸君はそれを擁護されるでせう、諸君はそれを救出されるでせう。諸君は現にそれを守護してゐる人のあることを示し、それが善人の手中にあることを示されるでせう！」

XIV

百姓たちは頑張つた

フェチュコーキツチは、かうして演説を結んだ。聴衆の熱狂は抗し難い嵐のやうに破裂した。それは制止しようとしても駄目であつた。婦人たちは泣いてゐた、多くの男たちも泣いた、二人の主要な人物さへ涙を流してゐた。裁判長もこれを黙認してゐた、そして鈴を鳴らすのをさへも控へてゐた。さうした熱狂を鎮定しようとするのは神聖なものを鎮定しようとするのと同じである、と婦人たちは後で叫んだが、實際その通りである。能辯家自身も心から感動してゐた。

イッポリットが、やをら身を起して辯駁しようとしたのはその時であつた。人々は侮蔑的な眼で彼を眺めてゐた。『何ですつて？ どうするつもりでせうね？ 反駁なんかよせばいいのに、』と婦人たちは咳やき合つてゐた。しかし彼の妻君をも加へて、全世界の婦人たちが反對しようとも、その時は反駁をよすわけには行かなかつたであらう。彼の顔は蒼ざめ、全身は感動に慄へてゐた。彼の最初の數句は殆んど解し難い位であつた、そして呼吸をはずませながら、聯絡のないことを曖昧な調子で話してゐた。しかし直き彼は正氣に復した。この度の彼の演説のなから、私は二三章を抄録するのみにとどめておかう。『……私は小説を作るといつて非難されました。しかしこの非難は他の小説の上に一つの小説を作つたことになりはしないでせうか？ 只詩情にとほしだけのことです。フォードルは戀女をまつてゐた時、封筒を引破つてそれを床の上に放棄したのだとか、はなはだしきは、さうした不可能なことをしてゐた時にいつた言葉まで、われわれは聞かされました。これは果して空想の所産ではないでせうか、のみならず彼が金を取出した證據と云ふものが一つもないぢやありませんか？ 誰か彼の言つたことを聞いた者があるのでせうか？ 低能の白痴スメルチャコフは、自分が私生兒であることから社會に反抗

しようとするバイロン風の主人公と置き換へられて居りますが——これは果して、バイロン風の小説ではないでせうか？ また、息子が父の家へ亂入して、父を殺して置きながら殺すつもりでは無かつたといふが、これは小説といはんよりも——彼自身にも解決出来ない謎をわれわれにかけるスフィンクスではないでせうか。若しも、彼は父を殺したとすれば、それは父を殺したので、殺しておきながら殺したのでないといふのはどういふ意味でせうか——誰がそれを解決するでせうか？

「次にわれわれは、われわれの法廷は眞理と健全な思想との法廷であることを聞き、この『健全な思想』の法廷から、父を殺すことは『親殺し』と呼ぶべきであるといふ莊嚴な宣言がきこえたところで、それは單に偏見に過ぎない、といふことを教示されました！ しかし乍ら若しも親殺しが偏見であるならば、またもすべての子供が自分の父親にむかつて、偏故に父親を愛さなければならぬかと訊くやうになつたならば、われわれは一體どうなるでせう？

「また社會の基礎はどうなるでせうか？ 家庭はどうなつて行くでせうか？ そのとき親殺しは單に、モスクワの商人たちの妻の幽靈にすぎなくなるにちがひありません。露西亞の司法權の運命と未來とに對する最も貴い、最も神聖な保證も、單に一つの目的を充たすために、誤用された愚劣な形式として、われわれは見せられて居るので、——しかも、それは無罪にすべからざる者を無罪にしようとする單なる目的なのです。『おお、慈悲をもつて彼に臨め、』と辯護士は叫びました。しかしそれは凡ての罪人の哀訴です、翌日になることは如何に慈悲を受けてゐるかを知るので、のみならず、辯護士が被告の無罪ばかりを要求されるのは、あまりにも不穩當な沙汰ではありませんか？ 親殺しを讚美することを

慈善行爲のやうに心得て、自分の名譽を後の時代に傳へようとする事になりはしないであろうか？ 宗教と福音書とは是正された——それはすべて神祕主義である、われわれの有するものは、ただ理智と常識の説明によつて確立された眞の基督教であると、かうわれわれは聞かされました。しかし、これはわれわれの前に類似の基督をおかうとするものではありませんか！ 汝ら人を量れば、その如く量らるべきし、かう辯護士は叫んだ、基督はわれわれにむかつて、汝ら量られし如く人をはかるべしと教へて居るのであると推論されました——而も是れは、眞理と健全な思想との法廷からはつせられたのです！ われわれは只辯論の前夜に福音書を一寸覗いて見ます、それはとにかく、原文を知つて居るやうな顔をして聴衆を驚かすためなのです、なるほどそれは或る効果をもたすために役立つかも知れません——さうした目的のために役立つかも知れません！

「しかし基督がわれわれに命じてゐるのは全然べつな事です、基督はわれわれにむかつて、其れは惡の世界においてもちゐられるものだから決してためにはならないと命じてをります。しかしわれわれは、許さなければなりません、そしてたの頬をむけなければなりません、またわれわれの迫害者がわれわれをはかるからと云つて、彼等を量り返してはなりません。われわれの神はかうわれわれに教へてゐます、父親を殺すことを子供に禁じることが偏見であるとは教へてゐないので。われわれは眞理と善良な思想との法廷から神の福音を訂正すべきではありません、辯護士はわれわれの神をただ、『磔刑に處せられた人類の愛人』とのみ叫んでゐますがそれは神にむかつて『汝は我等の神なればなり！』と呼ぶ正教主義の全露西亞に反抗するものといはなければなりません。」

此所で裁判長は、よくかうした場合にどの裁判長でもするやうに、突然口を容れて、感興に乗りすぎた演説者を制止しながら、誇張しないやうにとか、限度をこさないやうにとか、さうしたことを懇請した。聴衆もおなじく不安を感じてゐた。一般傍聴人は動揺めきはじめて、昂憤を洩らす叫び聲さへ聞こえた。フェチュココキッチは餘り多くを答へようとしなくて、只胸に手を當てて演壇へ上りながら、腹立たしげな聲で嚴肅な數語を述べただけであつた。彼はただ事もなげな皮肉な調子で『小説』と『心理學』とについて再び述べ又、適宜な場合に『ジュピタアよ、汝怒れる故に悪しきなり』と云ふ句を挿んだが、この文句は聴衆の中に、賛成的な哄笑を喚起した、何故ならイッポリットはどんな方面から見ても、少しもジュピタアらしくなかつたからである。次に青年者に對して親殺しを教へたと非難されたことについては非常に嚴肅な態度で、あへて答辯したくないと言ひきつた。又檢事が自分に對して反宗教的な思想を云々して責めたことに對して、フェチュココキッチは、それは單に人としてのあてこすりであると指摘して、少くとも自分はこの法廷において『市民として又國民の一員としての體面を疵付けられるやうな』非難をかうむることは豫期して來たのであるといつた。しかしかういつた時、裁判長は彼を引きとめた。フェチュココキッチは、恭しく叩頭して、廷内の騒々しい喝采の中で辯舌を終つた。かうしてイッポリットは、婦人たちの見解では、『結局壓服されてしまつた。』のであつた。

次に被告は發言を許可された。ミーチャは起立した。けれども、非常に少ししか言はなかつた。彼は肉體的にも精神的にも恐ろしく困憊してゐた。その朝出廷した時の力と自尊との表情は殆んど影も見えなかつた、彼は今日、自分の後半生を指導するやうな或重要な事を経験したやうな氣がした、それはこ

の時まで解らなかつたことであつた。彼は弱々しい聲をして、もう以前のやうな叫び聲が出せなかつた。その言葉の中には謙讓と失望と忍従との新しい調子がこもつてゐた。

「陪審官諸君、私は今更なにをいふことがありませう？ 審判の時が私の上に来たのです、私は神の御手を自分の上に感じます！ 一人の悪人に破滅の日が来たのです！ 然し神の御前で、私は諸君に向つてくりかへします、父の血に就いて私は全く罪が無いのです！ 最後として今一度いひます、父を殺したのは私ではありません！ 私は正しくはなかつた、しかも善なるものを愛して來ました。いかなる瞬間でも私は善道に立歸らうと努力して來ましたが、矢張り野獸のやうな生活をつづけてゐたのです。私は検事に感謝します。彼は私のことについて、私の知らないことまで一々言つて呉れました。しかし私が父を殺したといふのは嘘です、検事の間違です。私は辯護士にも感謝します。私は辯護士の演説を聽いて泣きました。しかし私が父を殺したといふのは本當ではありません、又殺人と假想する必要もないのです。次に醫師達の立證も信じないで下さい。私の精神は健全です、ただ少し氣持が沈んでゐるだけです。諸君としてもしも私を放免して下さい。私は諸君のために祈ります。私はもつと良い人間になるでせう。神の前でも誓ひをたてます、又若し諸君が私を罰するなら、私は頭の上で劍を折つて、その破片に接吻するでせう。しかし私を赦して下さい、私の神を強奪しないで下さい！ 私は自分を知つてゐます、私は反抗するかも知れません！ 私は氣が鬱いでゐます、諸君……私を赦して下さい
S—」

彼は後ろへ倒れるかのやうに着席した。聲は途切れて、最後の一句もしどろもどろであつた。やがて

裁判官達は訊問を提出して、原告側と被告側とに對し、結論を徴した。しかし私は詳細をここに述べないことにする。つぎに陪審官に對する最後の警告もなんだか弱々しかつた、『どうか公平な立場で合議して下さい、決して辯護士の能辯に感化されてはなりません、證據を重視して下さい。願はくば、諸君が重大な責任を負つてゐることを記憶せられよ』云々と言つただけであつた。

陪審官が退廷したので、裁判は休止となつた。人々は席をたつたり、歩き廻つたり、數々の印象を生かしあつたり、食堂へ行つて氣分を爽快にしたりすることが出來た。時間が随分遅くて、ほとんど夜の一時頃であつたけれども、誰一人歸らうとするものはなかつた。とに角非常に緊張してゐたため、誰も眠ることなんか考へなかつたのである。一同は沈んだ氣持でまつてゐた。しかしこれは過言かも知れない、なぜなら、婦人たちは、ただヒステリーのいらいらしてゐるばかりで、決して胸を痛めてゐなかつたからである。たしかに無罪放免になる、とかれらは考へてゐた。そして一般が熱狂する戲曲的な瞬間を今やおそしと待構へてゐた。しかし私は男子の傍聽人の中でも確かに無罪なることを信じてゐた者が随分あつたことを認めねばならない。或者は悦び、或者は澁面を作り、又或者はその無罪を希望しないでただ鬱ぎこんだ顔をしてゐた。フェチュコーキツチは自分の成功を信じてゐた、そして彼に祝意を表したり阿諛したりする人々に取圍まれてゐた。

「實際」と彼はある一團の人々に向かつて言つた、(もつとも其は私が後で聞いたことである)『辯護士と陪審官との間には見えない糸があつて兩者を結びつけてゐるのです。演説中にそれが作成されると、誰にでもすぐ感ぜられますよ。現に私はそれをみたのです。よくあることです。この裁判は屹度

勝ちですから御安心なさい。」

「時に百姓共はどう言ふでせうな？」と、一人の頑丈な意地悪るさうな、近所の地主だと云ふ痘瘡面の紳士が會話に夢中になつてゐる一團の紳士達の方へ近付いた。

「だけどあれは百姓ばかりぢやありませんよ、縣廳の書記が四人もあの中にあるのです。」

「さうです書記も混つてゐます、」と一人の縣會議員が言つてこの一團に仲間入りした。

「時に諸君は、あのナザリーエフといふ陪審官を御存じですか、あの徽章を着けてゐる、商人の人を？」

「あの人はどうだと云ふんです？」

「あれは中々智者者なんです。」

「でもあの人は一度も口を利かないぢやありませんか。」

「口は達者ではありませんが、それがかへつて好都合なのです。彼人はペテルブルグ人から一つも教はることがないので、かへつてペテルブルグの人を全部あの人が教へることが出来るのですから。」

「しかし、よもや無罪にはしないと申しますが、あなたはどう申しますか。」他の一團の中で、此の町の若い官吏が叫んだ

「いや、多分無罪にするでせう、」と、自信のある聲が答へた。

「無罪にしなければなら恥辱です、不名譽です！」官吏は叫んだ。「かりに殺したとしても——あんな父

親は幾人でもありますよ！ のみならず被告は、あんなに亂心してゐたのですから……只片をまわした拍手に老人を打ち倒しただけのことにはちがひありません。しかし下男を態々引合ひに出したのは、遺憾ですな。あれは全然不合理です！ もし私がフェチュココキツチだったら、卒直にかう言つたでせう、『被告は父を殺した。然し罪すべきではない。實に下らない』とね。」

「あの人もそのとほり言つたぢやありませんか、ただ『下らない！』と言はなかつただけです。」

「いや、ミハイル・セミヨノキツチ君、あの方は、その位のことを言ひましたよ、」と第三の聲が口をいれた。

「ねえ諸君、四旬齋の日に、現に此の町で、一人の女優が自分の戀人の妻君の咽喉を切つたけれども、無罪になつたぢやありませんか。」

「だが、切つてしまつたわけぢやないでせう。」

「いや、どつちにしたつて同じことです。とに角切りかけたのですから。」

「子供の問題について、云つてゐましたが、君はどう申しますか？ 實に、すてきぢやなかつたですか？」

「いや、素敵です！」

「神祕主義のこともね！」

「いや 神祕主義の話なんかは止ませう！」と、他の誰かがいつた。「それよりも イッポリットのことをどう思ひます、今日からどうなると思ひます。妻君はきつと明日にでも、ミーチャのために、あ

の人の眼を掻き捲るにちがひないのです。」

「妻君も今日来てゐるのですか？」

「と方もない！ 若し来てゐたら法廷の中でかき捲つてしまひますよ。齒痛で家にゐるんです。ヒッ、ヒッ、ヒッ！」

「ヒッ、ヒッ、ヒッ！」

第三の團體では、こんな會話が始つてゐた。

「私は斷言しますが、ミーチャはきつと無罪になりますよ。」

「無罪になつて、あの人が『メトロポリス』を顛覆するやうな騒ぎを始めても、私は決して驚きませんからね。どうせ十日位は飲みつづけるでせうよ！」

「おお、悪魔！」

「悪魔の手も随分手傳つてゐるのです。悪魔はこんな場所よりほかに出る場所はないぢやありませんか？」

「いや、諸君、どうも能辯だつたことは私も同感ですが、父親の頭を杵で打ち割ることなどは、どうも賛成しかねますよ！ さうなるとわれわれもどうなるか解りませんからね！」

「戦車とかいひましたつけ！ あなたは戦車を覚えてゐるでせう？」

「覚えてゐますとも。あの人は馬車に造り變へたのです！」

「ではまた明日になると、戦車を馬車に仕立て直さうといふんですね、どうもそのつもりらしい。」

「今日では、随分狡猾な人間も出来てきましたね。一體正義なんでものは露西亞にあるのでせうか？」
しかしこの時、鈴が鳴つた。陪審官等は正味一時間合議をかさねてゐたのである。聴衆が各自の席につくや否や、深い静寂が廷内を領した。私は、陪審官等がどんな風に入つて来たかを憶えてゐる。ああ遂に！ しかし、私はその當時の訊問を一々順を逐うてくり返へすのをよさう、また實のところ、私はそれを一々憶えてゐないのである。私の憶えてゐるのはただ裁判長が開口第一に最も重要な質問をした、それに對する答辯だけである。「果して、被告は強盜の目的で殺人を犯したのでせうか、また、それは豫め計畫してゐたのでせうか？」

（私は實際の言葉を忘れてしまつた）そこには全き沈黙があつた。書記の中でも、最も年下の、着席陪審官は死の如き廷内の静寂の中に立つて、明瞭な聲を一段はり上げていつた。

「勿論有罪です！」

そして順々に同じ質問が發せられたが、いづれも、「勿論有罪です！」といふ答辯で、少しも酌量の無い批判が下されるのであつた。此れにはたれしも意外に思つた。ほとんどすべての人は、少くとも、今少し同情ある斷定を想像したのであつた。死の如き法廷内の沈黙は破られなかつた——有罪の宣告を望んでゐた者も、無罪を期待してゐたものも、等しく化石したやうに見えた。然し、此れは最初のうちだけで、しばらくすると恐ろしい轟々の聲が始まつた。男子の傍聴人は、大部分悦びの色をあらはしてゐた。中には悦びをかくしきれないで、手を揉んでゐる者もあつた。この判決に不満をいだく人々は、肩を聳やかしたり、ぶつぶつ呟き合つたりして、なんだか面目をつぶされたやうな顔をしてゐたけれど

も、なほもその判決を信じられないやうにみえた。それにしても、婦人たちの状態を、私はどう記述したらいいだらうか、彼等は騒擾を起すに違ひないと、私は思った。彼等は最初の間は、自分の耳を疑つてゐたやうであつたが、そのうちに突然、かうした叫び聲が廷内に響いた。「一體、どういふわけでせう？ どうなるでせうか、」かう叫びながら彼等は席を起つた。彼等は、判決が直ぐ再考されて、無罪の判決が下されるものと信じてゐるらしかつた。この瞬間に、ミーチャは不意に立ち上つて、手を前方へ伸しながら、胸もはりさけるやうな聲でかう叫んだ。「私は、神かけて、恐ろしい審判の目にかけて、誓ひます、私は父の死に對して全く罪がありません！ カーチャ、お前を赦してやる！ 兄弟よ、友達よ。今一人の女に憐れみをかけて下さい！」

それ以上言葉がつづかなかつた、そして、急に異様な、不自然な、彼自身でないやうな聲を張り上げて、法廷の隅々まで聞こえるやうな風に、號泣するのであつた。すると、棧敷の後ろの一番奥の方の隅つこから、身を切るやうな泣き聲が聞こえた——それは、グルーシエンカであつた。彼女は裁判官の演説の始まらない前から、うまく頼み込んで、再び法廷に入ることを許可されてゐたのであつた。

ミーチャは連れ出されて行つた。宣告文の判決は、翌日まで延期する事になつた。満廷は喧々囂々としてゐたけれども、私は長くそれを聞いてゐなかつた。私はただ、出て行く時に、階段のところであつた二三の叫びを憶えてゐるのみである。

「どうせ二十年は炭坑の御厄介になるでせうな！」

「それ位ゐですめばいいが。」

「全く、百姓達は頑として一步も退かなかつたのです。」

「これでミーチャもうまくやられたわけですね。」

ミーチャを救ふ計畫

ミーチャの公判があつてから五日目に、朝かなり早く、まだ九時ごろに、アリョーシャはカテリーナを訪れたが、それは彼ら二人にとつて重要な或る問題について最後の打合せをし、更に彼女に依頼することがあつたからであつた。彼女はいつかグルーシエンカを迎へた時と同じ部屋で應待した。すぐわきの部屋には熱を病んで、意識不明になつてゐるイワンが横たはつてゐた。カテリーナは公判廷でのあの騒ぎの後で、すぐに病氣になり意識を失つたイワンを自宅へ運ばせたが、そのときは將來に必らずおこるべき世間の評判や非難を全く氣にもとめなかつたのである。同居してゐる親類の二人の婦人のうち、一人は判廷での騒ぎののち、直ぐにモスクワへ出立し、もう一人の方はなほ家に居残つてゐた。しか

し、たとひ二人とも立つてしまつたにせよ、カテリーナは自分の決心を翻すことなく、やはり病人の看護のために、夜も晝も病人のそばについて、何くれと看護をしてゐたに相違ない。ワルキンスキイとヘルツェントゥベがイワンを診察してゐた。例のモスクワの醫者はこれから先き病氣が癒るかどうかについて、自分の意見を述べることを避けて、モスクワへ歸つてしまつた。そこであとに残つた二人の醫者は、カテリーナとアリョーシャを元氣づけてはゐたが、それでもまだ病氣が癒るといふ確かな期待を與へることが出来ないらしかつた。アリョーシャは日に二度づつ兄の病床を見舞つてゐた。しかし、今日は特別な、厄介な問題があつてやつて來たのであつた。彼はその用件を切り出すことが、どんなに難かしいかといふことは、充分に豫感してゐたのであるが、それにしても非常に氣がせくのであつた。ほかに今朝中によそで果すべき、のつびきならぬ用事があるので、そこへも急いで廻らなければならなかつた。二人はもう十五分も話してゐた。カテリーナは蒼ざめて、疲労困憊し、同時に病的に昂奮し切つてゐた。彼女はいまアリョーシャが何の必要あつて訪ねて來たのか、はつきりと豫感してゐた。

「あの人の決心のことを心配なさらないで下さいな、」と彼女はきつぱりと、語氣を強めてアリョーシャにいつた、「いづれにしても、あの人はやはり、さうするよりほかに仕方がないんです。どうしても逃げなければなりません！ あの可哀想な人は、あの名譽と良心をもつた立派な人——あの人ぢやありませんよ、ドミトリーぢやありません、この戸の向うに寝てゐる人です、兄さんのために自分を犠牲にした人ですよ（カテリーナは眼を光らせながら附け加へた）——あの人はもう疾うにこの逃げる計畫をすつかり私に聞かしてくれたんですよ、……實はね、あの人はもう手筈をきめてゐるんですつてね……あ

なたには多少はお話ししましたけれど、……きつとね、シベリヤへみんなと一しよに護送されるとき、ここから三つ目の驛で脱走させることになりませう。おお、それまでには大分さきがありますわ。イワンさんはもうその三つ目の驛の驛長の所へいらつしやいました。でも、誰が護送隊の隊長になるか分からないんですよ、それに、前もつて知ることは出来ないんです。明日になつたら、多分、くはしく筋書をお目につけられるでせう。それは公判の前日にイワンさんが、何かの時の用意に、わたしのところへ置いて行つたものです、……さうさう、あの時でしたわ、覚えてらつして？ ほら、あの晩、わたしたちが喧嘩をしてゐるところをあなたに見つかつた時です。あの人が階段を降りかかつたとき、あなたがお見えになつたので、わたしはあの人を呼び戻したでせう、覚えてらつしやるでせう？ お分かりですかしら、あの時わたし達が何がもとで喧嘩してたか？」

「いいえ、分かりません。」とアリオージャは言つた。

「無論、あの人は、あなたに話さなかつたでせうね。あれは脱走の計畫のことで喧嘩してたのよ。あの人がね、その三日前に、わたしにその重大な計畫を打ち明けたのですが、その時からもう喧嘩を始めてゐたのよ。だから三日の間喧嘩しつづけてゐたの。あの人がかういふのよ、若しドミトリイが有罪と決まつたら、あの女と二人で外國へ逃げるだらうつて、わたしそれを聞いた時、急に腹が立つて來たものだから喧嘩を始めたのよ——なぜ腹が立つたか、それは言へませんが、わたし自身にも分からないんですもの……ええ、あの女のことと腹を立てたのは事實ですわ、あの女もドミトリイと一緒に外國へ行くつて言ふんですものね！」カテリーナ・イワーノヴナは、唇を慄はしながら、突然、かう叫んだ、「で

ね、イワン・フォードロキッチは、あたしがあの女のことと腹を立ててゐるのを覺ると、わたしがドミトリイに嫉妬してゐることや、わたしがまだドミトリイを愛してゐると思つたのよ。あの時はじめて喧嘩してしまつたんですの、わたし辯解なんか、したくもなければ、謝まることも出来ませんでした。イワン・フォードロキッチまでが、わたしの愛を疑つてゐるのかと思ふと、本當に情なくて堪りませんでした。したわ——わたしの愛してゐるのはドミトリイではなく、ただあの人ひとりきりだつて、すつと前からあの人に言つてあるんですもの！ だからあの人に腹を立てたといふのも、わたしあの女に腹を立てたからなのよ、それから三日たつて、丁度あなたのお越しになつた晩、あの方は封をした手紙をわたしのところへ持つて來て、もしあの人に何か起こつたら、すぐそれを開けるやうにつて言ふのよ、まあ本當にあの人は自分の病氣を豫知してゐたのね！ としてかう言つたのよ、この封筒の中には明細な脱走の計畫書が入つてゐるから、萬一、自分が死ぬやうなことがあるか、危険な病氣にでもなつたら、その時はわたし一人でミーチャを救はねばならない、つて。その時、一萬留近い金をわたしに渡して行きましたが——そのお金のことは檢事も論告の時に言つたでせう、あの方がその金を兩替へにやつたといふことを誰からか聞き込んだんだわ、わたし本當にイワン・フォードロキッチには、びつくりしましたわ、だつてあの方はまだわたしを嫉妬して、わたしがミーチャを愛してゐると思ひ込んでゐるくせに、兄さんを救ひ出す考へを捨てないで、しかも、その脱走の計畫をわたしに託するのですもの、ああ、これこそほんとの自己犠牲ですわね！ いいえ、アレクセイ・フォードロキッチ、まだあなたには、そんな自己犠牲の大きさは分からないでせうよ、あの時わたしは敬虔な氣持ちで、あの方の足元へ身を投げ

出したいと思つたくらゐでしたわ、でも、そんなことをすると、ただわたしはミーチャの助かることを悦んでゐると思はれるかもしれないと考へて（實際あの人の思ひさうなことよ！）單なるあの人に對する邪推から氣がいらいらしてきて、あの人の足に接吻する代りに、いやな場面を演じてしまつたのよ、まあ、わたしは何て不幸な女でせう！これがわたしの性格なのよ——わたしの怖ろしい不幸な性格なのよ、ええ、さうなのよ！こんなことをしてわたしは、結局あの人に捨てられるやうになつてしまふのよ、あの人もドミトリイのやうに、外の女と一緒になつて幸福にお暮しになるに違ひありませんわ！でも……でもわたし、さうなつたらとても我慢が出来ません、自殺してしまふわ！ところで、あの時あなたが入つてゐらして、わたしあなたにお聲をかけると同時に、あの人呼び戻したでせう、その時、あの人があなたと一緒に入つて來た時、さも憎々しさうな輕蔑の眼つき、でふいとわたしを見たので、堪らなく腹が立つて來たのです——ね、覺えてゐらつしやるでせう？ わたし、あなたに叫んだでせう、ドミトリイ兄さんを人殺しと言ひ張つたのはあの人だ、あの人だけだ、つて！ わたし、あんな意地の悪いことを言つたのは、もう一度あの人を怒らせようと思つたからなのよ、實はね、あの人は一度もわたしに、兄さんが人殺しだなんて言つたことはなかつたのよ。反對に、わたしの方からあの人の兄さんが人殺しだと言ひ張つたのよ。ええ、何もかも、みな氣違ひじみたわたしのしたことなんだわ、公判の時の、あの忌々しい出來ごと、みんなわたしのせゐなのよ！ あの人は、自分は高潔な人間だ、といふことをわたしに示さうと思つて、若しわたしがあの人の兄さんを愛してゐるにしても、復讐や嫉妬で自分の兄さんを滅ぼさうと思ふやうな人間でないことを、わたしに證明しようと思つたからです、

それで法廷へ出たのですわ、何もかもわたしがもとですわ、わたし一人の罪ですわ！」

カーチャのかうした告白をはじめ聞いたアリョーシャは、彼女が現在、忍びがたい苦痛に悩まされてゐて、最も傲岸な心が、今やその誇りを無残に傷つけられ、悲哀のために全く征服されてゐるのだといふことを感じた、今、ミーチャが有罪と決まつてから、彼女は一生懸命に隠さうとつとめてゐたけれど、ああ、しかし、現在の彼女の怖ろしい苦痛の原因をいま一つアリョーシャは知つてゐた、けれど今もし彼女がすすんでそれを打ち明けるほど屈辱に甘んじたなら、かへつて彼の方が苦痛を感じたに違ひない。彼女は、法廷に於いて自分が『裏切つた』ことを苦しく思つてゐるのであつた、で、彼女の良心は、彼アリョーシャの前で涙と號泣と煩悶と跪拜とをもつて、謝罪しろと命じてゐる、それをアリョーシャは豫感したのである、しかし彼はその瞬間を思ふと怖ろしくなつたので、何とかして彼女の苦しみを柔らげたいと思つた、そのために、彼がわざわざもつて來た用件が益々きり出しにくくなつてしまつたのである、彼はまたミーチャのことを話し出した。

「大丈夫ですわ、大丈夫ですわ、あの人のことは御心配に及びませんわ！」彼女はまた鋭い頑固な調子で言つた「あれはみんな、ほんの一次的のものですわ、わたしあの人をよく知つてゐます、あの人の心の底も知りすぎるほど知つてゐます、安心して下さい、あの人はきつと脱走のことを承知するでせうから、それに、今すぐのことぢやないのでからね、あの人がその決心をするのに十分餘裕がありますわ、それまでには、イワン・フョードロキツも丈夫になつて、きつと自分ですつかり處理なさるでせう、さうなればわたしの用事がなくなる譯ですわ、御心配なさらなくてもいいわ、きつとあの人は承

知しますから、いいえ、もう同意なすつたのですわ、でも、あの女を断念なさるでせうかね？ あの女が懲役へやられる筈はないから、結局あの人が逃げるより他はないのです、しかしあの人は一ばんあなたを怖がつてゐるのです、あなたが道徳的の立場から、あの人の脱走に賛成なさらないだらうと、それを恐がつてゐるのです、でも、若しあなたの承認が必要だつたら、あなたも寛大に、それを許してあげなければなりませんわ。」とカーチャは皮肉につけ加へた。彼女はちよつと口を噤んでほほ笑んだ。

「あの人はね、あすこで」と、やがてまた彼女は話し出した、「讚美歌のことだとか、自分が負はなければならぬ十字架のことだとか、服務のことだとかを、かれこれ言ひ出したんです。イワン・フォードロキッチが、あの時分よくわたしにお話しなすつたのよ、あの人の話しぶりをあなたが御存じでしたらね！」カーチャは感に堪へられないやうに、突然かう叫んだ、「その話をしながら、あの人がどんなに可哀さうな人を愛してゐたか、又それと同時に、どんなにあの人を憎んでゐたか、とてもあなたには分かりませんわ！ それだのにわたしは輕蔑的な嘲笑をもつて、あの人の話と涙とを聞き流してゐたのです、ああ、賣女！ほんとにわたしこそ賣女ですわ！ あの人が熱病にかかつたのも、あたしの罪ですわ、でもあの罪を宣告された人は苦痛を忍ぶ覺悟が出来てゐるでせうか。」とカーチャは苛立たしげに言葉を結んだ、「あんな人に苦しむことが出来るでせうか？ あんな人間は決して苦しみはしませんわ！」

彼女の言葉には憎悪と輕蔑との不快な調子が含まれてゐた。それにしても、——彼女自身が、彼を裏切つたのではないか。『多分彼女はミーチャに對して悪いことをしたために、ある瞬間ミーチャを憎むのだらう』とアリオシヤは胸の中で考へた。彼はそれがただ『ある瞬間』だけであつてくれればいいと思つた、彼はカーチャの最後の言葉の中に、挑戦的な語調のあるのを感じたけれど、それには應じなかつた。

「けふわざわざあなたに来て戴いたのは、あの人を説教するといふ約束をあなたにしていただけだつたのよ、でも、あなたは、脱走することを不名譽な卑劣なこととお考へになるんですか？ また……何といひますかね……基督教の趣旨に悖るとでもお考へになるんですか？」とカーチャは一層傲慢な調子で言ひ足した。

「いいえ、そんなことはありません、僕は何もかも兄に言つてしまひませう、」とアリオシヤは呟やいた「兄はけふあなたに来て戴きたいと頼んでをりました、」と彼は彼女の顔をじつと見すゑて、突然さう言つた。彼女はぎくりとして、長椅子に腰かけたまま、身體を少し後ろに退いた。

「わたしに？……そんなことが出来るんですか？」彼女が顔を蒼白にして口籠つた。

「出来ませうとも、是非さうして下さらなきやならないんです！」アリオシヤは語氣を強めて急に活氣づきながら言つた「兄はいま是非あなたにお目にかからなければならぬんです、もしその必要がなければこんなことを持ち出してあなたを苦しめる譯はないのです、兄は病氣です、まるで氣違ひのやうになつてゐます。そして始終あなたに来てほしがつてゐます。あなたに會ひたがつてゐるのは決してあなたと和解するためではないのです、ただ、あなたがあすこへ行つて闕の上からでも顔をちよつと見せてやつて下さればいいのです。あの時以來、兄も随分かはりました。またあなたに數へきれぬほど迷惑

をかけたことも悟つてゐます。兄はあなたに許しを乞はうといふのではありません。『おれはとても許して貰へる人間ではない』と兄は言つてゐますから。ただ闕の上から顔を見せてやつて下さるだけでいいのです。」

「それはあんまり突然ですわ……」カーチャは口籠つた、「でもあなたがそんなことを言つてゐらつしやるやうな気がしてゐましたわ……あの人があたしに来てくれと言ふに違ひないと思つてゐましたの、しかし、とても駄目ですわ！」

「駄目なことにしても、是非さうして戴きたいのです。まあ考へて下さい、兄はあなたに悪いことをしたのに初めて気がついて、びつくりしてゐるんです、ほんとに初めて気がついたのです、實際それをこんな完全に悟つたことは、今までに一度もなかつたのです、もしどうしてもあなたが来て下さらなければ『おれは一生不幸な目を見るのだ』と兄は言つてゐます。お聞き下さい、兄は二十年の懲役に處せられてゐながら、尙どうかして幸福にならうと思つてゐるのです——可哀さうぢやありませんか？よくお考へになつて、是非、行つてやつて下さい、罪なくして滅びたものを訪問して下さい。」

「アリョーシャは思はず挑戦的な言葉を吐いた「兄には犯した罪はないのです、兄の手には血はついてをりません！ 今後に於ける兄の限りなき苦痛を柔らげるために今すぐ行つてやつて下さい、行つて兄を闇の中へ見送つてやつて下さい……闕の上だけでも立つてやつて下さい、あなたにはその義務があります、義務があります！」とアリョーシャはその『義務』といふ言葉を特に強く言つて口を結んだ。

「義務はあるでせうけれど……わたしには行けませんわ……」とカテリーナは吟るやうに言つた。「あ

の人はわたしを見るに違ひないのです……わたしにはそんなこと、とても堪りませんわ。」

「あなた方お二人の眼は、もう一度、會はなければなりません、若しあなたが今その決心をなさらなければ、あなたは一生涯、どんなにお苦しみになるかそれがお分かりですか？」

「一生涯、苦しむ方がましですわ。」

「いいえ、あなたは行く義務があります、行く義務があります。」とアリョーシャは命令するやうに力を籠めて再びかう言つた。

「だつて、なぜ今日でなければならぬのでせう、なぜ、今でなければならぬのでせう……わたし病人を捨てて行く譯にはゆかないのです……」

「少しの時間ぐらゐ構はないでせう、ほんの暫らくの間です、若しあなたが来て下さらなければ、兄は今晩にも熱病にかかつてしまひますよ、決して嘘は申しません、兄を可哀さうだと思つて下さい！」

「わたしこそ可哀さうだと思つて下さい！」とカテリーナは咎めるやうに言つて悲しさうに泣きくづれた。

「では来て下さるんですね！」彼女の泣くのを見ながらアリョーシャは執念深く言ひ張つた、「僕はこれから歸つて、あなたがすぐ来て下さるといふことを兄に傳へませう。」

「いいえ、いけませんわ、そんなことは決して仰つしやらないで頂戴！」とカテリーナは驚ろいて叫んだ「わたし行くには行きますけれど、前もつてそんなことは仰つしやらないで頂戴、たとへ行つたところで、中へは入らないのです……まだどうするか分からないのです……」

彼女の聲は途切れた。彼女は息も苦しきうであつた。アリョーシャは出かけようとして立ち上がった。

「それに、もし誰かに見つかつたら大變ぢやありませんか？」彼女はまたもや眞蒼になつて、突然ひくい聲で言つた。

「だから今、すぐ行つて載きたいのです、誰にも會ふ氣づかひがないのですから、今ごろだと誰も行つてやしないのは確かです、ぢやお待ちしてゐますから。」彼はかう念を押しておいてそのまま部屋を出て行つた。

II

嘘が本當になつた瞬間

彼はミーチャの寝てゐる病院へ駆けつけた。判決の下つた翌日、ミーチャは神経性の熱病に冒されて、町立病院の囚人室へ送られたのであつた。しかし、アリョーシャや、その他多くの人々ホフラーコフ
ヤリイザなどの請願に依つて、醫師のワルキンスキイはミーチャを、他の囚人たちと同室にすることを歩めて、特別の計らひで、以前スメルチャコフがはいつてゐた、小さい別室へ入れることにしたのであつた。その

廊下の突き當りに、番人がをつたのは事實であるが、窓は格子づくりになつてゐたので、この規則を無視した寛大な處置をとつてもワルキンスキイは何ら心配することがいらなかつた、實際、彼は親切で同情ぶかい青年であつた、彼はミーチャのやうな人間にとつては、いきなり強盜や、殺人者などの群れに伍することが、いかに辛いものであるかといふこと、ある程度までそれに馴れる必要があることをよく知つてゐた。親戚や朋友の訪問も、醫者や監視人は勿論のこと、署長の厚意に依つて非公式に許されてゐた、しかしミーチャを訪問するのは、アリョーシャとグルーシエンカだけであつた。ラキーチンも、二度ばかり面會を求めて來たけれど、ミーチャはワルキンスキイに頼んで、彼を通させなかつた。

アリョーシャは兄が患者服を着て寢臺に腰かけてゐるのを發見したが、何だか發熱してゐるとみえて、酔に浸したタオルを頭に載せてゐた。彼はとりとめもない眼つきで、入つて來たアリョーシャを眺めたが、その眼の中には、一種の恐怖の影が現はれてゐた。彼は裁判の日以來、何かしら非常によく考へ込むやうになつてゐた。時には半時間も全く黙り込んで、しきりに何か思ひ悩みながら、眼の前に入る人のことも忘れてしまふやうな風であつた。若し物思ひから醒めて口をきき初めても、何だか唐突の話振りをするのが常で、しかも、いつも必要のないやうなことを言ふのであつた。彼は苦しきやうな顔をして、時どき弟の顔を見つめた。彼はなぜかアリョーシャに會ふよりも、グルーシエンカに會ふ方が氣持が樂らしい風であつた。尤も彼は、彼女とは殆んど口をきくやうなことはなかつたが、それでも彼女の姿が見えると、急に彼の顔中が悦びに輝くのであつた。アリョーシャは無言のまま、彼の坐つてゐる寢臺へ並んで腰をおろした。實はミーチャは今日アリョーシャの來るのを待ち焦れてゐたのだが、何だ

か思ひ切つて訊ねる勇氣がなかつた。彼は、カテリーナが來訪を承知しようなどとは思ひもかけなかつたのである。それと同時に若し彼女が來なければ、何か大變なことがこるに違ひな起いと思つた。アリョーシャは兄の氣持を覺つた。

「トリフォンがね、」とミーチャは神經的に喋り出した。「ボリスイチがね、自分の家をすつかり打ち壊してしまつたといふ話だ、床を引き剥ぐやら、羽目板をばらばらにするやら、廊下を『落とし』てしまふやら、大變な騒ぎださうだよ。一生懸命にあの金をさがしてゐるんだ——僕があすこへかくしたと檢事が言つた千五百留の金をね、何でも家へ歸るなり、そんな氣違ひじみたことを始めたといふ話だ。しかし正義には勝てまい、詐欺師め！ 僕は昨日この番人から聞いたんだ、番人といふのは、あすこから來てゐるのだよ。」

「まあ聞いて下さい。」とアリョーシャが言つた。「あの人は來ますよ、尤も、いつか分かりませんがね、今日になるか、それとも二三日のうちに來るのか、僕には分かりかねますが、たしかに來ますよ、來ることは來ますよ。」

ミーチャは身慄ひをした。そして何か言はうとしたが、そのまま黙つてしまつた。この知らせが彼に怖ろしい効果を及ぼしたに違ひなかつた。彼は話しの顛末を聞きたくて堪らなかつたのであるが、それも訊ねるのが怖ろしかつた。若しカテリーナから、何か慘酷な、輕蔑的な言葉でも聞いたなら、それはこの瞬間、劍のやうに彼を刺し貫くに違ひなかつた。

「これはあの人がいろいろなことを言つた中の一部分です。それはきつと脱走つについて、兄さんの良

心を平和にさせようとしたためなんです。若し、イワン兄さんがその時まで全快しなかつたら、あの女が自分でその手配を決めることになつてゐるのです。」

「そのことはもうお前から聞いたよ、」とミーチャは考へ込みながら言つた。

「では、兄さんはそのことをグルーシエンカに言つたのですね。」とアリョーシャは言つた。

「言つたとも。」とミーチャは白狀した。「あの女は今朝は來ないだらう？」と彼は臆病さうに弟を見てあげて「晩までは來ないんだよ、昨日、僕が、カーチャがいろいろと氣を遣つてゐてくれることを彼女に話したらね、急に齒を喰ひしぼつて黙り込んでゐた、そしてただ『勝手にさしておくがいいわ！』と言つたきりだつたが、きつと脱走の重大なことが分かつたのだね。しかし僕は、それ以上苦しめることをしなかつた、どうせ今ごろは、カーチャが僕を愛さなくなつて、イワンの方を愛してるといふことを、彼女は悟つてゐると思ふんだ。」

「悟つてゐるでせうか？」アリョーシャは早速たづねた。

「或は悟つてゐないかも知れない。何しろ今朝は來ないだけのことだから、」とミーチャは慌てて再び説明した。「僕はこの女に頼んだことがあるのだ。お前も知つてるとほり、僕たち兄弟の中で、イワンが一番偉い男だ。僕たちは生きてゐても仕方がないが、イワンはまだまだ生きねばならぬのだ。大丈夫、きつと全快するよ。」

「どうでせうね、カーチャもイワン兄さんのことを心配してゐますが、兄さんの全快することを心から信じ切つてゐますよ。」とアリョーシャは言つた。

「それはつまり、イワンの死を信じてゐる證據なんだよ。それが怖ろしさに、全快するものと、無理に信じようとしてゐるんだ。」

「でも、イワン兄さんは、體質がしつかりしてゐますから、僕などからみても大丈夫全快すると思ひますよ」とアリョートシャは不安らしく言つた。

「うん、快くなるだらうよ、だがあの女は、イワンが死ぬものと思ひ込んでゐるんだ。あの女は随分いろいろな悲しみを持つてゐるんだからね……」

沈黙がつづいた。大きな不安がミーチャを悩ましてゐた。

「アリョーシャ、僕はグルーシャを非常に愛してゐるんだ、」彼は涙に充ちた聲を震はせながら突然かう言つた。

「でも、あの女を見さんと一緒にあちらへやらないでせうね。」と、アリョーシャはさつそく言葉を入れた、

「それからまだお前に言ひたいことがあるんだ。」急にミーチャは聲に妙な響を立てはじめながらつづけた。「若し僕が途中でか、あちらへ行つてからでも、鞭うたれるやうなことがあつたら承知しないつもりだ、僕はそいつを殺してそのために銃殺されるだらう、二十年間さういふことが續くんだからなあ！ ここでも僕のことを、もう『貴様』と言やあがる、看守たちがおれを貴様と言やがるんだ。僕はここに寝たまま夜どほし考へてゐたんだ。それでも覺悟が出来ないんだ！ まだあきらめ切れないんだ！僕は『讚美歌』をうたはうと思つたが、看守たちに荒つぽく扱はれるのがとても我慢がならない

んだ、グルーシャのことなら、どんなことでも我慢する……何でも我慢する……けれど、殴られることだけは別だ……しかしあの女はとてもあちらへ行くことを許されまい。」

アリョーシャはやさしく微笑んだ。

「ねえ兄さん、二度とは言ひませんから聞いて下さい、」と彼は言つた「僕もそのことを考へてゐたのです、でも兄さん、兄さんは僕が嘘を言はないことは分かつて下さるでせう。兄さん、あなたはまだ覺悟が出来てゐないんです、またそんな十字架はあなたには用がないんです、のみならずまだ覺悟が出来てゐないのにさうした殉教者の十字架は必要がないぢやありませんか。もし兄さんが實際、お父さんを殺したにも拘らず刑罰を拒否するのでしたら僕は悲しむでせう、しかし兄さんには罪はないのです。だからそんな十字架は兄さんには重すぎるのです。兄さんは苦痛によつて自分をいま一人の人間に作り直さうと思つてゐるのです。けれど僕の考へでは、たとへあなたがどこへ逃げていらつしやらうとも、その第二の人間のことを忘れないやうにしたら、それで兄さんはたくさんだと思ひます、兄さんがその大きな十字架を拒否するといふことは、ただそれ以上の義務を一生涯、感ずることになるだけです。そして、この氣持ちで始終ゐるといふことは、あなたがあちらへ行くよりも、一人の新しい人間を作るうへに遙かに役に立つのです。なぜなら、あちらへ行くと到底、がまん出来なくなつて、だんだん不平が出てきて、結局『おれは勘定を済した』といふやうになるからです。辯護士もそのことを言つてゐましたが、全くそのとほりです、誰にだつてそんな重荷が背負へるものですか、人に依つては到底、不可能な場合もあります……どうしても僕の考へを聴きたいといふのなら、まあいま言つた様なことですね、若

し兄さんが脱走したために外の人が、たとへば護送の將校とか兵卒が責任を負ふやうだつたら、僕だつて脱走を『許し』ませんよ。」アリョーシヤは笑つて「しかし、（これはここから三つ目の驛長がイワン兄さんに言つたのださうですが）若しうまく仕遂げさへすれば、決して、大問題にはならないだらうし、極く簡単な罰で済むだらうつてことです。無論、賄賂を使ふのは不正に違ひありませんが、そんなことを言つてゐる場合ではないのです。だから、イワン兄さんやカーチャが僕にさうしてくれと頼んだら、その時は出かけて行つて賄賂を使ふつもりです。僕は兄さんに本當の事をいふ義務があるのです。また僕は兄さんの行爲を裁くことは出来ません。しかし決して僕が兄さんの罪を認めてゐないことを信じて下さい。それに僕がこの事件で兄さんの裁判官になるなんてへんな話ぢやありませんか、まあこれでもう何もかも分かつたやうな氣がします。」

「でも僕は自分で自分を責めてゐるんだ！」とミーチャは叫んだ。「僕は脱走するつもりでゐる、しかし、これはお前に相談するよりも前から、ちやんと自分で決めてゐたことだ。ミーチャ・カラマゾフが、どうして脱走せずにもられるものか？　だが、僕は充分に自分を責める、そしてさうなつた曉には永久に、自分の罪障の消滅のために祈りを捧げよう、かういふと、何だかエズイタ教徒の言ひぐさのやうだね、さうぢやないか？　僕たちのやつてゐることは何だかそんなやうな氣がするぢやないか？」

「さうですね、」とアリョーシヤは靜かに微笑んだ。

「お前はいつも本當のことを言つて何ひとつ隠し立てをしないから、僕はお前が好きなんだよ！」とミーチャは嬉しさに笑つて叫んだ。「つまり僕は、わがアリョーシヤはエズイタ教徒だといふ尻尾を抑へ

たんだ、そのためには、存分にお前を接吻しなければならぬさ、さあ、それでは、その後を聞いてくれ。僕は自分の魂の残りの半分をお前に打ち明けよう、おれの到達した決心といふのはかうなんだ、それはね、たとへ僕が金と旅券を手に入れて、たとへば亞米利加へ逃げたとしても、それは決して悦びや幸福を得るために脱走したのぢやなくて、ただ、別な監獄へ行くのだと考へて、心を勵ましてゐるんだ、いや、シベリヤよりもずつと悪いよ！　アリョーシヤ、僕は前から亞米利加が嫌ひで、今でも厭でたまらないんだ、たとへグルーシエンカが僕と一緒に居たところと同じことだ、第一、あの女を見るがいい、あの女を亞米利加女と思へるか？　あれは露西亞女だよ、骨の髄まで露西亞女だよ。あれは、生れ故郷を想つて郷愁病を起こすだらう、また僕にしたつてあの女が僕のために苦しんだり、僕のために十字架を背負つてゐるのをたえず眺めてゐなければならぬ。ところが、あれは何の罪があるのだ、また僕にしたつてどうしてあの下等な亞米利加人とも一緒にやつて行けるものか、尤も、奴らは僕より善良な人間かも知れないが、しかし下等な連中だよ、僕はもう今から亞米利加が嫌ひなんだ！　たとひ彼らが驚ろくべき機械士であるにしてもおんなじことだ、彼らは僕の仲間ぢやない、精神的の友ではない、僕はロシヤを愛するよ。アリョーシヤ、僕はたとへ悪黨でも露西亞の神を愛する！　だが僕はあすこで死ぬことになるだらうね！」と彼は叫んだが、その眼は急に輝いた。彼の聲は涙に震へてゐた。

「で、僕の決心といふのはかうなんだよ、アレクセイ、」と彼は感動をおさへながら再び始めた。「僕がグルーシエンカと二人であちらへ着いたら、早速どこか遠い淋しい土地へ行つて、熊と一緒に百姓を始めるんだ、きつとまだ人里はなれた土地が残つてゐるだらうからな、あちらへ行くところか地平線の

彼方に、赤色印度人がゐるつてことだから、その最後のモヒガン族の國へ行つて、そこで僕とグルーシエンカが早速、文法の稽古にかかるんだ、勞働と文法——三年間はさうして暮すんだ、そして、二人とも英國人のやうに英語が達者になるんだ、英語を覚え込んだら、もう亞米利加なんかおさらばだ、そして今度は亞米利加人のやうな顔して、ロシアへ歸つて来るんだ、心配することはないよ——こんな小さい町へは歸つて来ないからね、僕らはどこかずつと離れた南か北の方へ身を隠すつもりだ、それまでには、僕もあの女も、かわるだらうし、醫者に頼めば顔へ疵かなんかを拵へてくれるだらう、あれほどの機械家だから、それくらゐのことは出来るだらうて！それが出来なければ片方の眼をくり抜いて髯を一アルシムも延ばすのさ、白い髯をさ（露西亞のことばかり思つてゐれば白髪にもなるだらうさ）、さうすれば誰だつて僕らを見知るまい。若し分かつたらまたシベリヤへやられる譯さ。僕は平氣だ、さうなれば運だからね、兎に角、こちらへ歸つて来たら、どこかの片田舎で百姓を始めるんだ。そして一生亞米利加人で押し通すんだ、そのかわり、自分の生れ故郷で死ぬことになるんだからね、これが僕の計畫なんだ、もう決して變更しないよ。お前、賛成してくれるかい？」

「賛成しますとも」とアリョーシヤは兄に反對するのを好まないでかう答へた。ミーチャは一分間ばかり黙つてゐたが突然かう言つた。

「時に彼奴らは裁判で何を仕組みやがつたんだ！何といふやり方だらう！」

「仕組まなかつて、やつぱり兄さんを罪に落したでせうよ。」アリョーシヤはかう言つて溜息をついた。

「さうだ、僕はこの町の連中に飽きられたんだよ！勝手にしやがれ。つくづく厭になつたよ！」と

ミーチャは輕蔑的につぶやいた。再びしばらく沈黙がつづいた。

「アリョーシヤ、さあすぐに、おれのとどめを刺してくれ！」と彼は急に叫び出した。「彼女はいますぐ来るか来ないか？ね、どうだ？あの女は何と言つたんだ？どう言つてたんだ？」

「來るとは言つてゐましたが、今日くるかどうかわかりません、あの人も苦しいんですからね！」と言つてアリョーシヤはおづおづと兄を見上げた。

「ふん、そりや當り前だよ、苦しくなくつてさ！アリョーシヤ、僕はそのことを考へると、氣が狂ひさうだよ、グルーシヤは始終僕を見てゐるんだから、よく心持が分かつてゐる。神よ、わたしの心を静めて下さい、わたしは何を望んでゐるのでせう？わたしはカーチャを求めてゐるんです、僕はそんなことを望んで本氣だらうか？これがカラマゾフ式のがむしやらかな暴慢さなのだ！いや僕は苦しむだけの資格のない人間だ、僕は悪黨だ、そのとほりだ！」

「ああ、あの女が來ましたよ！」

この殺那、カーチャが突然、闖の上へ姿を現はした。ややしばし彼女は、そこに立ちどまつて、途方にくれたやうな眼つきをしてミーチャを眺めてゐた。ミーチャは衝動的に立ち上がったが、その顔には驚愕の表情が漂つてゐた。彼の顔はさつと蒼白めたが、すぐにその唇の上におづおづした哀顔するやうな微笑みが浮んだ、彼は思はず我れを忘れて兩手をカーチャの方へ差し出した。それを見ると彼女は矢庭に彼の方へ駈け寄つた、そして彼女は男の兩手を取つて殆んど無理矢理に彼を寢臺にかけさせると、

自分もその上へ腰かけたが、尙もその手を離さず固く握りしめてゐた。幾度も二人は口を開かうとしてはすぐ止めてしまつて、再び黙りこんだまま奇妙な微笑をもつて顔を見交はしてゐた。かうして二分間ばかり経過した。

「お前、僕を許してくれたんだね？」たうとうミーチャは口を切つた、それと同時にアリョーシヤを顧みだが、その顔は悦びに慄へてゐた。「僕の訊いてゐることが分かるだろ？　ね、分かるだろ？」

「それだからわたしあなたを愛したのよ、あなたは本當にお心のやさしい方なんですもの！」とカーチャは突然、叫んだ。「わたしの許しなんか何の役にも立ちませんわ、それよりか、わたしこそあなたに許して頂くのが本當ですわ、でも、あなたに許して頂いても頂かないでも、あなたはわたしの心の中に永久の創痕として残るでせう、そしてわたしもやはりあなたの心の中にね、おなじくさうなければなりませんわ。」

彼女は息をつぐために言葉を切つた。

「いつたい、わたし何のために來たのでせう？」彼女はまた神経質に急ぎこんで話しはじめた、「あなたの脚を抱擁するためです、そしてこんなに痛いほどあなたの手を握りしめるためですわ。モスクワにゐたころ、いつもこんな風にあなたの手を握りましたわね、それからあなたがわたしの神であり喜びであることを、いま一度あなたに言ふためですわ。氣が狂ふほどあなたを愛してゐることを言ふためなのです。」彼女は苦しうに呻くやうに言つた。そして突然、むさぼるやうに男の手に自分の唇をおしつけた。彼女の眼からは涙がほとばしり流れた。アリョーシヤは無言のまま當惑したやうに突つ立つてゐた。

た。彼はいま眼前に見るやうなことが起きようとは少しも豫期してゐなかつたのである。

「ね、ミーチャ、戀は過ぎ去つてしまつたのね！」と彼女はまたはじめた「でも、わたしには過去がたまらなく戀しいのよ、このことをいつまでも覚えてゐて頂戴。けれど、いまほんの一分間だけ、出来る筈で出来なかつたことを實現させてもいいわね。」彼女は歪んだやうなほほ笑みを見せながら、かう咳くやうに言つて、再び嬉しうに男の顔に見入つた。「今あなたは他の女を愛していらつしやるし、わたしも他の男を愛してゐますわ。だけど、わたし永久にあなたを愛しますわ、またあなたも、わたしを愛して下さるわね、分かつて？　ねえ、さうでせう？　わたしを愛して頂戴、一生わたしを愛して頂戴！」彼女は殆んど嚇すやうに聲を震はせて叫んだ。

「僕は愛するよ……そしてお前、知つてるだろ、カーチャ」とミーチャは一こと一こと息を引きながら言つた「ね、知つてるだろ、五日まへのあの晩だつて僕はお前を愛してたちやないか……お前が卒倒してかつぎ出されたあの時さ……いや一生涯！　さうだとも、一生涯かわりやしないよ……」

かうして二人は殆んど無意味な氣違ひじみた言葉を互ひに囁きあつた。おそらくその言葉は眞實でなかつたかもしれないが、その瞬間だけは全く眞實であつた。彼ら自身も自分たちの言葉を他愛もなく信じ切つてゐた。

「ね、カーチャ、」ミーチャは突然叫んだ、「お前は僕が殺したと信じてゐるのかい？　いまは信じてゐないのが分かつてゐるが、あの時……あの、お前が證據陳述をしたとき……一たい、一たいあの時さう信じてゐたのかい？」

「あの時だつて信じてゐなかつたわ！一度も信じたことがないのだわ！わたし、あなたが憎らしくて、何とかしてさう信じようとしたの。陳述してゐる間はやつと自分を説き伏せて、さう信じてゐましたが、陳述がすむとすぐ、今まで信じてゐたことがどこか消えてしまつたのよ、これはほんとうのことよ。あ、さうさう、忘れてゐたわ、わたし今日ここへ来たのは、自分を罰するためだつたの！」と彼女は一瞬間前までの、あの愛情に充ちた調子とは打つてかわつた、全く別な調子で言つた。

「女よ、お前の苦しみは大きいだらう！」ミーチャは無意識にかう言ひ放つた。

「もう歸らせて頂戴、」彼女は小聲で言つた、「また來ますわ、今は堪らないほど苦しいのですから。」彼女はかう言つて席を立ち上がったが、不意に甲高い聲で、あつと叫んで後ろへよるめいた。グルーシエンカが音もなく部屋の中へはいつて來たのであつた。彼女が來ようなどとは誰ひとり思つてゐなかつた。カーチャは入口のところへ駆けよつた、そしてグルーシエンカのところへ行くと急に立ち止つた。彼女は白黒のやうに眞蒼になつて、殆んど嘔やくやうに靜かに言つた。

「どうぞ許して頂戴！」

グルーシエンカはちつと彼女を見つめた、そして、しばらくしてから憎惡に充ちた毒々しい聲で答へた。

「お前さんもわたしも兩方とも悪いんだよ！二人とも意地わるなんだもの！お互ひに、何を許すの許さないのつて言ふのさ？あの人を助けて頂戴、さうすればわたし、一生涯、恩にきるわよ。」

「お前は許さないと言ふのかい！」とミーチャは氣違ひじみた聲で答めるやうにグルーシエンカに言

つた。

「心配なさらなくつてもいいのよ、わたしこの人を助けてあげますわ！」カーチャはかう呟くとそのまま部屋から駆け出してしまつた。

「ぢや、お前はどうしてもあの女を許せないんだね、あの女の方からお前に許しを乞うてゐるのに。」ミーチャはまた悲痛な聲で叫んだ。

「ミーチャ、この人を咎めてはいけません、兄さんにはそんな資格はないんです！」とアリョーシヤが熱心に言つた。

「あの女の傲慢な唇があんなことを言つただけで、心から言つてるんぢやなくつてよ。」とグルーシエンカは憎々しさうに言ひ放つた「あの女が若しあなたを助けるやうなことになるば、わたしあの女にどんなことでも許してやるわ……」

彼女は何か抑制してゐるかのやうに口を噤んでしまつた。彼女はまだ平靜にかへることが出来なかつた。彼女は偶然にはいつて來たので、よもや、こんなとこに出喰はさうとは、思ひも寄らぬことであつた。

「アリョーシヤ、彼女を追つかけて行つてくれ！」ミーチャは急いで弟に向かつて叫んだ、「そしてあれに言つてくれ……何と言へばいいんだらうな……兎に角このまま彼女をかへさないでくれ！」

「夕方にまた出直して來ます、」アリョーシヤはかう言ひ残してカーチャの後を追つかけて行つた。彼は病院の塀の外でカテリーナに追ひついた。彼女は急ぎ足に歩いてゐたが、アリョーシヤが追ひつくや

否や、あわててかう言つた。

「いいえ、わたし、あの女の前で自分の罪を責めることが出来ません、わたしがあの女に許しを乞うたのも、どこまでも自分の罪を責めようと思つたからだけですわ、それなのにあの女は許してくれようとしないのです……でもわたし、あの女のさういふところが好きなのよ！」と彼女は不自然な調子でつけ加へたが、その眼は激しい憎悪に燃えてゐた。

「兄もよもやこんなことにならうとは思つてゐなかつたのです。」アリョーシャは呟くやうに言つた。

「兄は、あの人が來ないものと思ひこんでゐたんです……」
「それはさうでせうとも、だけどこんな話は止ませう。」と彼女が遮つた。「實はね、もうわたし、あなたと御一緒にお葬式に行けませんわ、花束だけは贈つておきましたの、まだお金には困つてやしないと思つてゐますけれど、もしいるやうでしたら、決してわたし見捨てやしないからと傳へて頂戴……さあ、わたしを歸らして頂戴、歸らして頂戴、あなたも行らつしやるのにおそくなるわ——夜禱の鐘が鳴つてゐますわ、さあどうか歸らして頂戴！」

イリユーシャの埋葬、石の傍の演説

實際、彼は遅刻した。一同は彼を待ちあぐんでゐたが、なかなか彼が來ないので、花で飾られたきれいな小さい棺を食堂へ運ぶことに決めてゐた。それは哀れな少年イリユーシャの棺であつた、彼はミィチャの罪が判決されてから二日たつて死んだのであつた。家の門まで來た時アリョーシャは、イリユーシャの學友であつた子供たちの叫び聲に出迎へられた。彼らはアリョーシャの來るのを、今か今かと待ち焦れてゐたので、今やつと彼の來たのを喜んだのである。彼らは皆で十二人ばかり集まつてゐた。彼らはめいめいに背囊やら、鞆やらを肩にかけてゐた。「僕の父ちゃんは泣くだらうから、父ちゃんの傍にゐてくれ」と、イリユーシャが死の床で彼らに言つたことがあるのを少年たちは覚えてゐたのである。コオリヤ・クラソートキンが一同の先頭に立つてゐた。

「ほんとによく來て下さいましたね、カラマゾフさん！」彼はアリョーシャに手を差し出して叫んだ、「この家は、怖ろしいことになつてゐます。ほんとに見るだけでも怖ろしいのです。スネーギレフさんは決して酔つばらつてはをりません。今日は一滴も飲まなかつたのは事實ですが、しかし何だか酔つ

ばらつてゐるやうな具合なんです……僕は大概、氣強い方ですが、これだけは怖ろしく思ひますよ。カラマゾフさん、お引き止めするやうですが、中へおはいりになる前に、ひとつあなたにお尋ねしたいことがあるんです。」

「どんなことです、コォリヤ、」と言つてアリョーシャが立ち止つた。

「いつたい、あなたの兄さんは、罪があるんですか、無いんですか？　あの人がお父さんを殺したんですか、それとも下男ですか？　あなたに聞けば間違ひはないでせう、僕はこの四日の間そのことを考へて夜も眠られなかつたんです。」

「下男が殺したんです。兄には罪はありません。」とアリョーシャが答へた。

「僕もさう言つてゐるのです！」とスムーロフが叫んだ。

「ぢや、あの人は正義のために、無辜の犠牲として滅びた譯ですね。」とコォリヤが叫んだ。「でもあの人は幸福です！　たとへ滅びても、あの人は幸福です、僕はあの人が羨ましい位なんです！」

「何を言ふんです、どうしてそんなことがありますか、一體、どういふ譯で？」とアリョーシャは驚ろいて叫んだ。

「ああ、出来ることなら僕もいつか眞理のために自分を犠牲にしたいと思つてゐるんです！」とコォリヤは感激して言つた。

「しかし、こんな事件では堪りませんよ、こんな不名譽な、こんな怖ろしい事件では堪りませんよ！」とアリョーシャが言つた。

「勿論……僕は、全人類のために死にたいと思つてゐるんです、不名譽なんてことは、どうだつて構はないんです、どうせわれわれの名前は消えて行くのですから。僕はあなたの兄さんを尊敬します！」
「僕だつてさうです！」と不意に群れの中から叫んだ少年があつた。それはかつてトロイの建設者を知つてゐるといつた例の少年で、今度もその時と同じく耳元まで牡丹のやうに眞赤になつた。

アリョーシャは部屋へはいつて行つた。イリニョーシャは両手を重ね、眼を閉ぢて、白い紗で飾られた空いろの棺の中に横はつてゐた。その顔はやつれてゐたが、殆んど變つてゐなかつた。そして不思議にも死體からは殆んど臭氣が發しなかつた。顔の表情は眞面目で、何か考へ込んでゐるやうであつた。胸に組んでゐる手が殊に美しくてさながら大理石で刻まれたやうであつた。その手には花束が持たされ、又棺の内も外も花が飾られてあつた。それは、今朝はやく、リーザ・ホフラコーワから届けられたものであつた。その他にもカテリーナ・イワノヴナから贈つて來た花もあつた。アリョーシャが扉を開けた時、二等大尉は慄へる手に花束を持つて、わが愛兒の上にそれを振り撒いてゐた。彼はそこへはいつて來たアリョーシャには眼もくれなかつた。彼は誰をも見ようとはしなかつた。狂氣のやうに泣きながら、愛兒の顔をもつと間近かに見ようとて、不自由な脚で立たうと骨折つてゐる『おつ母さん』——自分の妻——をさへ見ようとしなかつた。ニーノチカは椅子にかけたまま少年たちの手で棺のすぐ傍へ運ばれてゐた。彼女もまた、棺に頭をおしつけて靜かに泣いてゐるのであつた。スネーギレフの顔は元氣さうな風には装つてゐたが、どこか苛々して怒つてゐるやうな様子であつた。彼の動作や口走る言葉も、何となく狂氣じみてゐた。『おとつつあんや、可愛いおとつつあん！』と彼はイリニョーシャを見つめな

がら絶えず叫んでゐた。これはイリュージョンがまだ生きてゐる時分から、愛情を現はす言葉として、彼のことを『おとつあん』と呼ぶ習慣がついてゐたからである。

「お父さん、わたしにも花をひとつ頂戴、あの子の手にある白い花をひとつ取つてわたしに頂戴！」
氣のふれた母様は涙ながらにかう訴へてゐた。イリュージョンの手にある小さい白薔薇が彼女の氣に入つたのか、それとも紀念にするために、その花を取つておきたかつたのか、いづれにしても、彼女は堪らななさうに身もたえしながら花の方へ手を差し伸ばした。

「誰にもやれないんだ、何にもやるものか！」とスネーギレフは冷酷に言ひ放つた、「あれはお前の花ぢやないんだ、みんなあれのだ！ 何もかもあれのだ、お前のものは一つも無いんだ！」

「お父さん、お母さんに花をあげて頂戴！」とニノチカが涙に濡れた顔をあげて言つた。

「いや、なんにもやれない、お母さんには一番やりたくないんだ！ お母さんはイリュージョンを可愛がらなかつたぢやないか、イリュージョンの小さい大砲を取り上げた時も、イリュージョンは黙つてそれをお母さんにやつたんだ、」二等大尉はイリュージョンが母親に大砲をやつた時のことを思ひ出してわつと泣きくづれた。哀れな狂女は両手の中に顔を埋めて靜かに涙に浸つてゐた。もう棺を出す時刻が來たけれど、父親がいつまでもその傍を離れようとしなかつたので、少年たちはその周圍にかたまつて、それを擔ぎにかかつた。

「わしは、これを墓地へ葬りたくない！」と不意にスネーギレフが叫んだ、「わしは石の傍へ葬つてやりたいんだ、わたしたちの石の傍へ！ イリュージョンがさうしてくれと言つてゐたからなあ、擔ぎ出して

貰つちや困る！」

彼は三日前からわが子を石の傍へ葬るつもりだと言つてゐたが、アリョーシヤやクラソートキンや、家主の女主人や、その妹や少年たちが、それに反對してゐたのだ。

「不淨なる石の傍へ埋めるなんて、なんといふ考へだらう、首を縊つて死んだか何ぞのやうに、」と家主の老婆は手きびしく言つた。「墓地の中にちやんと場所が取つてあるのに、そこへ埋めて貰へばあの子も祈りをあげて貰へる譯だ。街道からは讚美歌が聞こえるし、助祭さんが、一字一字はつきりと讀經をするから、それがしじゆうあの子の耳にも届くわけだ、まるで自分の墓の上でお經をあげてもらつてゐるやうなものぢやないか。」

二等大尉はたうとう手を振つて『ぢや、どこへなと持つて行きなさい！』とでも言ふやうに、絶望的な身振りをした。少年たちは棺を擔ぎあげた。母親の傍を通る時、暫らく立ち止まつて、彼女がイリュージョンに告別の出来るやうに、棺をおろした。ところがその尊い小さな顔を見ると、この三日の間ただ遠方からそれを見てゐただけなので、彼女は全身を慄はして、その白髪頭を痙攣的に棺の上で振り始めた。

「お母さん、イリュージョンに十字を切つて祝福してやつて頂戴、接吻してやつて頂戴。」とニノチカが母親に向かつて言つた。然し、彼女は相變らず、自動人形のやうに頭を振つてゐるばかりであつた。そして非常な悲しみのために顔を歪めながら、一ことも物を言はず、掌で胸を敲き始めた。棺が擔ぎ上げられて運びはじめられた。ニノチカは、棺が自分の傍を通るとき、死んだ弟の唇へ最後の接吻をし

た。家の外へ出た時、アリョーシャは、家主の老婆に向かつて、後に残つた人たちの世話を頼んだ。しかし、アリョーシャの言葉が終らないのに相手はかう遮つた。

「分かつてゐますよ、あの人たちのことは引き受けました。わたしたちも基督教徒ですからね。」さう言ひながら彼女は泣いてゐた。棺を會堂まで運んで行くのは、それほど遠くもなかつた。三百歩もないくらゐであつた。晴れ渡つた静かな日で少し凍えきみであつたが、大したことでもなかつた。式の開始を告げる鐘はまだ鳴つてゐた。スネーギレフは心もそぞろにあたふたと駈けながら棺の後を追つて行つた。彼は古ぼけた短かいまるで夏外套のやうなものを著て、鏝廣の古いソフト帽を手に持つてゐた。彼は何か深い思案にでも暮れてゐるやうで、時どき思ひ出したやうに手を差し出して棺の頭を支へようとして、擔ぎ手の邪魔をしたり、また棺の側を駈け廻つて、そこへわり込まうとした。花がひとつ雪の上へ落ちたが、彼はその花を失ふのが何だか重大なことのやうに早速かけ寄つてそれを拾ひあげた。

「あ、パンを、パンを忘れて来たよ。」彼はひどく狼狽したやうに叫んだ。しかし少年たちは早速、彼に向かつて、彼がちやんと忘れずにパンをポケットへ入れて来たことを注意した。彼はいきなりそれを取り出して見て、やつと安心したやうであつた。

「イリニョーシャがわしにさういつたのです、イリニョーシャがね。」彼は不意にアリョーシャをかへりみて説明した。「わしがある晩、あれの傍に腰かけてゐますとね、あれは不意にかう言ふんです。『父ちやん、僕の墓を埋めるとき、その上にパン屑を撒いて雀がたくさん降りてくるやうにして下さい、僕は雀の聲を聞いたら自分ひとりぼつちでないことが分かつて、愉快になりますから』つてね。」

「それは善いことです」とアリョーシャが言つた。「たびたび持つて来てやるといいですね。」

「毎日です、毎日です！」と二等大尉は何だかひどく活氣づいてさう口早やに言つた。

やがて、一同は會堂へ着いて棺をその中央へ降した。少年たちはそれを取り圍んで、讀經の濟むまで肅然と立つてゐた。それはどちらかといふと、古ぼけたみすぼらしい會堂で、聖像はどれもこれも聖飾ひとつつけられてなかつたが、かうした會堂の方が、祈りをするにはふさはしいものである。彌撒の間はスネーギレフも多少静かにしてゐたが、時々前後不覺になつて、何だかそはそはと心配してゐるやうであつた。一度は、棺の傍へ駈け寄つて、蔽ひや、花輪の位置を直したかと思ふと、今度は燭臺の蠟燭が一本たほれたのを見つけて、早速走り寄つて、それを立て直したが、おそろしく無器用な手つきで時間が長いことかかつた。それから、やがて、すつかり落ちついて、鈍い不安と途方に暮れたやうな表情をして靜かに棺の傍に立つてゐた。使徒行傳が讀みあげられた後で、彼は早速、隣にゐたアリョーシャに向かつて、使徒行傳の讀み方が正則でなかつたと囁やいたが、その理由は説明しなかつた。大天使の讚歌が始まると、彼は一緒になつてうたつたが、歌ひ終らぬうちに、その場に跪いて、額を石疊の上に押しつけて、永い間そのまま平れ伏してゐた。遂ひに埋葬の祈禱になつて、蠟燭が一本わたされると、正氣を失つた父親はまたしても齷齪した。物悲しげな埋葬の祈禱は彼の魂を感動せしめた。彼は突然、身體を縮めたやうになつて小刻みにしやくりあげて泣き出した。やがて人々は死者に最後の告別をして、棺の蓋をしようとしたが、彼は亡き愛兒の姿を隠させまいとするやうに、イリニョーシャの死骸の上に覆ひかかつて、抱き緊めながら、その唇を、むさぼるやうに執念く接吻しはじめた。人々はやつと

のことで彼が階段から降りて来るやうに彼を説き伏せた。しかし、不意に彼は、手を伸して棺の中から幾つかの花を掴み出した。彼はその花を見入つてゐたが、何か新しい考へが浮んで来たやうにみえた。そして、そのために暫らくは自分の悲しみを忘却したらしかつた。やがて彼は次第に物思ひに沈んでいつて、棺が擔ぎ上げられて、墓の方へ運ばれて行くのを妨げようとしなかつた。この墓場は、會堂のすぐ傍の柵の中にあつた。最も高價な區域であつた。その代價はカテリーナ・イワーノヴナが拂つたのである。型のやうな儀式が濟むと墓掘りたちが幾人か棺をおろした。スネーギレフは手に花を握つたまま、墓穴の上へ低く身を屈めたので、少年たちはその上衣を掴んで引き戻した。しかし彼は何事になされつつあるか、よくは分らないものやうであつた。墓穴へ土がかけ始められると、彼は急に心配さうに、その落ちてゆく土を指さして何か言はうとしたが、誰ひとり彼の思つてゐることを察することが出来なかつた。彼は急に温順しくなつた。やがて人々に教へられて、パンを取り出すとそれをひきちぎつては墓の上に撒き始めた。『小鳥たちよ飛んで来い、雀たちよ飛んで来い!』と彼はそれはそはした調子で呟いた。一人の少年が彼に向かつて、手に花を持つてゐては、パンを千切るのに面倒だらうから、ちよつとの間たれかに持つてゐて貰つたらどうかと言つた。しかし彼はさうしようとはせず、何だか人々が、その花を取り上げようと思つてでもゐるかのやうに、急に花を警戒し始めた。それから彼は墓を見てゐたが、もう何もかも出来上がつてパンも撒いてしまはれたのを確めると、急に落付き拂つて家の方へ歩き出した。だんだん歩調が早くなつて、終ひには駆け出さないばかりに急ぎ足になつた。少年たちとアリオーシャがその後からついて行つた。

「この花はおつ母さんにやるんだ、おつ母さんにやるんだ! おれはおつ母さんに恥を掻かしたからな!」彼はかう不意に叫び出した。誰かが彼に寒いから帽子を被つてはと注意したが、彼は何だか怒つたやうにその帽子を雪の中へ投げつけて『帽子はいらない、帽子はいらない!』と言ひ出した。スミーロフがその帽子を拾つて後からついて行つた。少年たちは一人残らず泣き出したが、コオリヤと例のトロイの建設者を知つてゐる少年とは殊に烈しく泣いてゐた。大尉の帽子を持つたスミーロフもおいおい泣いてゐたが、彼は駆け出さないばかりに歩きながらも、ふと道端の雪の上に落ちてゐた赤煉瓦の破片を拾つて、さつと飛びすぎる雀の群れに投げつけるだけの餘裕はあつた。むろん、雀にはあたらなかつた。彼はまた泣きながら走りつづけた。丁度、道の半ばまで来た時、スネーギレフは急に立ち止つた。そして何か思ひ當つたといふ風に、急に會堂の方に向き直つて、今見すてて来た墓の方へ駆け出した。しかし少年たちは直ぐ追ひついて、四方八方から彼を捕へた。すると彼は、擲り倒されたかの如く雪の上にくつたりと倒れて、腕いたり、咽び泣いたり、號泣したりして、『おとつあんや、イリユーシエチカ、可愛いおとつあんや!』と叫びはじめた。アリオーシャとコオリヤとは彼を慰めたり、なだめたりして彼を抱き起こさうとした。

「大尉さん、もうお止しなさい、勇士といふものは我慢が肝腎です。」とコオリヤが呟いた。

「花が碎けてしまひますよ。」とアリオーシャが言つた。「おつ母さんが花を待つてゐますよ、あなたがさつき一つもあげなかつたから、泣きながら坐つてゐるに違ひありませんよ。イリユーシヤの小さい寢臺がまだそのまま残つてゐますよ……!」

「さう、さう、お母さんのそこへ行つてやらなきや。」とスネーギレフは不意に思ひ出した。「寢床も片づけられてしまふ、片づけられてしまふ！」彼はもう本當に片づけられてしまふものやうに、びつくりしてかう言ふと共に、立ち上がつて家の方へ駈け出した。しかし、家までは極く近かつた。で、彼らは一緒に家へ着いた。スネーギレフは慌てて扉を開けながら、つい先刻、あんなに呶鳴りつけた妻に向かつてかう呼びかけた。

「おつ母さんや、大事なおつ母さんや、イリニシエチカがお前に花をよこしたよ、可哀さうに、お前は脚が悪いんだからなあ！」彼はかう言つて、たつたいま、雪の中で轉んだ時、彼は隅つこの小さい寢臺の傍にイリニシエチカの可愛らしい靴が置いてあるのをみとめた。それは、家主の老婆がきちんと揃へておいたものであつた。その古ぼけた、つぎはぎのあるみすぼらしい硬ぼつた靴を見るなり、彼は両手をかざして、その傍へ駈けつけ、膝まづいて靴を片足にとりあげた。そして、自分の唇をそれに擦りつけて『おとつあんなや、イリニシエチカ、可愛いおとつあんなや、お前の足はどこにあるんだ？』と呼びながら貪るやうにそれに接吻しはじめた。

「お前さんは、あれをどこへ連れて行つたのだね？」どこへ連れて行つたのだね？」氣の狂つた女は引き裂くやうな聲で喚いた。ニノチカも急に泣き出した。コオリヤは部屋を出て行つた、少年たちもその後に従つた。やがてアリオシヤも外へ出た。

「あのまま泣かしておくより仕方がない。」と彼はコオリヤに言つた。「慰めても今はとても駄目です、

暫く待つて、又ひつ返しませう。」

「さうです、とても駄目です、何しろ大へんです。」とコオリヤは同意した。「一たいどうしたんでせうね、カラマゾフさん、」彼は誰にも聞かえないやうに、急に聲を落して言つた。「僕はたまたま悲しい氣がしますよ、もう一遍イリニシヤを生き返へらせることが出来るなら、そのためには世界ぢゆうの何物を捨ててもいいと思ひます。」

「ああ、僕もさう思ひます。」とアリオシヤも言つた。

「あなたはどう思ひます、カラマゾフさん、今晚この家へ来る方がいいでせうか？ あの人はまだ酔つばらふやうなことがないでせうか？」

「どうも酔つばらひさうです、僕たち二人で一緒に來ようぢやありませんか、そしておつ母さんやニノチカといつしよに一時間もをればたくさんです、僕たちがみんなで大勢おしかけて來たら、またいろいろなことを思ひ出させるやうなものですからね。」とアリオシヤが注意した。

「いま、家主のおかみさんが、あの人たちのために、食卓の用意をしておますよ——今夜はお葬ひのお食事やなんかがあるのです、坊さんも來るのでせう、そんな時に行つてもいいでせうかね、カラマゾフさん。」

「勿論、行つたらいいでせう。」とアリオシヤは言つた。

「それにまた奇態ぢやありませんか、カラマゾフさん、何しろあんな悲しみのあつた後で、揚煎餅フリンを出すなんて、われわれの宗教から言つても不自然なことぢやありませんか。」

「それから、鮭も出てゐますよ。」とトロイのことを知つてゐた少年が大きな聲で言つた。

「カルタシヨフ君、僕は最も眞面目に願ひしますがね、二度とそんな馬鹿げたことを言はないで下さい。殊に誰も君に話してゐないので、君がこの世にゐるか、ゐないかも知りたいと思つてゐないやうな時に、口出しするのは止して下さい！」とコオリヤは苛々しく遮つた。少年は顔を眞赤にしたが何とも返事が出来なかつた。その間、彼らは小徑をぶらぶら歩いてゐたが、不意にスミロフが叫んだ。

「あれがイリユーシャの石です、あの下へ葬りたいと言つたんです！」

彼らはその大きな石の傍に立ち止つた、アリヨシヤはその石を見た、すると急にいつかスネーギレフから聞かされた話——イリユーシャが泣きながら父親にすがりついて、『父ちゃん、父ちゃん、あの男はほんたうに父ちゃんを酷い目にあはしたのね！』と叫んだといふすべての光景が彼の眼の前に浮び出て來た。と、急に何か咄嗟の衝動が彼の頭に湧いたやうにみえた。彼は眞面目な嚴肅な表情をもつて、イリユーシャの學友たちの晴々した快活な顔を見廻しながら、だしぬけにかう言つた。

「皆さん、僕はただ一ことだけ皆さんに言ひたいことがあるんです、今この場で、」

少年たちはアリヨシヤを取り巻いて佇んでゐたが、早速まぢ構へるやうな表情を眼に浮べながら、ちつとアリヨシヤを見つめた。

「皆さん、僕たちは間もなくお別れになるのです、僕が二人の兄と一緒にゐるのも、もうあと暫くです、一人の兄は追放されようとしてゐますし、今ひとりの方は瀕死の床にたつてゐます、だが僕は間もなくこの町を去ります。多分ながい間かへつて來ないだらうと思ひます。で、僕たちはお別れしな

やならないのです。だからここでイリユーシャの石の前で、第一に決してイリユーシャを忘れないこと、また第二に、決してお互ひに忘れないことを約束しようぢやありませんか、また今後、一生の間に、どんなことが起こらうとも二十年間も會ふ機會がなからうとも、僕たちは常にあの哀れな少年を葬つたことを記憶に留めようではありませんか、皆さんも覚えてゐるでせう、あの少年は一度橋の傍で石を投げつけられたけれど、後で皆から愛されるやうになつたのです、彼はあつばれな少年でした。親切で勇敢な少年でした。彼は父親の名譽を感じ、父親の甚だしい汚辱を憤り、父親のために奮然として起つたのです。皆さん、第一に僕たちはその事で彼を一生涯忘れないやうにしようぢやありませんか。だから、たとひどんな重要な仕事に従事してゐようとも、又どんな名譽を博してゐようとも、どんな大きな不幸に沈湎してゐようとも、兎に角いかなる時にも、かつてこの町で僕たちがお互ひに共同して、お互ひの善良な感情で結びつけられながら、あの憐れな少年を愛することによつて、僕たちが實際以上に立派な人間になつたことを、決して忘れないやうにしませう。可愛らしい小鳩たちよ——どうか皆さんをかう呼ばせて下さい、なぜなら、今かうして皆さんの善良な、愛らしい顔を見てゐると、それがあの黒みがかつた空いろの鳥を想ひ出させるからです、——可愛い皆さん、皆さんは僕の言ふことが分からな

いかも知れませんが、何となれば僕の言葉は往々にして不明瞭なところがあるからです。それでも諸君はいつかは僕の言葉を想ひ出して、それに同感して呉れる時があるでせう。善良な想ひ出の數々、殊に幼年時代の家庭に於ける想ひ出ほど、高尚で力強く、將來の生活を裨益するものは他に一つもありません。皆さんは教育上のことを色々人から教へこまれますが、然し幼年時代から培はれた善良な神聖

な想ひ出こそは、おそらく最上の教育です。若し一生の中にさうした記憶を數多くたくはへた人があつたら、その人は死ぬまで安全です。また若し只一つでも善良な記憶を胸の中に持つてをれば、それだけでもいつか僕たちは救はれるのです。若しかすると僕たちだつて、今後に於いて罪惡を犯すやうになるかも知れませんが、悪しき行ひをせずにおられなくなるかも知れませんが、他人の涙を見て嘲笑するかも知れません、先刻コオリヤ君が『僕は全人類のために苦しみたい』と言ひましたが、僕たちはさうしたことを言ふ人を意地悪く嘲笑するやうになるかも知れませんが、無論そんなことがあつてはなりません、若し僕たちがそんな悪人になつたとしても、僕たちがかつてイリュージョンを葬つたことや、臨終の前に彼を愛した事や、今この石の前でお互ひが相集つて友達として語りあつたことを回想した時に、——假りに僕たちが最も冷酷な、最も輕薄な人間になつてゐるとしても、少くともこの瞬間に善良で親切であつたといふことを心の内で嘲笑するやうな勇氣はないでせう！ それどころか、この一つの追憶が僕たちを大なる罪惡から救ひ出してくれるでせう、そして僕たちは過去を顧みて、『さうだ、おれもあの當時は善良で勇敢で潔白であつた！』と言ふことでせう、尤も肚の中ですりと笑ふのは構ひません。人は往々にして善なるもの親切なるものを見て笑ひたがるものです。しかしそれは輕薄な心の仕業にすぎません。けれど皆さん、僕は誓つて言ひますが、たとひ笑つても直ぐに心の中で、『いや笑ふのはよくない、なぜといつて、これは笑ふべきことではないから、』と、かう言ふに違ひありません。』

「その通りです、カラマゾフさん、僕にはあなたの言はれることがよく分かります！」コオリヤは眼を輝かして叫んだ。

少年たちは感激してゐた。彼らも亦、何か言ひたさうであつたが、無理に抑制して、熱情的な感動的な眼で演説者を見つめてゐた。

「僕がこんなことを言ふのは、われわれが悪い人間になることを怖れるからなのです、」とアリョーシヤはつづけた、「けれど僕たちが悪い人間にならなければならぬといふ理由は少しもないではありませんか、さうでせう、皆さん？ で、僕たちは先づ何より第一に善良でなければなりません、次ぎに正直でなければなりません、その次ぎに僕たちはお互ひを忘れてはならないのです。僕はこのことを繰り返して言ひます。僕自身は決して皆さんを一人も忘れないことを斷言します。僕は、今僕の方を向いてゐる顔の一つ一つを、たとひ三十年経つてからでも想ひ出すことが出来るでせう。さつきコオリヤがカルタシヨフ君に向かつて僕たちが同君のゐるかゐらないかを問題にしてゐないと言ひましたが、僕は決してカルタシヨフ君を忘れることが出来ないのです。又カルタシヨフ君が今はもう、トロイの建設者のことを言つた時のやうに、ちつとも赧い顔をししないで、その愉快さうな、愛らしい、善良な眼で僕を見てゐたことを、決して忘れることが出来ないです。皆さん、親愛なる皆さん、僕たちは皆、イリュージョンのやうに寛大勇敢にならうではありませんか、コオリヤの如く賢くて勇敢で寛大にならうではありませんか（尤もコオリヤは成長の暁にはもつと賢明になるでせう）、また僕たちはカルタシヨフ君のやうに、羞かみやではあつても精巧で愛らしくならうではありませんか、しかし僕はこの二君のことだけを言つてゐるではありません！ けふからは皆さんのすべてが快に親しいのです、僕は皆さんを残らず自分の心の中へ入れませう！ ああ、しかし誰が一體、僕たちをかうした親切で善良な感情で結びつけてく

れたのでせう、僕たちが生涯記憶するやうな、又記憶に留めようと欲するやうな感情で結びつけたのは？。それはイリユーシャ君を描いて他にないので。ほんとに同君は善良な少年でした、愛すべき少年でした、僕たちにとつて永久に貴い少年でした！僕たちは決して彼を忘れてはなりません、希くば今後永遠に彼に對する善き記憶がわれわれの胸に存続せんことを！」

「さうです、さうです、永遠に、永遠に！」と、少年たちは何れも感動の色を満面に湛へて、聲高らかに叫んだ。

「あの顔も、着物も、惨めな靴も、小さい柩も、あの罪深い不幸な父親も、また彼が父のために勇敢にも唯一人で全級に反抗したことを憶えてゐませう！」

「憶えてゐませう！」

「憶えてゐませう、憶えてゐませう！」と少年たちが口々に叫んだ、「彼は實に勇敢だつた、彼は實に善良だつた！」

「ああ、どんなに僕は彼を愛したらう！」とコオリヤが叫んだ。

「ああ、皆さん、ああ、親愛なる友達、決して人生を怖れてはなりません！何でも善いこと正しいことをした時、人生がどんなに美しいものに思はれるでせう！」

「さうです、さうです、」と少年たちは感激のあまり繰り返へした。

「カラマゾフさん、僕たちはあなたを愛します！」と誰かがこらへ切れなくなつて叫んだ。どうやらカルタシヨフの聲らしかつた。

「僕たちはあなたを愛します、僕たちはあなたを愛します！」と一同が相槌を打つた。多くの者の眼には涙が光つてゐた。

「カラマゾフ萬歳！」とコオリヤが狂奔して叫んだ。

「希くばかの亡き少年の記憶の永遠に存続せんことを！」アリョーシャは感動のあまり再び付け加へた。

「永遠に！」と少年たちが再び調子を合はせた。

「カラマゾフさん、」とコオリヤが叫んだ、「われわれは皆、再び死から甦つて、またお互が誰にでも、イリユーシャにでも會ふことが出来る」と宗教では教へてゐますが、あれは本當でせうか？」

「きつと甦ります、そしてきつと再び相會うて、悦び楽しみながら、經て來たことを互ひに語りあふのです！」と、アリョーシャは半ば笑ひながら、半ば感激して答へた。

「ああ、さうなつたらどんなに素敵でせう！」と、コオリヤが口走つた。

「では、これで話は止して、これからお非時に参りませう、揚煎餅だつて心配せず食べればいいんです。あれは古い古い昔からの習慣で、その中には美しい點もあるのです、」と、アリョーシャは笑つて、「さあ、行きませうよ！さあ手をつないで行きませう。」

「そして永久にさうしませう、一生のあひだ手に手をとつて行きませう！カラマゾフ萬歳！」コオリヤが歡喜のあまり再び叫ぶと、少年たちももう一度その聲に調子を合はせた。

「カラマゾフの兄弟」解題

「カラマゾフの兄弟」にとりかかったのは、既にドストイェフスキイが晩年の圓熟境に入り、死の年を距たること僅かに三年餘といふ時代であつた。

一八七八年三月十六日のミハイロフ宛の手紙には次のやうな一節が見えてゐる。

「小説の腹案を立てて、さつそく大きな長篇にかかりましたが、その中には他の人物の間に澤山の子供が出て來ませう。それも先づ七歳から十五歳くらゐまで。とにかく澤山の子供が出て來る筈……しかし、あなたの方のお方の觀察が私にとつては貴重なものになります……子供について御存じのことをお知らせ願ひます……
…(事件、慣習、應答、言葉、ほんの一寸した言葉、容貌、血族關係、信仰、惡戯、無邪氣、天性、教師、羅句語等々要するに御承知のことを……)」

嘗て「ディカニカ近郊農園夜話」の作者が、殆んど名を成してゐない頃に驚嘆するほど精密に、郷里の民俗を調べたやうに、彼もまた極めて周到なる用意をもつてこの大作にとりかかつたのである。もとより、我國にもかやうな例は乏しくないが、やうやく近年に至つてソヴェトにおいて發表されたこの大作●ノオトに接するとき、私たちは先づこの作家が、社會的にも活動しながら、いささかも創作力は衰ふところなく、絶えずこの大作に心をよせてゐた氣力に驚嘆する、作家にあつては、「十年苦心の名作」といふやうな時間的冠詞は不必要なことであり、作

品そのものの價值が問題であることは充分に承知しながらも、ドストイェフスキイの場合、詳細な年譜によつて當時の消息を知るとき、私はいつ知らず三嘆してゐる。

今は彼がこの名作に著手したのも、恐らくは右の手紙を認めた頃と推定され、邦譯にしてこの書の一千頁を超えるほどの未發表のノオトも昨一九三五年に初めて世に示され、いよいよ「カラマゾフの兄弟」についての問題は複雑を極めることとなつたが、それらのことは他日にゆづり、ここには文字通りの解題めいたことを三卷(上中下)に互つて記しておかう。

一八七八年に著手されたこの小説が初めて發表されたのは一八七九年の初めであつた。それが一應の終りを告げたのはその翌年の秋で、十一月八日附のリュビーモフ宛の手紙に、「小説が終りましたよ。このために三年も仕事をしておいた譯です。……私はもう二十年ほど生きてゐて、物を書きたい。」といった時から彼は三箇月とも生きてゐなかつたのである。

それにしても、何よりも先に、この小説において作者が示さうとしたものが何であつたかを考察することが必要となつて来る。

最初に擧げたミハイロフ宛の書簡の一節は、「腹案が出来て、直ちに著手した」旨を告げてゐる。しかし、この時の腹案なるものがいかなる程度のものであつたかとか、初めて一八七八年に思ひついたものか否かとか——これまた折角の最近の資料によつて考察することにして、ただ今日までの幾多の論議に基づいて考察しえたところを記したいと思ふ。

今日まで、一般的にはフイレンツェに在る頃(一八六八年)マイコフ宛の手紙に述べてゐる「無神論」なるものが、この大作の原型であると思はれ、生前に彼と交渉のあつた人にも容認されて來た。すなはち、この手紙のう

ちで彼は言つてゐる。

「『無神論』といふ大長篇を一篇書き上げようと考へてゐます。(お願ひですから、内密にしておいて下さい。)しかし、これにとりかかる前に、私は無神論者や、カトリック教徒や、正統派の本を殆んど全部讀破する必要があります。それにはまた、仕事の完全な保證をうけてさへ優に二年はかかりませう。モデルになる人物はあつた。われわれと同一社會の露西亞人で、もういい年の、あまり教養はないが、また全然なくもない、さうして地位も持つてゐないことはない男ですが、——もういい年になつて、突然、神の信仰をうしなつてしまふ。一生涯、かれは自分の職務のことしか考へたことがなかつた。かれは古い習慣から抜け出ようとはしなかつた、さうして四十五になるまで別段際立つたこともせずして來たのでした。(この謎の心理的解決です。この男は、深い感情をもつた露西亞人です。)神への信仰を失つたことは、かれに對して大きな大影響を與へます。(小説の動きとプロットは——非常に大きい。)かれは新しい人々や無神論者たち、スラヴ人、西歐人、露西亞の異教徒、隠者や僧侶たちとさかんに往來し始める。わけても、波蘭人のゼスイット派の宣教師にはまゝりこんでしまふ。かれはさまざまの宗教の深奥を極めることによつて、その波蘭人の宣教師を離れ、さうして晩年には基督と露西亞の大地、つまり露西亞の基督及び露西亞の神を認めることになる。お願ひです、誰にも話さないで下さい、私にとつては、この作を書きあげたら、もう死んでも思ひ残すところはないほどなのです。」(横田端穂氏の譯による)

その翌くる年の三月、ドレスデンから同じくマイコフに宛てた手紙においては、更に接近してゐる。その中には、

「『ザリヤー』へ載せようとしてゐるものはこの二年間、私の頭にあつたものです。……これけ私の最後の長篇

になるだらうと思つてゐます。量はちやうど『戦争と平和』くらゐになります。さうして、この作の思想はきつとあなたには褒めていただけることと思ひます。實際、以前にあなたと話したことが、どんなに今になつて思ひあたることでせう！ この長篇は五つの大きな部分から成るものです。（各一つが十五巻になります。プランはこの二年間にすつかり出来てしまひました。）各篇はそれぞれに獨立してゐます。……舞臺は未だ四十年のことです。この大長篇の大見出しは「偉大なる罪人の生涯」といふのですが、各篇それぞれ表題をもつことにします。各部にわたる主導的な根本の問題は、——私自身が生涯にわたつて意識的にも無意識的にも苦しんで来たところのもの、——つまり、神の存在といふことです。主人公は一生涯の間に、或ひは信仰家となり、或ひは狂信者となり、或ひは學徒となり又更に無神論者ともなるのです。……第二篇の舞臺は全部僧院です。私は一切の希望をこの第二篇へかけてゐます。……第二篇を書くためには私はどうしても露西亞にゐる必要がある。」と述べてゐる。いふまでもなく、このプランは十年の後に、そのまま形となつて現はれた譯ではなかつたが、最後の長篇になるものと豫感して、彼が絶えず想を練つてゐたとふ事實は、この小説を讀むにあつて充分に首肯せねばならぬ。

この小説において、作者が示さうとしてゐたものが、「生涯にわたつて意識的に、苦しんで来たところの神の問題」であつたとすれば、この計畫以前の彼の小説にあらはれた神の問題を考察することは、當然、興味のあることとなるであらう。

「貧しき人々」の時代の彼は必らずしも、後年の作品に見られるやうな宗教觀念をもつては居らなかつた。ペリンスキイやベトラシエフスキイのグループのうちにあつて、彼自身も、この派の人たちの不可知論の影響をかかりうけてゐた。常に基督をもつて、倫理的理想の至高の人格的あらはれと感じながらも、希臘正教の教條にはなほ

否定的な立場をとつてゐた。やがて、牢獄の生活の間に、彼の心のうちには精神的な不安が生じ、何かしら、宗教の力に支持を求めようとする渴望があらはれて、釋放後の一つの手紙には、『自分も不幸のうちに信仰を求めようとする渴望を牢獄の中で感じもし、經驗もして来た。神は私に安らひを與へる』といふ意味の言葉を述べてゐる。この手紙は、かなりの信心家と噂されてゐる夫人に宛てたものであつたが、果してこのとき、痛切な宗教的渴望を感じてゐたのであらうか。この渴望は、兄への手紙にも、「地下室の手記」にもあらはれてゐないばかりではなく、ウランゲリ男爵はセミバラチンスクでドストイエフスキイが、殆んど教會に顔を見せず、僧侶に對しても並々ならぬ憎惡の念をいだいてゐた由を物語つてゐる。しかしながら、「罪と罰」に至るまでの多くの作品に希臘正教や、基督教理への服従を見ることは容易である。ただ、釋放後にトボリスクからの『宗教の渴望を感じた』由の手紙に見えるほど積極的な信仰は、少くとも、「白痴」以前には見られなかつたのである。いふならば「白痴」における宗教觀も、「カラマゾフの兄弟」のそれに到るまでの一つの段階と見える。

「露西亞的基督」乃至は「露西亞的神」といふやうな言葉が、自然に彼の言葉となつてあらはれたのは、外國生活の時代、少からぬノスタルヂヤに襲はれてゐる時であつた。「第二篇を書くためには、どうしても露西亞にゐる必要がある」——このこと一つのみをもつてしても、露西亞へ歸りたかつたのである。しかも、露西亞には少からぬ債權者が待つてゐた。伊太利から、ドレスデンからの手紙といふ手紙は、望仰の念と債鬼の惱みを物語るばかりである。この時代に書かれた「悪靈」には、すでに彼の信仰への情熱が窺はれる。シャートフは「私は露西亞を信ずる。私は正教を信ずる、……私は基督の肉體を信ずる、……私は基督が露西亞に再現するを信ずる、」といひ、「神は？」との質問に對しては、「私……は神も信ずるであらう。」と答へてゐる。シャートフのやうに彼もまた基督を、露西亞を、正教會を（以前と全く異つた意味で）信ずるやうになつた。明らかに一八七一年、露西亞に歸つ

て来た時には、心から新しい信仰の情熱に燃えてゐた。この時はすでに五十歳になつてゐた。ここで注意を要するのは、その當時強ひていへば十九世紀の大半を通じて、露西亞支配階級の教養ある人々や、貴族や、保守的なインテリゲンチヤが、正教の子でありながら、不可知論に（少くとも趣味としては）支配されてゐたことである。西歐の天才が、「私の心は唯物論的である、しかし、私の理性はこれとは反対だ。」といつたやうなことが當時の露西亞には極めて容易に考へられてゐたやうに見える。ドストイェフスキの晩年の信仰にもまた、實證主義的な經驗主義的なものがあつた。すなはち、彼もまた彼の時代、その階級の傳統を離れることは出来なかつた。彼は「作家の日記」においても、實證主義的な觀念を到るところに見せてゐる。それにも拘はらず、ドストイェフスキの宗教なるものには、何かしら神祕的な要素があり、これをもつて彼を神祕主義者と見做せたりする要素が認められるのである。これを彼の癲癩の發作に招來されるものと見做す者も少くはなかつたやうである。すでに「白痴」の主人公のうちに、この問題についての一つの鍵がなかつたかと私には思はれる。尤も、彼は神祕主義の一つの基礎ともいへる人間と神との交流を物語つたことは一度としてなかつた。

ドストイェフスキが晩年に到達し、ソロウイヨフの影響のもとに、いよいよ正教會の教義に近づいて行つた宗教觀は、つひに「カラマゾフの兄弟」に到つていよいよ明白なものとなつた。「カラマゾフの兄弟」は彼の晩年における最大の傑作であり、文字通りの「最後の長篇」となつた。

この小説の發表される凡そ十年まへに、量においては、トルストイの「戦争と平和」ほどになるといひ、假りに「大罪人の生涯」と名づけられてゐたこの小説の原型ともいふべきものの主導的な根本問題は、自分自らが、生涯にわたつて意識的にも無意識的にも苦しんで来た問題、すなはち、神の存在といふことであり、その主人公は一生

涯の間に、或ひは信仰家となり、或ひは狂信者となり、或ひは學徒となり、更にまた無神論者となる筈であつた（一八六九年三月、マイコフ宛の書簡による）罪と情熱との人であり、無神論者ともなり、つひには修道院に入り、變つた人間となつて再び世に出る筈であつた。しかし、その構想も「カラマゾフの兄弟」が世に出た年（一八七八年）までの間に、十年に近い歳月を閲し、その間に「悪靈」或ひは「未成年」のために、その一部は惜し氣もなく利用された。このことは最初に計畫した「白痴」の或る性格が、「悪靈」のうちに轉換されたことを思ひおこさせる。（「白痴」のノートによる。）かくの如くにして、「カラマゾフの兄弟」のうちに示さるべき數奇な生涯をおくる筈の一人の人物は、十年を経て、三人に分裂させられたのであつた。すなはち、ドミトリイ、イワン、アリョーシヤの三人である。

父のフォードル・カラマゾフは、「やくざで放埒なばかりではなく、それと同時に譯の分からない人間のタイプ——尤も、同じ譯の分からない人間のうちでも、自分の財産に關する細々した事務を巧みに處理することが出来る、しかも、それだけが身上かと思はれるやうな類ひの人間であつた。例へば、殆んど無一物で世間へ出て、地主とはいつても極めてささやかなもので、よその家へ行つて食事をしたり、居候に轉がりこむことばかり狙つてゐたが、死んで見ると、現金で十萬留も遺してゐた」ほどの男で、貪婪にして淫蕩きはまりない人間であつた。これは農奴制時代の遺物であり、十八世紀佛蘭西哲學の缺點のみを吸収したやうな否定的な、シニカルな男であつた。この肉慾の奴隷は子供の前でいふのであつた、「わしはな、……こんなことをいつても、お前たちのやうな仔豚同然なねんねには分かるまいが、わしにはな、……これまでの一生を通じて、見るに堪へんといふ女は一人もなかつたよ、これがわしの原則でなあ！ 全體、お前たちに分かるか知らん？ どうして、どうして、お前らにこれが分かつてなるものか！ お前らの體内には血の代りに、まだ乳が流れて居るのだ、まだ鼓が脱けきらんだ！ わしの

原則によるとな、どんな女の中にも、法して他の男どもには分からんやうな、頗る、その、面白いところが見つけ出せるのだ——しかし、自分で見つけ出す眼がなくてはならん、そこが肝腎かなめなんだ！ 何よりも手腕だよ。わしにとつては不器量な女といふものがないのだ。女であることがもう、興味の半ばをなして居るんだよ、いや、こんなことはお前らに分かる筈がない。オールド・ミスなどといふ手合の中からでも、世間の馬鹿どもが、どうしてこれに気がつかずに、むざむざ年を食はしてしまつたのかと、驚ろくやうなところを探し出すことが、時々あるのだよ。」彼にとつては、女でさへあればよいのである。晩年に「未知のおそろしいもの」を感じて、不安と寂寞に陥つたとはいへ、つひに救はれなかつたこの情慾の槽は、おが子と妖婦を争ひ、つひには日蔭の子に殺されるのである。

長男ドミトリイは、「青少年時代は、ぬらりくらりとして過ごしてしまつた。中學校も中途でよして、或る陸軍の學校に入り、後にコーカサスへ行つて任官したが、決闘をやつたために位を貶され、後にまた元に復ると、今度はひどく放蕩をして、比較的多額の金を浪費した。父から仕送りを受けるやうになつたのは丁年に達してからのことで、既にそれまでかなりの借金をしてゐた。父を初めて見たのも丁年に達してからのことだ、幼少の時代は、自分の家を亂行の巢窟にしてゐる父の許を離れて、下男に育てられた。彼もまた、放蕩者ではあつたが、自ら苦惱を甘受しようとする清らかな精神の持主でもあつた。すばらしい體格をもちながら、顔には病的な感じがあるといふ外面の風貌は、彼の内なる魂のうちにもあらはれる。善の要素と惡の要素、ソドムの理想とマドンナの理想は、互ひに彼のうちにおいて相せめぐのである。

次の子のイワンは、合理主義の西歐の子であつた。彼は父からうけた貪婪な利己主義と自負心のほかに、歐羅巴の唯物的個人主義的な思想の悪影響のみをうけたやうな人間であつた。彼の無神論と道德的虛無主義は父親殺しの

原動力となる。殺人の下手人は誤れる裁判によつて、ドミトリイといふことになるが、事實はイワンの精神をうけたスメルヂャコフの仕業であつた。イワンもまた母が亡くなると、父に見すてられ下男の手にかかり、やがて弟アリョーシヤと共に將軍夫人の手に引きとられて成長したが、「長ずるに従つて、決して臆病な譯ではないが、何となく氣むづかしい、引つ込み思案の少年になつて、十くらゐの頃から自分たち兄弟はやはり他人の家で、他人のおなだけで育つてゐるのだ、それに自分たちの父は、口にするのも恥づかしいくらゐの人間だなどといふことを洞察してゐたらしかつた。」頭腦の明晰な彼は大學に入り、苦學をし、新聞に様々な専門的な書物についての批評を掲載し、文學者仲間にも有名になつた。殊に大學を卒業した頃に書いた教會裁判問題に關する評論は刮目すべきものであつた。が、彼は徹底的な無神論者となり、矛盾せる現實に絶えず惱まされる。彼の哲學は「大審問官」(第五篇V)のうちにはあらはれてゐるやうに、神の創造の意義を否定してやまなかつた。しかも、冷やかな理性のかけに、人間性の微かな光りが見える。彼の冴えた理智は反省となつて、つねに懷疑となり、不安となり、否定となつた。

末の子アリョーシヤは、忌まはしい環境のうちに育てられながらも、「人を愛した。そして一生涯、人を信じ切つて暮らしたらしいが、曾て誰一人として彼を馬鹿だといふものもなければ、お人好しと考へる者もなかつた。彼の内部には、自分は他人を裁く人となるのはいやだ、それに他人を非難することも好かないから、どんなことがあつても人を咎めない、とでもいふやうなことであつた。」二十歳の時に、將軍夫人の家から淫蕩の巢に歸つて來たが、童貞で、純潔な彼は、見るに忍びない時に、黙々としてその場を外すばかりで、相手が誰であらうとも、いささかの輕蔑をも非難をも色に出さなかつた。「人にも好かれた。幼い頃からさうであつた。」親戚のミウソフは彼についていふのである。「この男は、恐らく、世界中にただ一人の、類のない人間かも知れない。あれはたとひ人口百萬ほどの不案内な都會の大廣場へ、いきなりただ一人で、一文なしで打つちやられても、決して餓死をした

り、凍え死をしたりすることはないだらう。すぐに人が食べものをくれたり、仕事の世話をしてくれたりするから。人がしてくれなくとも、自分ですぐにどこかに職を見つける。しかも、それはあの人間にとつて骨の折れることでもなければ、屈辱でもなく、また世話をしてくれる人もそれを苦にしないどころか、かへつて満足に思ふだらう」と。彼は中學の業なかばにして退き、母の墓をさがしに故郷へ歸つて来る。が、間もなく修道院へ入りたいたい希望を打ち明けて、父の同意を得、修道院に入る。それはただ、「修道院の生活が彼の心をうち、いはば、世界悪の闇から愛の光明を冀ひ求める彼の魂の究極の理想として、その頃の彼の心に映じたからである。またこの修道院の生活が彼に驚異の念をよびさせさせたのも、その中に、その頃、彼の目して並々ならぬ人物とする、有名な長老ゾシマを發見したからであつた。彼はやむにやまれぬ心の初戀のやうな熱情を捧げつゝして、この長老に傾倒した。」ゾシマ長老は罪と懺悔の道を超えて、キリスト教に入つた人であり、生れは地主階級であり、軍務に服したこともある人であつた。この長老の教へをうけて、日常生活にキリスト教の理想をもたすために世に出て行くのがアリオシヤであつた。

彼の果す役割によつて、最初にドストイェフスキイが「この物語の主人公」といつたアリオシヤをこそ、事實においても、この小説の主人公と目さなければならぬ。しかも、作者はイワンを中心とする第五篇 *Pro et Contra* を「露西亞報知」に寄せたとき、編輯者リビエーモフに宛てた手紙のうちで、「私のつもりでは、この第五篇はこの小説の頂點なのです。」(一八七九年五月十日)といつてゐる。とはいへ、この頂點といふことは、小説の思想的興味、興味の頂點であり、構成の上での力點であらうとも、依然として主人公はアリオシヤであらうと思はれる。絶えず、主人公は長兄ドミトリイに追ひのけられようとする。

この小説は二つの大きな主題を含んでゐる。すなはち、惡の原理を代表するイワンとキリスト教的理想の化身ア

リョーシヤとの論議と、罪と苦惱を通じてのドミトリイの贖ひとである。しかし、第二の主題は第一の主題を蠶食しようとする。

ドストイェフスキイはこの小説の筋を決めてから、大きな事件、——父親殺しの問題に突き進んでゐる。父と長子ドミトリイは一人の女に對する競争者であつた。相手の女性グルーシエンカは、「白痴」のナスターシヤ・フィリツポヴナを思はせるやうな快樂の女性であり、この女性ゆゑに父と子はいがみ合ひ、殴り合ひ、幾多の醜い場面を演ずるのである。父は「零落した宿なしで、夜は菜園の中で寝るやうな」女に産ませたと傳へられる下男のスメルチャコフに殺される。が、嫌疑は戀敵のドミトリイにかかる。スメルチャコフは次男のイワンに教唆されたのであるが、彼はイワンに對して、「罪と罰」のスウイドリガイロフがラスコオリニコフに對するやうな役割を演ずる。彼はつひに自ら壁の釘にかかつて自らの生命を斷ち、ドミトリイは自らの與り知らぬ殺人の嫌疑によつて、シベリヤ送りを宣告される。その後、イワンは自らの本原的な罪惡を感じて、いふべからざる苦惱に陥る。

この小説の意圖における頂點は、作者自らがいつて居るやうに、第五篇である。この篇においてイワンが語る神への叛逆に對しては、次の篇「露西亞の修道僧」の中で、アリオシヤならぬ、臨終の床にある長老ゾシマが答へてゐる。

*

「カラマゾフの兄弟」の最後の問題は、キリスト教徒におこる重大な問題——苦惱と罪の問題であつた。ドストイェフスキイは「白痴」において、先づ苦惱、或ひは忍従の問題に近づき、肺を病んで死にかかつてゐる少年イッポリットの口を通じて、幾多の見解を示してゐる。自然の世界はイッポリットにとつては、キリスト自身でさへも遂には服従せざるを得なかつた「何かしら巨きな、凶暴きはまりない、物いはぬ獸のやうに、より正確にいへば、

極みなく貴い偉大なる存在物を、譯もなく引つつかんで、粉々に打ち碎き、ぼんやりと何の感じもなしに呑み込んでしまつてある最新式の何かの巨きな機械のやうに「思はれた。彼には、「全體としての宇宙の調和」のために、自らの「取るにも足らない生命、原子の生命が必要だ」といふ手輕な説明には満足できなかった。「若しも『我は在り』といふ自覺を與へられたものとすれば、世の中は幾多の誤謬をもつて組織されてゐて、さうでなければどうしても立つて行けないのだとしても、そんなことはもう私には知つたことではないのである。」と彼はいふ（白痴第三篇VII参照）。「白痴のうちでは挿話的な、一時的なものであつた「宇宙の調和」についての問題は、十二年を経て、「カラマゾフの兄弟」のうちに發展し、イワンはアリョーシャとの會話（第五篇IV）のうちで、「幼兒虐待の話をして、「人間同志の間の罪惡の連帶關係は僕も認める。しかし子供との間に連帶關係があるとは思へない。若し子供も父のあらゆる惡行に對して、父と連帶の關係があるといふのが眞理ならば、その眞理はあの世に屬するもので、僕なんかには分らない。」といひ、神聖なる調和の問題に及び、「一體、この世界に許すといふ權利をもつた人間があるだらうか？ 僕は調和なぞ欲しくない。つまり、人類に對する愛のために欲しくないといふのだ。僕はむしろ贖はれない苦惱をもつて終始したい。たとひ僕の考へが間違つてゐても、贖はれない苦惱と、癒やされない不満の境にとどまることを潔しとする。それに調和といふ奴があまり高く値踏みされてゐるから、そんな入場料を拂ふことは、どうも僕らのふところ工合に合はないんだ。だから、僕は自分の入場券だけ急いでお返しする。若し僕が潔白な人間であるならば、できるだけ早くお返しするのが義務なんだよ。だから僕はそれを實行するのだ。ねえ、アリョーシャ、僕は神様を承認しないといふ譯ではない。ただ『調和』の入場券を謹んでお返しするだけだ。」といふ。苦惱によつて永遠の調和を購ふといふ掟を、虐げられる子たちに適用させる時、そこにイワンは著しい不合理を認める。が、アリョーシャの眼にはこの抗議が「謀叛」と映る。

アリョーシャは「苦惱の祝福」を信じてゐる。「哀しむ者はさいはひなり」といふ聖い言葉は、ドストイェフスキイにとつては非常な重要性をもつものであつた。ここから出發して、彼もまた露西亞の民間における「肉體的な苦しみが多ければ、それだけに精神的に多くの價値あるものを受けるといふ素朴な信仰をもつに至るのである。彼の持病の癩癩は、「神聖な病」と名づけられてゐた。病氣なるがゆゑに一般の健康人に見ることが出来ないものを見うるといふ考へは、すでに「罪と罰」のスヴイドリガイロフの言葉のうちにも示されてゐる。かうした凡ゆる苦惱に神的意義を附加することは、別の形において、「ファウスト」にも、ボードレールの詩にも見られ、また東洋の諸宗教にも見られぬことではなかつた。が、ドストイェフスキイにあつては、半ばロマンチックに、半ばは宗教的に、苦惱への嗜好（妙な言葉ではあるが）があつた。ホフラーコワ夫人の娘リーズは、彼女が戀してゐる幼な友達アリョーシャとのヒステリックな場面の後に、アリョーシャが遠ざかると、自ら閉めたドアの掛金をはづして、少しく細目にドアをあけ、その隙間に自分の指を入れると、力一ばい戸を閉めて指を押し、しばらくして手を引くのであつた。指は黒くなり、爪の間には血がにじんでゐる。これは彼女の一つの慰安であつた（第十一篇III）。氣ばらしのために自らが自らに加へる傷害をも作者は容認する（ここに心理學者の説く不満の一つの徴候がある）。

兎にも角にも、作者は苦惱をもつて罪の赦しのために絶対に必要なものであると考へてゐたのである。これは、罪が苦惱の原因であるといふ一般的なわれわれの間での概念とは相反してゐる。ドストイェフスキイにとつて、極めて重要なものと考へられてゐた罪の赦しなるものは、他人によつて容赦されるのではなく、罪を犯したる者自らによる赦しでなければならなかつた。この赦しは、ただ自ら進んで苦惱を苦惱に服し、苦惱を苦惱として受け容れることによつてのみ獲られる。

「罪と罰」の主人公は「罰を贖ふために、自分のうへに苦惱を受けようとし」(カトコフ、への手紙)、警察に行つて、「あれは僕です。あのとき官吏の後家婆さんと、妹のリザゼータを斧でうち殺して、金品を強奪したのは僕です。」(第六篇Ⅷ)と自白し、「悪霊」のうちから削除された「チホンの僧房」での一節において、「私は自分を赦したいために、かぎりない苦惱を求めてゐるのです」といふスタヴロギンの言葉に對して、チホンは次のやうな言葉を述べるのであつた。「若し、あなたに自分を赦すことが出来なすつて、御自分の苦惱によつて、ひたすらにこの赦しを求めておいでになるのですら、それはあなたが一切のものを信じてゐるといふことになります。」「カラマゾフの兄弟」におけるドミトリイは、罪の意識によつて、自分自らを救ふために一切の苦惱をうけようとする。かくの如くにして、苦惱、乃至は、忍従の問題に對するドストイェフスキイの解答は、罪の問題に對する答への一部と見做すことができる。それにしても、彼の罪に對する態度の發展は、彼の苦惱に對する態度とともに、大きな研究の對象となるべきものである。

彼のこれらの問題についての結論は、自己の内的經驗によつて達せられた。

長老ゾシマは亡き兄が臨終の床で、「ねえ、お母さん、ほんとにどんな人でも凡ての人に對して、すべてのことについて罪があるんです。」といった言葉を引用して、更に他人を審くといふことに及んだ時、「他人の悪行が、復讐心を起こさせるほどの堪へがたい憤りと悲しみを感じさせるならば、かうした心持は何よりも怖れ避けねはならぬ。つまり、他人の悪行について自分自身に罪があると感じて、直ちに赴いて自ら苦惱を探し求むべきである。苦痛をわが身にうけて最後まで堪へ忍んだなら、その時は心の怒りも和らぎ、眞に自分に罪のあることが悟れるであらう。」(第六篇Ⅱ)といふ。

一般の罪に各個人が參與し、負性をもつといふ精神を、私たちは彼の小説のみならず、多くの露西亞小説のうち

にも見ることが出来る。恐らく、ここに露西亞人のあの寛容性が潜んでゐるのであらう。

ここで、六十年代に西歐の制度に模倣して、陪審制度なるものが露西亞に設定されたとき、判決に滯滞を來したといふ事實を思ひおこす。すなはち、陪審員たちは、罪狀の明白な場合にも無罪放免をしようとしたと傳へられてゐるのである。ドストイェフスキイは、彼らの心境について物語り、——陪審員が席につくと、『われわれは被告より善いといへるか？ 若し被告の境遇にあたら、われわれは却つて一そう悪いことをしたかも知れぬ、してみると放免さるべきだ。』と考へるのが普通であるが、これは眞に慈悲であり、より高きキリスト教を保持してゐる證據だ、——といやうなことを述べてゐる。

「一人は一人の罪に責任を負ふべきである」といふ思想はドミトリイ・カラマゾフのものとなつた。彼は父の死ゆゑに、或ひは他のもののゆゑに自身の罪を感じて、苦惱を求め、いささかも自己の利益を考慮しなかつた。彼はドストイェフスキイの晩年の小説における最大の人物であり、世界文學の中においても、偉大なる悲劇的人物の一人であつた。彼が純粹詩の世界に入る場面は、この人物をして、ドストイェフスキイの小説中の唯一無比のものとならしめる。彼は好んで詩の言葉を語る。「美はおそろしいばかりぢやない、神祕なんだ、それが怖いのだ。つまり悪魔と神が闘つてゐて、しかもその戦場が人間の心なんだ。」(第三篇Ⅲ)と彼はいふ。彼は自然を讚美する、「ああ、自然は讚美すべきかな。」自然の風景に乏しいドストイェフスキイの小説において、ドミトリイが自然に對して敏感であつたといふことは、注目すべきことでなければならぬ。自然を愛する心、嵐のやうな生活力と熱情、しかも永遠の調和のために苦惱をも甘受する心——かやうなもの渦巻きを一身のうちに經驗するドミトリイは、現實の露西亞を代表し、冷やかな理性をもち、道徳的虛無主義と深刻な無神論の子(「白痴」)においてわれわれが見るやうにキリスト教の理想より見るとき、不信と冷酷な心をもつものは、事實上の犯罪以上に貶責せられねばなら

ぬ。であつたイワンは合理主義の西歐を代表し、キリストの正義と愛と寛容に生きるアリョーシヤは偉大なる使命をもつ未來の露西亞を象徴するとは屢々語られたところであつた。



カラマゾフ兄弟 下

定價三五〇圓

昭和二十四年三月十五日印刷
昭和二十四年三月二十日發行

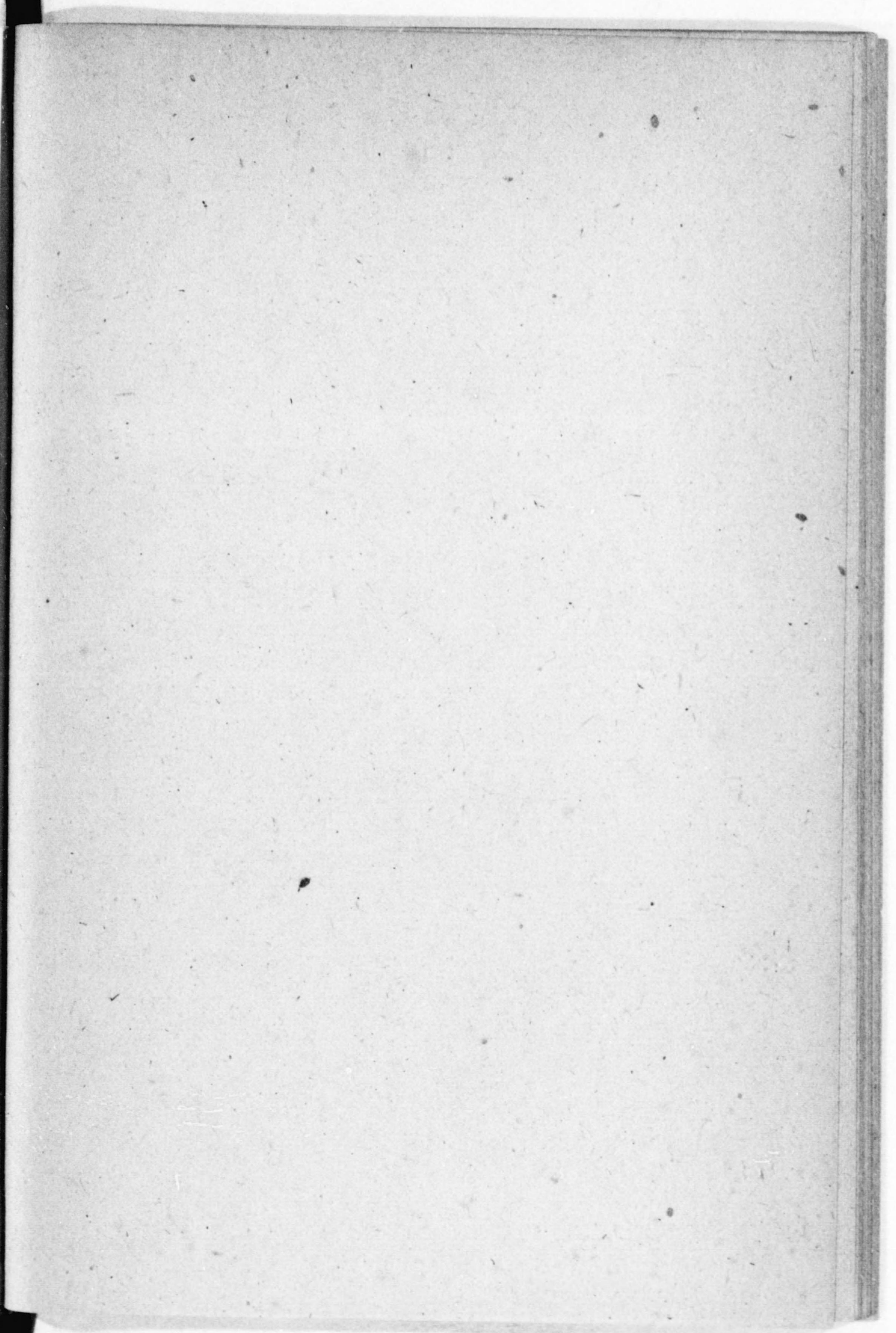
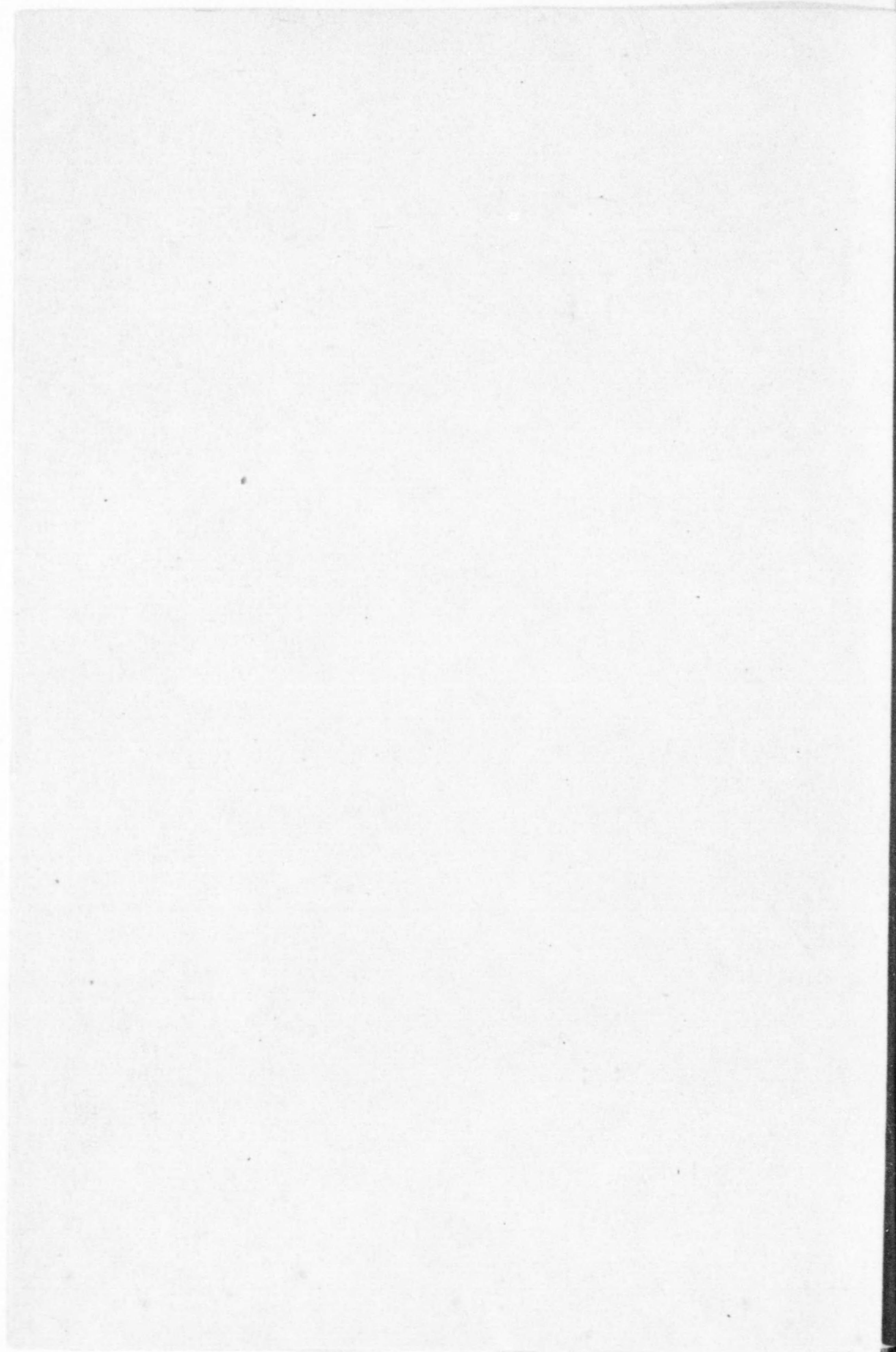
譯者 中山省三郎

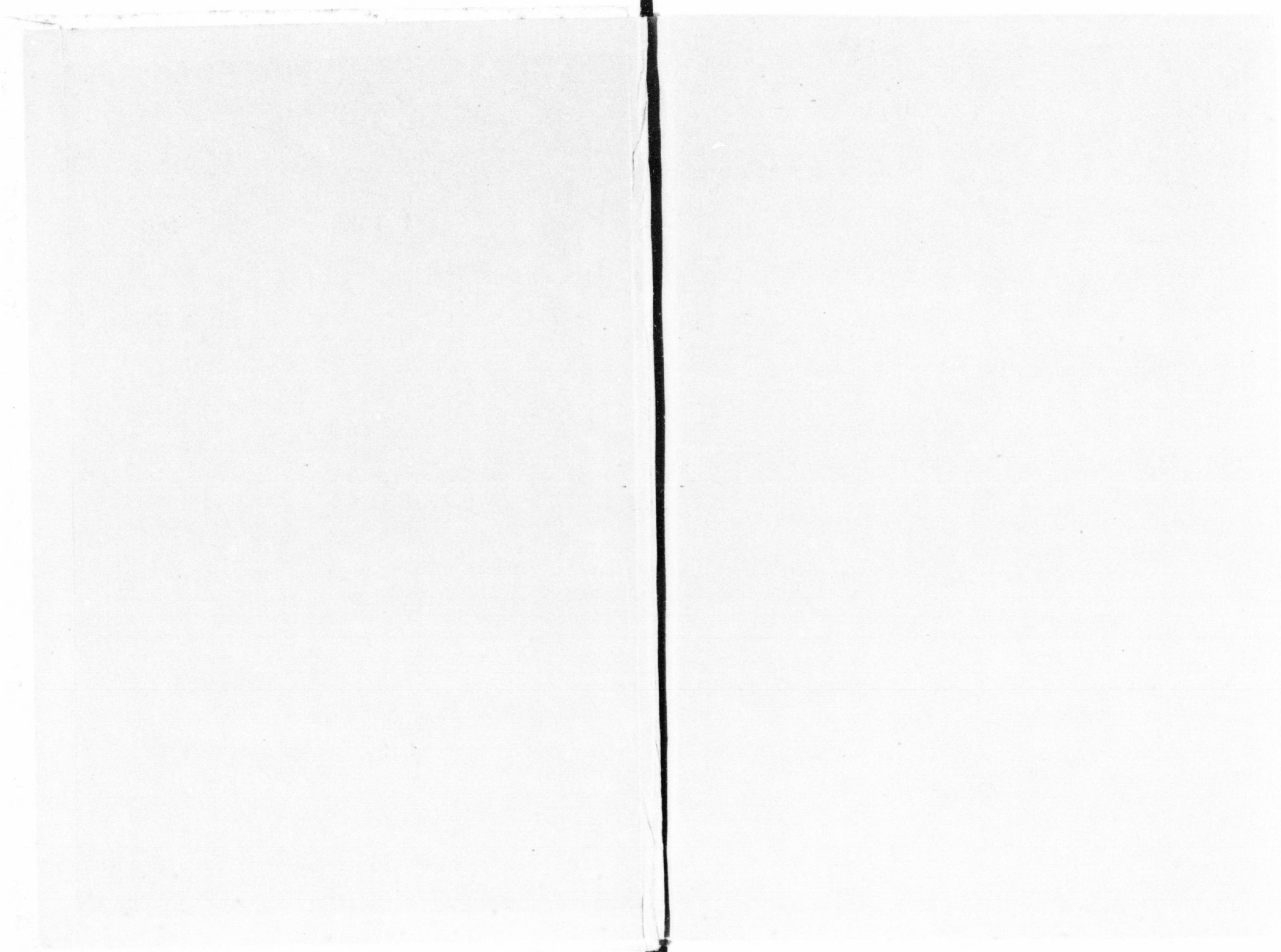
發行者 田中秀吉

印刷所 河北印刷工業所

發行所 株式會社 全國書房

配給元 日本出版配給株式會社
東京都千代田區神田區神田區
東京千代田區神田區神田區
東京千代田區神田區神田區





終